

平安京右京六条一坊

- 平安時代前期邸宅跡の調査 -

京都市埋蔵文化財研究所調査報告第 11 冊

1992

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

巻頭図版 説明

「寝殿造り」復元模型

展示場所 京都リサーチパーク

(京都市下京区中堂寺南町1) 中庭展示場

復元縮尺 40分の1

発見した遺構から「寝殿造り」を復元したもので、展示場は遺構が発見された京都リサーチパークの中庭に建てられている。一般市民の方々が自由に見学できるように配慮されており、出土した平安時代の器や銭貨、柱の根元などと共に展示されている。

写真 上) 全景 南正面より

下) ハレの場 東より

(詳細は、報告書のIV章を参照)



寢殿造復元模型

序

この報告は、京都市下京区中堂寺南町にある旧大阪ガス京都製造所跡地の一部が、京都リサーチパーク株式会社に転換されるについて事前発掘調査を行った記録であり、調査成果である。調査は昭和62年(1987)8月に行われた2日間の試掘を経て同年9月に始め、昭和63年(1988)4月に終えた。

元来ガス会社になる前は明治40年(1907)に始まる京都競馬場であり、それ以前は近郊野菜栽培地でもあったから、土地の損傷をうける度合いは比較的少なく、ここに当初建てられた建物は使われたあと、立ち腐れのままであったが、そののちを開墾した状態で出土した。土取跡や近來のガス製造所貯蔵用シリンダータンクの跡を除けば、遺構の残存状況は頗る良好であった。

その敷地は推定平安京右京六条一坊五町の地であって、元来は正方形であるべきだが北に若干ひろがり、楊梅小路の南辺を含めて発掘することができたが、南限の六条大路の北辺は敷地の南限と重なり、同様に西坊城小路西辺も不可能であった。ただ西辺は、皇嘉門大路であったのでその東辺を発掘した。結局、遺構は平安時代のものとしては、東辺に寄り、住宅の一構えを掘り出した。

住宅を一構えで掘り出したということは、今までの平安京の発掘では得られなかった。その理由は、当初の一構えの住宅がそのまま今日まで伝えられることはなく、のちの新しい時代に宅地が細分化された上に、所有者の変わることから、新しい所有者持ち分のみ調査となつて、成果として出た遺構の解釈に苦しむことによる。ところでここに報告する分はガス会社の敷地として広く、会社創立当初に所有された分の一部(それは平安京右京六条一坊五町にあたる面積になる)についての調査である。上に述べたような調査をするには欠陥のある土地ではなかった。

加えて右京の土地というのは、比較的早く衰亡したので、殆ど繰り返し使用されず、田もしくは畠であり、湿地ではクワイ、セリを栽培していたので深く掘り下げることなく遺跡があらわれ、遺跡を読み取るのが可能な所である。そういう条件が揃った所が出たのである。

そうした所であるから、一構えの邸宅が出て、衣食住の生活形態で、ハレとケのふりわけもこの邸宅地ではできるのである。むしろ、従来の住宅を論ずるのが、文献を資料として多くはハレの描写のみに限られていたのが、ケの部分にも資料を発見したのは、その限りでも大きな収穫を得たというべきである。

大きな成果の痕跡を残すことは不可能となった段階で、この調査の委託者京都リサーチパーク株式会社ではその模型の四十分の一を作成、この模型と共に出土した遺物のいくつかを展示する施設の建物を作成された。ここで以上のような京都リサーチパーク株式会社の温情で終始されたことに満腔の謝辞をささげたい。

平成4年5月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 杉 山 信 三

凡 例

- 1 本書は、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が、昭和62年(1987)から昭和63年(1988)にかけて旧大阪ガス京都工場跡地東地区(京都リサーチ・パーク建設予定地)で行った発掘調査報告書である。
- 2 本書で使用した地図は、京都市長の承認を得て、同市発行の都市計画基本図「2千5百分の1」および京都市編集『京都の歴史8 古都の近代』1975の別添地図を調整したものである。
- 3 方位および座標は平面直角座標系VIにより、標高は海拔高(T.P.)を使用している。Xは-111km代、Yは-23km代である。
- 4 遺構番号の付け方・地区割りとその表示法はI章2節で示している。
- 5 遺物番号は実測図・拓本・写真ともに共通している。番号は実測図・拓本の掲載順に付けた。
- 6 遺物の出土遺構名・地区・層位は巻末に表とした。
- 7 本文に関連する図版・図・表は項見出しおよびゴシック体見出しの後に示した。
- 8 本文の注の番号は各章ごとに付け、注は各章末に集めた。
- 9 参考文献は巻末に集めた。

本文目次

I 章	調査経過	1
1 節	平安京研究の現状と課題	1
2 節	調査の契機と方針	4
3 節	調査の概要	6
	イ 試掘調査	6
	ロ 発掘調査	6
	ハ 整理・報告作業	9
4 節	発掘調査日誌抄	11
II 章	遺構	19
1 節	条坊遺構	19
	イ 皇嘉門大路	19
	ロ 楊梅小路	20
2 節	町内の区画遺構	22
	イ 平安時代前期	22
	ロ 平安時代末期・鎌倉時代	23
3 節	建物遺構	26
	イ 平安時代前期	26
	ロ 平安時代末期・鎌倉時代	31
4 節	井戸遺構	33
	イ 平安時代前期	33
	ロ 平安時代末期・鎌倉時代	35
5 節	池遺構	38

6 節	土器溜遺構・瓦溜遺構・方形土壇	38
イ	土器溜遺構	38
ロ	瓦溜遺構	39
ハ	方形土壇	39
7 節	その他の遺構	40
イ	湿地遺構	40
ロ	土取穴	41
ハ	耕作関係の遺構	42
ニ	京都競馬場跡	42
III章	遺物	45
1 節	土器	45
イ	平安時代前期	45
ロ	平安時代末期・鎌倉時代	53
2 節	瓦	63
イ	平安時代前期	63
ロ	平安時代中期・後期	64
ハ	平安時代末期・鎌倉時代	65
3 節	その他の製品	70
イ	木製品	70
ロ	石製品	72
ハ	土製品	73
ニ	銭貨	73
4 節	植物遺体	75
5 節	壁土	80

6 節	平安京造営前の遺物	82
イ	土器	82
ロ	木器	87
ハ	石器	87
IV章	考 察	94
1 節	平安時代前期の宅	94
イ	宅の広さ	94
ロ	建物の配置計画の要素	96
ハ	宅の構成	98
ニ	ハレの場	99
ホ	ケの場	101
2 節	五町の景観・土地利用の復元	103
イ	景観の復元	103
ロ	土地利用の復元	104
3 節	平安時代末期の壁土	106
イ	文献にみる壁土	106
ロ	ほかの遺跡出土の壁土	106
ハ	五町の壁土の特徴	107
V章	結 語	110
1	廊のあるハレの部分	110
2	ケの部分	111
3	邸宅の周辺の部分	112
4	結び	112
	文献リスト	114
	遺物リスト	117

図 版 目 次

- 図版 1 遺構図面 遺構実測図版割付図
- 図版 2 遺構図面 五町宅地跡主要部分の概略
- 図版 3 遺構図面 遺構図 E35Y 付近
- 図版 4 遺構図面 遺構図 F31V 付近
- 図版 5 遺構図面 遺構図 E45J 付近
- 図版 6 遺構図面 遺構図 F41F 付近
- 図版 7 遺構図面 遺構図 F31W 付近
- 図版 8 遺構図面 遺構図 F31X 付近
- 図版 9 遺構図面 遺構図 F41C 付近
- 図版 10 遺構図面 遺構図 F41D 付近
- 図版 11 遺構図面 遺構図 F41M 付近
- 図版 12 遺構図面 遺構図 F41N 付近
- 図版 13 遺構図面 遺構図 F41V 付近
- 図版 14 遺構図面 遺構図 F41W 付近
- 図版 15 遺構図面 遺構図 F41X 付近
- 図版 16 遺物図面 土器溜 U058 出土の土器群
- 図版 17 遺物図面 溝 V019 出土 (481 ~ 506) ・土器溜 0019 出土 (507 ~ 531) の土器群
- 図版 18 遺物図面 井戸 S013 出土の土器群 (532 ~ 587)
- 図版 19 遺物図面 軒丸瓦 (平安時代前期)
- 図版 20 遺物図面 軒平瓦 (平安時代前期)
- 図版 21 遺物図面 軒丸瓦 (平安時代末期・鎌倉時代)
- 図版 22 遺物図面 軒平瓦 (平安時代後期～鎌倉時代)
- 図版 23 遺物図面 軒平瓦 (平安時代末期・鎌倉時代)
- 図版 24 遺物図面 木製品 (1)
- 図版 25 遺物図面 木製品 (2)
- 図版 26 遺構写真 1 調査前の状態 (西北から)
2 1区全景 (北から)

- 図版 27 遺構写真 1 3区全景(西北から)
2 5区全景(西北から)
- 図版 28 遺構写真 1 皇嘉門大路(溝 D009、北から)
2 皇嘉門大路(E55D区、東から)
- 図版 29 遺構写真 1 楊梅小路南側溝(溝 V019、東から)
2 門 84(東から)
3 土壙 X061(西南から)
4 楊梅小路(F31U付近、西から)
- 図版 30 遺構写真 1 濠 B016(北から)
2 町内の区画遺構(F41F区、北から)
- 図版 31 遺構写真 1 ハレの場全景(北から)
2 ハレの場全景(西から)
- 図版 32 遺構写真 1 正殿(建物 14、東から)
2 北の対屋(建物 11、北から)
- 図版 33 遺構写真 1 東北の対屋(建物 16、北から)
2 東北の対屋付近(西北から)
- 図版 34 遺構写真 1 廊 19 付近(東から)
2 西の対屋(北から)
- 図版 35 遺構写真 1 政所(建物 01、北から)
2 ケの場全景(西北から)
- 図版 36 遺構写真 1 倉(建物 02、北から)
2 大炊屋(建物 04、西から)
- 図版 37 遺構写真 1 建物 05(西北から)
2 大炊屋付近(西から)
- 図版 38 遺構写真 1 長倉(建物 06、東から)
2 東北の雑舎(建物 07、北から)
- 図版 39 遺構写真 1 厨屋(建物 09、東から)
2 建物 65 付近(西から)
- 図版 40 遺構写真 1 建物 51 付近(西南から)
2 建物 61・62 付近(西から)

- 図版 41 遺構写真 1 柱穴の状態（建物 15、柱穴 F41W065）
2 柱穴の状態（建物 11、柱穴 F41S045）
- 図版 42 遺構写真 1 柱穴の状態（建物 65、柱穴 F41A047）
2 柱穴の状態（建物 51、柱穴 F31 W 092）
- 図版 43 遺構写真 1 井戸 U057（北から）
2 井戸 E005（東から）
- 図版 44 遺構写真 1 井戸 S013（東南から）
2 井戸 S013 の枠組み細部
3 井戸 S013 の断ち割り断面（南から）
- 図版 45 遺構写真 1 井戸 R059（北から）
2 井戸 J040（南から）
- 図版 46 遺構写真 1 井戸 C068（東から）
2 井戸 C068 の断ち割り断面（南から）
- 図版 47 遺構写真 1 井戸 A036（北から）
2 井戸 A036 の断ち割り断面（東から）
- 図版 48 遺構写真 1 井戸 J018（東南から）
2 井戸 J018 の断面（南から）
- 図版 49 遺構写真 1 土器溜 0019（東から）
2 土壙 B103（東南から）
3 土壙 T066（西から）
- 図版 50 遺構写真 1 瓦溜 R002（東から）
2 方形土壙 J022・J042（東北から）
- 図版 51 遺構写真 1 南湿地（東北から）
2 北湿地（東から）
- 図版 52 遺構写真 1 焼石集積遺構 E019（北から）
2 京都競馬場跡（東上から）
- 図版 53 遺物写真 土師器（83 を除く）・黒色土器（83）
- 図版 54 遺物写真 須恵器（24・25・27・572 を除く）・緑釉陶器（24・572）・灰釉陶器
（25・27）
- 図版 55 遺物写真 白磁（29～31）・青磁（32～44）・輸入陶器（135）

- 図版 56 遺物写真 軒瓦（平安時代前期）
- 図版 57 遺物写真 軒瓦（平安時代末期・鎌倉時代）
- 図版 58 遺物写真 軒瓦（平安時代末期・鎌倉時代）
- 図版 59 遺物写真 木製品（1）
- 図版 60 遺物写真 木製品（2）
- 図版 61 遺物写真 土製品（330・331・336・337・339～341）・石製品（323～328）・錢貨
（342・344～350）
- 図版 62 遺物写真 漆喰壁中の混和材（顕微鏡写真）

挿 図 目 次

図 1	調査地の位置	3
図 2	20m 方眼の地区名	5
図 3	調査区の配置	7
図 4	1 区調査風景	11
図 5	3 区調査風景	12
図 6	3 区北湿地調査風景	13
図 7	4 区全景	14
図 8	5 区調査風景	15
図 9	5 区井戸の調査	16
図 10	現地説明会	17
図 11	条坊遺構と区画遺構の分布 (1)	19
図 12	溝 D009 付近	20
図 13	門 84 付近	21
図 14	条坊遺構と区画遺構の分布 (2)	23
図 15	濠 B016 の護岸杭	24
図 16	柵 67	24
図 17	建物遺構の分布 (1)	25
図 18	建物遺構の分布 (2)	31
図 19	平安時代末期・鎌倉時代の建物遺構の典型例	32
図 20	井戸遺構の分布	33
図 21	平安時代前期の井戸遺構	34
図 22	平安時代末期・鎌倉時代の井戸遺構 (1)	36
図 23	平安時代末期・鎌倉時代の井戸遺構 (2)	37
図 24	池・土器溜・瓦溜・方形土壇の分布	38
図 25	土取穴の分布	41
図 26	基盤土層の分布	41
図 27	耕作関係の遺構の分布	42

図 28	京都競馬場跡	42
図 29	土師器	46
図 30	須恵器	47
図 31	黒色土器	48
図 32	緑釉陶器	48
図 33	灰釉陶器・白色無釉陶器	48
図 34	白磁 (29 ~ 31)・青磁 (32 ~ 44)	49
図 35	文字資料	51
図 36	井戸 U057 (45 ~ 49)・建物 (50 ~ 55・58) 出土の土器および文字資料 (56・57)	51
図 37	溝 U062 (59 ~ 72)・井戸 E005 (73 ~ 99) 出土の土器および文字資料 (71・83)	52
図 38	土師器 (100 ~ 102)・陶器 (103 ~ 105)	54
図 39	瓦器 (1)	54
図 40	瓦器 (2)	55
図 41	白磁	55
図 42	青磁	56
図 43	青白磁 (124 ~ 130)・輸入陶器 (131 ~ 137)	56
図 44	井戸 J018 (138 ~ 153)・井戸 R059 (154 ~ 159)・土壌 T066 (160 ~ 163)・方形土 壌 N011 (164 ~ 167)・井戸 C068 (168 ~ 173) 出土の土器	60
図 45	建物 (174 ~ 183)・土壌 B103 (184 ~ 195)・溝 F040 (196 ~ 202)・土壌 X061 (203 ~ 207)・井戸 B082 (208 ~ 212)・池 C004 (213 ~ 229) 出土の土器	61
図 46	井戸 J040 (230 ~ 251)・方形土壌 J042 (252 ~ 260)・溝 V008 (261 ~ 284) 出土 の土器	62
図 47	文字瓦の集成	64
図 48	タタキを残す軒瓦	65
図 49	同範瓦から復元した剣頭文の各種	66
図 50	記号を刻む瓦 (1)	67
図 51	記号を刻む瓦 (2)	68
図 52	石製品	72
図 53	土製品	74
図 54	銭貨	74

図 55	縄文時代の土器 (1).....	83
図 56	縄文時代の土器 (2).....	84
図 57	弥生時代の土器	85
図 58	古墳時代の土器	86
図 59	木器	87
図 60	石器 (1).....	88
図 61	石器 (2).....	89
図 62	刻印を残す瓦	90
図 63	遺構と四行八門の関係	95
図 64	建物の配置計画の要素	96
図 65	ハレの場の復元	100
図 66	ケの場の復元	102
図 67	壁土の観察	108

表 目 次

表 1	調査区要覧	8
表 2	調査の進行	10
表 3	平安時代前期の建物の要覧	30
表 4	井戸の基底標高	33
表 5	平安時代末期・鎌倉時代の建物類別	43
表 6	遺構出土の輸入陶磁器	57
表 7	平安時代前期の軒瓦の出土遺構一覧	69
表 8	平安時代末期・鎌倉時代の同范瓦の出土遺構一覧	69
表 9	主要遺構出土の平安時代末期・鎌倉時代の軒瓦	69
表 10	木製品の出土遺構一覧	71
表 11	湿地・古流路出土の植物遺体分析結果	76
表 12	平安時代・鎌倉時代の木本・栽培草本種実分析結果	78
表 13	平安時代・鎌倉時代の雑草分析結果	79
表 14	壁土の量と希塩酸溶解試験結果	80
表 15	壁土の蛍光 X 線による成分分析	81
表 16	建物の配置計画の要素連鎖	97
表 17	北群と南群の建物の比較	98
表 18	史料にみる政所町の建物の比較	101
表 19	雑草による環境要素の比率	105

I 章 調査経過

1 節 平安京研究の現状と課題

平安京は、古代宮都の最後として延暦 13 年 (794) に造営され、今日まで都市として存続している。その間の関連史料は膨大である。しかしながら、一地域を限った場合、千年あまりの歴史を叙述するに十分な史料があるわけではない。また、時代を遡るほど史料の量が急激に減少するのも常である。例えば、平安京の復元図は、いたるところ、空白のままである。その空白部分を含めて平安京の実態を明らかにすることは、現在の京都の成立を解明することであり、そこに歴史的研究としての意義がある。

平安京の遺跡調査が始まったのはそんなに古いことではなく、昭和 30 年 (1955) 代に入ってからである。まず、財団法人古代学協会に平安京発掘調査本部が発足し、組織的な調査研究が始まった。後に財団法人古代学協会のほかに財団法人京都文化財団が設立され、今日なお、精力的に調査研究活動を行っている。同じ 30 年代、杉山信三が西寺跡の調査を行い、寺の主要伽藍を明らかにしたほか、発見遺構と東寺の現存建物との間の距離を実測し、平安京の造営尺の復元を試みている^{注1}。また、杉山の主宰する鳥羽離宮跡調査研究所が右京一条三坊で調査を行い、条坊遺構や宅の一部を明らかにしている^{注2}。

昭和 40 年 (1965) 代後半、山陰線高架工事を契機に平安京調査会が、地下鉄烏丸線工事を契機に烏丸線内遺跡調査会が発足し、ほかの古都と同様、平安京にも遺跡が残っていることを明らかにした。折りしも、平城宮・難波宮・長岡宮などの宮都で調査が盛んとなり、宮域のみならず、それを支える京城の構造的な解明も必要という意識が芽生えてきた時分であった。それと共に、遺跡が現市街地と重なっているという現状や平安京以降も都市として存続しているという特殊性のもとの調査法・調査技術と調査視点の確立も必要となってきた。「定点の確立」、「点から線へ」という標語が出てきたのもこの頃である。その標語の主旨は、平安京の都市区画の根幹である条坊の位置を現地で遺構から確定することがこの時点での平安京研究の先決課題であり、条坊の確定によって、内部の町研究の展望が開けるというものである。

この頃、平安京調査に関わった調査団体は、上記のほか、京都府教育委員会、同志社大学考古学研究室などの公的機関のほか、六勝寺研究会、伏見城研究会など多くあり、京都市文化財保護課の主導のもとに、平安京を含む市内遺跡の統一的な調査研究を主旨とし、

財団法人京都市埋蔵文化財研究所が発足した。

その後、平安京内の調査件数が飛躍的に増大し、多くの成果を得た。成果の一部はすでに『平安京発掘資料選』(文献 12)、同(二)(文献 23)、『史料京都の歴史・2 考古』(文献 9)、『平安京左京八条三坊』(文献 15)などで報告・紹介した。

調査資料の累積に伴い、平安京の広さからすれば点でしかない各調査地点を大視野から把握するために、調査遺構の平面直角座標系による測量を昭和 55 年(1980)頃から導入した。その測量成果を基に条坊遺構の統計的解析を行い、平面直角座標系による平安京条坊復元モデルを提示した。^{註4}これによって、現地と平安京条坊の重ね合わせ作業の帰着をみ、平安京の造営尺、座標北に対する条坊方位の振れなどが明らかになった。

条坊制の研究が一応の成果をみた現在、次の主題は条坊制下での町の実態解明である。もとより、平安京の調査は現市街地と重なるという特殊性ゆえに、いわば開発任せの地点調査であり、調査面積も開発規模に左右され、狭面積の調査が大半である。その中において、年 1 回程度、広面積の調査があった。昭和 54 年(1979)の右京三条三坊十町(1,860 m²)、昭和 58 年(1983)の左京三条二坊十町(4,000 m²)^{註5}、昭和 59 年(1984)の左京九条二坊十三町(3,940 m²)^{註6}、昭和 60 年(1985)の右京二条三坊一町(1,770 m²)^{註7}などである。このうち右京例については邸宅跡の一部を、左京三条二坊十町では堀河院の園池の一部を明らかにした。一坊の範囲内において比較的多地点を調査した右京三条三坊は『平安京右京三条三坊』(文献 31)と題して報告した。そこでは、1 町の 4 分の 1 強を占めるとみられる邸宅跡などを発見したが、宅の全貌はわからなかった。より広面積の調査、さらには、1 町の全貌を明らかにするような調査の必要性を痛感した。

広面積の調査例として、昭和 55・56 年(1980・81)に調査した右京一条三坊九町の山城高校例がある。^{註8}この調査で、平安京では初めて、邸宅内の主要殿舎の配置を明らかにした。当時、平安貴族の邸宅像として完成された「寝殿造り」に山城高校例がどれほど時間的・段階的に近づいているかの議論はあったが、平安時代の宅としての普遍性については、比較資料の皆無という調査当時の状況のもとで、論じられなかった。^{註9}

平安京では、階層によって宅地の広さが規定され、1 町を領有できるものはごく限られ、通常は 1 町を四行八門制によって細分した最小の区画単位である戸主(東西 10 丈、南北 5 丈)が宅地の広さの基準になっていたというのが定説である。これを遺跡調査から明らかにして行くことが、大きな課題としてある。

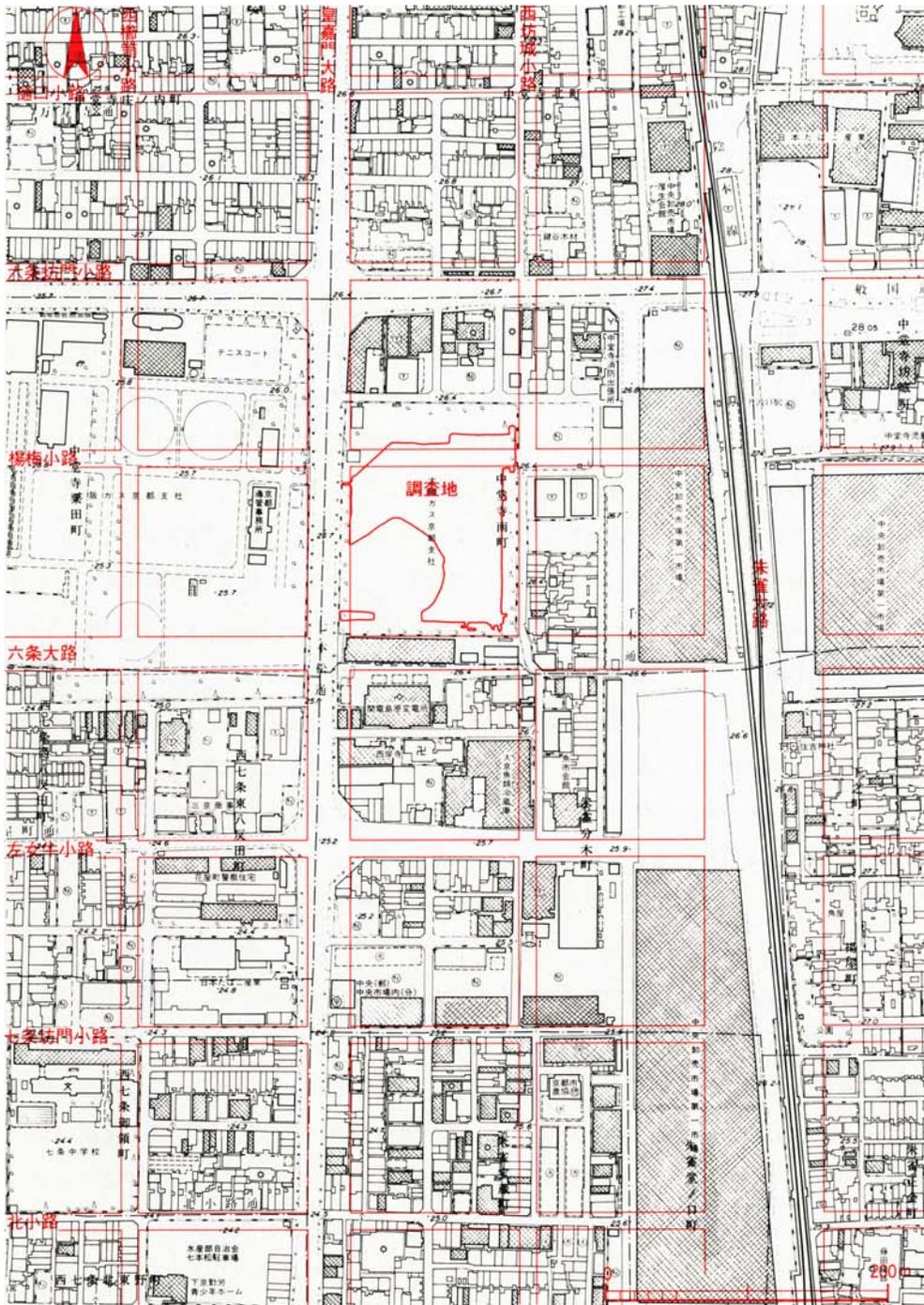


図1 調査地の位置 (1:5,000)

2 節 調査の契機と方針

旧大阪ガス京都製造所跡地（東地区）は、東西約 125m、南北約 165m の広さを持ち、市街地にあつては広い敷地である。京都リサーチパーク株式会社がこの地に府・市・民間の先端技術を集約する施設（リサーチパーク）を計画し、京都市埋蔵文化財調査センターの指導のもとに、その事前調査として（財）京都市埋蔵文化財研究所が発掘調査を行った。

調査地は、JR 丹波口駅の西約 200m の京都市下京区中堂寺南町に所在する（図 1）。平安京右京六条一坊五町・同六町にあたるが、文献史料がなく、平安京の復元図では空白のままの町である。^{註10} 調査地南隣の右京七条一坊八町の西北部分では、昭和 58 年（1983）に調査を行い、皇嘉門大路の遺構のほか、平安時代前期の建物を確認した。^{註11} 規模は不明ながら、北端の柱筋を揃えて並ぶ東西棟と南北棟の建物を認め、少なくとも数戸主以上の土地を領有する宅を想定した。同様な遺構が当調査地に広がっている期待がもてた。

調査前の現地は、平安京の調査では今まで経験したことのない広さの敷地であつた（図版 26 の 1）。以前、直径 70m のガスタンクや社宅があつたが、それらはすっかり撤去され、所内の道路や植樹がやや邪魔になるものの、草野球の広場がすぐさま数面とれる広い空き地である。計画が確定した第 1 期・2 期の工事は敷地の北半分ほどであるが、近い将来には工事計画が敷地全体におよぶ気配である。右京六条一坊五町のほとんどが敷地内に入ることはわかっている。工事計画に伴う発掘調査を将来的にも実施できれば、五町のほぼ全容を明らかにできる条件が揃っていた。

平安京の調査研究の現状と当調査地での調査条件を考慮し、1 回の調査では困難としても、最終的には右京六条一坊五町の完掘を目標とし、それに沿う調査方針を検討した。

第一に、調査区の地区割りの方法である。従来の当研究所の調査では、対象とする各調査区に固有の名称を与え、平面直角座標系の下部に 4m 方眼を設定し、それを最小の地区割りの基準としていた。しかし、調査区は任意の設定であり、調査経過を追う場合には利点はあるが、1 調査区が数千 m² というように広い場合、それを分割しないと、遺構の掌握や作業単位が曖昧となる。この事情から、遺構・図面の管理や作業単位として適当と思う 20m 方眼を採用した。その方眼は任意であつては将来的に不備を生じるので、平面直角座標系の 100m 方眼の下部に 20m 方眼を設定し、これを第一義の地区割りとした。その名称は A から Y の英字 1 字を当てた（図 2）。これによると、100m 方眼の大地区ごとに同一の 20m 方眼の名称が現れるので、その区別は所属する 100m 方眼の名称を冠することで対

処した。ちなみに、当調査地には E35・E45・E55・F31・F41・F51 の 100m 方眼が引かれ、20m 方眼は 46 を数える。

第二に、遺構の管理の方法である。各遺構は 20m 方眼の単位で掌握し、所属する 100m 方眼の名称 3 字と 20m 方眼の名称 1 字の計 4 字を冠する 3 桁の数字で遺構番号とした（例えば F41E005、これは調査時の井戸 E005 の名称）。二つ以上の方眼にまたがる場合は、最初に登録した地区の名称を採用し、遺構名称の重複を避けることとした。20m 方眼ごとに遺構略図・遺構実測図・遺構台帳を用意し、検出時に追加を行った。各個別の遺構と、それから復元される上位の遺構（例えば柱穴の上位遺構としての建物）の区別を明確にし、整理過程において変更の余地のある上位遺構名については、別に名称を与えた。ただし、個別の遺構で一つの上位遺構となる場合（例えば井戸）は、調査時の遺構名称をそのまま報告書でも使用することとした。^{註12}

第三に、調査区の設定の方法である。地下開発計画の範囲内に調査区を設定するのが通常であるが、この場合は、調査区の外周において、将来ともに未調査の地帯を生じやすい。また、連続して隣接する調査区を調査する場合、調査完了区と調査進行区との接点において、工事作業との競合を生じやすい。このことを配慮し、地下工事計画よりも 3m から 6m 広い範囲を調査区とした（図 3）。この点に関しては、原因者と工事関係者の理解を得、一時、調査が窮屈な場面もあったが、ほぼ初志を貫徹できた。なお、各調査区は、工事計画を配慮して設け、調査順に 1 区から 6 区の名称を与えた。

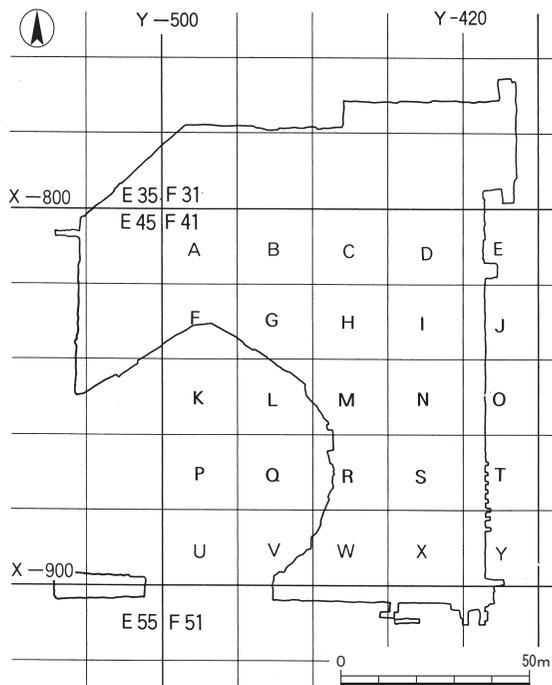


図 2 20 m 方眼の地区名 (1:2,000)

3 節 調査の概要

イ 試掘調査

調査の見通しを立てるための試掘調査を、昭和62年(1987)8月3日・4日の2日間に行った。

敷地の西南部に、基礎直径70mのガスタンクが近年まであった。これは右京六条一坊五町の西南部3割を占め、町の調査を目的とするには、致命的とも思える割合である。そのガスタンク跡の地下破壊程度を確認したが、深さ3m以上も掘り返され、遺構は残っていないと判断した。

条坊遺構の確認のために、皇嘉門大路・楊梅小路の想定地に各1箇所ずつ調査区を設けて、道路側溝とみる遺構を確認した。五町内に設けた調査区でも、遺跡基盤が安定して残り、かなりの成果を期待できると判断した。

この結果から、ガスタンク跡を除く地下掘削予定地全域の調査方針を固めた。

ロ 発掘調査(図版26・27、図3、表1・2)

発掘調査は昭和62年(1987)9月16日にはじめ、昭和63年(1988)4月21日に終えた(表1・2)。調査は以下のチームを編成し行った。

調査主任 本弥八郎

調査員 梅川光隆 木下保明 丸川義広

調査補助員 北原四男 高橋富之助 夏原三郎 牟田嘉孝 藤野彦之 山田米蔵

東 洋一 大立目一 小谷 裕 大立目道代(旧姓 佐山)

モンペティ恭代(旧姓 佐山) 藤村雅美 津々池惣一 永田宗秀

布川豊治 藤村敏之

原因者および工事担当者との調査前の打ち合わせで、敷地の北辺沿いにガス本管を移設する計画があることを知った。その移設路線は、楊梅小路を横断し、六町内を通るとわかった。そこで、楊梅小路の調査と六町域の状況の確認をかねて、埋設管路掘削時の立会調査を原因者に申し入れた。工事関係者の好意で、当初、立会調査としていた部分の内、敷地東辺沿いについては2週間の期間を得、本調査に先立って、発掘調査した(1区、図版26の2)。ここは、幅4m、長さ34mの細長い調査区であったが、鎌倉時代の楊梅小路北側溝と六町内で柱穴数十を確認した。特に、柱穴は分布が密で、大半は鎌倉時代頃の小柱穴であったが、柱根の残る平安時代の柱穴もあり、この付近の遺構の濃密さを知った。埋設に

伴う立会調査では、敷地の西北部に湿地があり、発掘調査区にはそれが広がることを知った。

敷地の西南隅に東西に細長い2区を開けた(図3)。これはガスタンク跡縁辺部の調査の代替として、敷地西南隅での遺構の状況の把握と皇嘉門大路の調査の目的で設定した。ここでは、想定位置に正しく大路の東側溝を認め、条坊復元モデルの確かさを再確認した。以外では、若干の小柱穴と古い流路・土取穴を確認したのみで、遺構は希薄であった。

3区は第1期工事に関わる調査区である(図版27の1)。総じて、平安時代前期の遺構は希薄で、五町内に南北に走る溝を数条と六町内に井戸などを認めたのみである。これは、3区の北部・西部に広がる古湿地が影響を及ぼしたためと理解し、五町東半域の調査に期待をかけた。その閑散とした平安時代前期の遺構密度に比べ、平安時代末期・鎌倉時代の遺構は多く、楊梅小路では北側溝を、五町内では重複する建物・井戸・方形土壇などを認めた。この時期の住居遺構は今日まで明確ではなく、その景観的広がり追求も課題となった。木製品の出土や植物遺体の採取を期待し、調査区内の古湿地を完掘したが、予想に反し、遺物包含は微量であった。

4区は5区と共に第2期工事関係分で、敷地内通路確保の都合や工事との競合回避のために、3区に接する部分を区切って調査した(図3)。この区で待望の平安時代前期の建物を確認した。五町の中央付近に規模の大きな南北棟の建物があり、これを副屋とみて、その東に主屋を配置

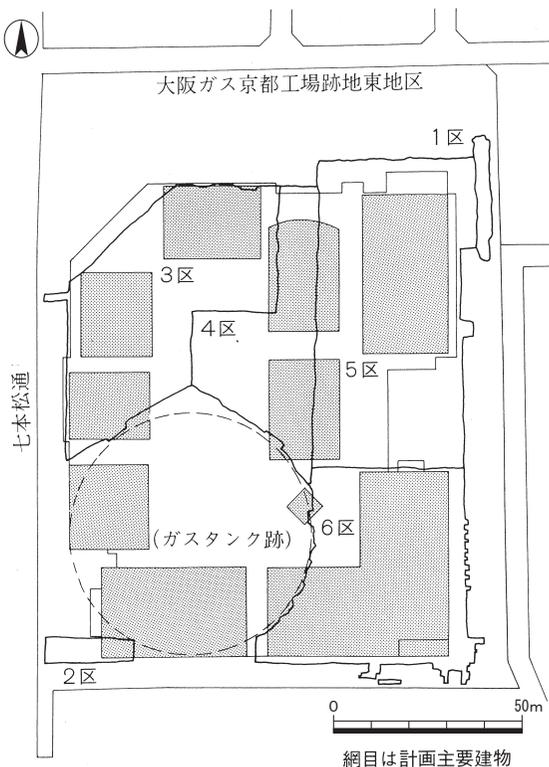


図3 調査区の配置 (1:2,000)

する宅を予想した。また、平安時代前期に遡る楊梅小路南側溝も確認した。平安時代末期や鎌倉時代の遺構は、3区に引き続き確認したが、建物は楊梅小路沿いに密で、五町の中央部は柵・溝などの区画遺構が主であるという状況がしだいに明らかとなってきた。3区

では楊梅小路部分に密であった土取穴が五町内でも目立ってきた。

5区（図版27の2）では、土取穴が調査区全域に広がり、これの除去にかなりの労力・時間を費やした。平安時代前期の遺構は、東西棟の建物を軸にしてその東西に南北棟の建物を配置する状況がわかったが、中心の東西棟の建物が北に寄りすぎる点や構造が粗末である点が疑問となった。東西棟の建物の真南に建物の平面規模に匹敵する長方形の大土壇をみつけ、建物の基壇地業や池の可能性を考えた。しかし、いずれの徴証もなく、土壇の年代も平安時代末期以降に下ることを確認した。さらに、土壇の下から平安時代前期の建物を検出するにおよび、平安時代前期の宅とは無関係と判断した。その土壇下の平安時代前期の建物も母屋のみの構造で、底を持つ南北棟の建物に相応せず、この時点での平安時代前期の宅は閑散かつ不均衡な状況であった。宅の総合的な判断は、五町の残る東南4分の1を調査するまで保留することにした。平安時代前期の井戸をここで確認した。楊梅小路は、平安時代前期の南側溝は確認したものの、北側溝は痕跡すらなかった。むしろ、その北数mの位置に溝の痕跡があり、調査時にはこれの解釈をなしえなかった。

平安時代末期・鎌倉時代の遺構は楊梅小路に面して建物が並ぶ状況が一層顕著となり、五町内のほか、六町内でも1区に続く建物がみられた。ただし、この時代の建物構造の研究が進んでいないことと残存状況の悪さから、調査時には建物群として認識することとどめ、詳細は調査後の整理にゆだねた。楊梅小路に面して開く門とみる遺構も確認した。

当初の調査予定は第1・2期工事計画分の5区までであったが、原因者の第3期工事計画が具体化してきたことと、中断なしにこのまま第3期関係分を調査した方が遺構の認識もよりしやすいこと、それに平安時代前期の宅を考える上でその部分の成果が絶対必要なことを考え合わせ、6区を開けた（図3）。

調査区	調査期間	実質調査面積
1区	87/09/16～87/09/28	173 m ²
2区	87/09/17～87/10/05	144 m ²
3区	87/09/19～87/11/21	2,584 m ²
4区	87/11/16～87/12/17	1,329 m ²
5区	87/12/11～88/02/25	3,099 m ²
6区	88/02/18～88/04/21	2,317 m ²

表1 調査区要覧

予期せずして、この区に平安時代前期の五町の宅の中心部分があること、建物が五町の東3分の2ほどに集中することなどが、遺構を検出した段階の整理でわかった。五町の宅の全貌をほぼ明らかにし、平安京の宅の実際としての重要性を認め、原因者の協力を得て、昭和63年(1988)3月19日、報道機関に発表し、同月21日、遺跡の現地説明会を催した。一般・研究者を合わせ500人を越える見学者があった。その時点では、一部の建物の規模を確定していないこと、中心部分の前庭が狭いこと、前庭での池の有無が不明なことなどの問題点があった。その追及のために、6区の西・南・東の一部を拡張した。西・東の拡張部分では、建物の規模を明らかにした。南の拡張部分では、平安時代前期には池は存在しないことを確認した。宅の南限は六条大路とするのが妥当という感触もえた。

平安時代末期・鎌倉時代の遺構は、完存の鋤を出土した井戸と多くの瓦・壁土を投棄した濠が成果であった。

ハ 整理・報告作業

昭和63年(1988)4月26日から平成元年(1989)3月31日まで発見した遺構や出土した遺物の基礎整理を行った。基礎整理の参加者は以下の通りである。

調査員 梅川光隆 木下保明 丸川義広 岡田文男

調査補佐員 伊藤 潔 東 洋一 太田吉男 大立目一 小谷 裕 藤村雅美

大立目道代(旧姓 佐山) 津々池惣一 永田宗秀 布川豊治 藤村敏之

平成2年(1990)8月6日から平成3年(1991)6月8日まで報告書原稿整理を行った。

この間、平成元年(1989)4月3日から平成2年(1990)5月31日まで、旧大阪ガス京都製造所跡地西地区(右京六条一坊十二・十三町)で約7,300 m²の発掘調査を行い、東地区の成果を補完・追認する成果を得た。その成果は改めて報告するが、この報告書の内容を訂正するものではない。

本報告書の執筆分担と報告作業担当者は以下の通りである。

執筆分担

- I 章……………梅川光隆
- II 章……………梅川光隆 丸川義広
- III 章 1 節・2 節 ……梅川光隆 3 節・6 節 …… 梅川光隆 伊藤 潔
- 4 節・5 節 ……岡田文男
- IV 章 1 節……………梅川光隆 2 節・3 節 …… 岡田文男
- V 章……………杉山信三

報告作業

- 図面製図……………梅川光隆 伊藤 潔 大立目道代 小谷 裕 布川豊治
- 遺物復元……………出水みゆき 多田清治 田中利律子 中村享子 村上 勉
- 写真撮影……………牛嶋 茂 村井伸也
- 編集……………梅川光隆
- 校正……………梅川光隆 大立目一 小谷 裕 布川豊治
丸川義広 岡田文男

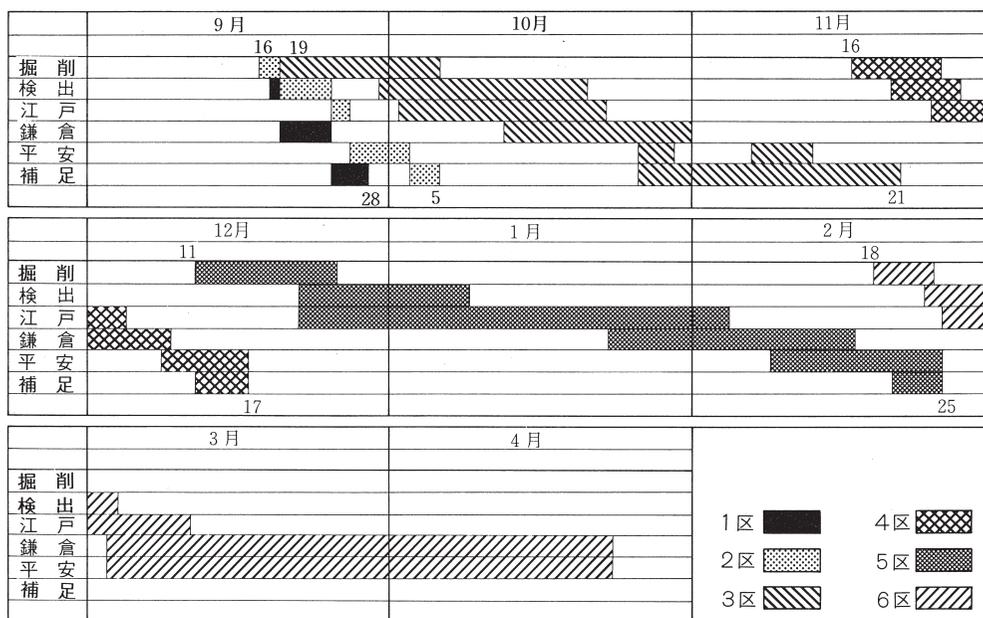


表 2 調査の進行

(江戸は江戸時代以降。鎌倉は平安時代末期・鎌倉時代。平安は平安時代前期)

4 節 発掘調査日誌抄

昭和 62 年 (1987)

09/16 現場への引越し(～09/17)。1区、ガス管切り替え部分の立会調査。

09/17 2区、重機掘削(～09/18)。

09/18 現場安全管理者(大林組)と場内整備・安全管理の打ち合せ。1区、発掘調査。遺構を検出。

09/19 測量原点を設ける。1区、柱穴や楊梅小路北側溝V008を検出(図4)。2区、遺構検出。溝を数条確認。3区、重機掘削(～10/06)。

09/21 1区、測量の割付を行う。2区、測量の割付を行う(～09/22)。標高基準は26.20m。3区、調査区外周の壁面の清掃(～09/28)。

09/22 1区、遺構実測(～09/24)。2区検出遺構の略測。

09/24 1区、写真撮影。柱穴を断ち割って断面を調査(～09/26)。2区、溝・土壌を掘り始める。

09/25 1区終了の件などで原因者と打ち合せ。2区、E55E部分の遺物を含む土層を掘り下げる。この部分、基盤の土層が明確でない。ガス管移設に伴う立会調査で、敷地の西北部分に湿地があることを確認。

09/28 1区、調査完了。2区、皇嘉門大路東側溝D009を調査(～09/29)、この西でさらに1条の溝を確認。3区、測量原点

を設ける。

09/29 3区、測量のための割付を行う(～10/7)。南西部から、遺構の検出をはじめめる。遺構は小穴や耕作関係の溝など。F31U区付近は湿地の状況を呈する。井戸A036を発見。

09/30 2区、皇嘉門大路東側溝を主とする写真撮影。その後、E55E区を再度掘り下げる。3区、重機掘削で、コンクリート塊を撤去するために削岩機を導入。

10/01 原因者に調査状況を説明。2区、古流路を認める。3区、検出遺構の略測。調査区内にガス本管3本が走る。内2本は管内の状況が不明。明日検査の予定。

10/02 2区、古流路の写真撮影と実測。皇嘉門東側溝の護岸の杭を取り上げる。3区、E45J・F41F区の耕作関係の溝や最近の攪乱土層を掘り上げる(～10/7)。ガス管の検査で、1本に20%のガス残量がある



図4 1区調査風景

とわかる。ただし、少々の振動では管は破損しないとのこと。

10/03 2区、調査区南壁沿いに基盤を断ち割り、土層を観察する(～10/05)。3区、湿地の中に植物遺体を認め、その採取方法を考える。

10/05 原因者に調査状況の説明。2区、調査完了。ただし、引き渡しは保留。

10/06 3区、E45J区付近の湿地は縄文時代に遡ることが判明。E35Y区付近、攪乱土層の除去(～10/09)。

10/7 調査区内のガス管撤去などで原因者と打ち合わせ。3区の標高基準を25.80mに設定した。E45E・F41A・同B区、遺構検出(～10/09)。耕作関係の溝のほか、柱穴を認める。

10/8 3区、E45J・F41F区の土壌を調査する。内、四つは井戸と判明。

10/12 原因者に調査状況の説明。3区、E35Y区付近、遺構検出(～10/13)。楊梅小路北側溝を確認。E45J・F41F区は井戸の調査(～10/21)。

10/13 3区、F41A区で平安時代末期から鎌倉時代にかけての建物を確認。E45J区で方形の大土壌を認める。竪穴住居の可能性も考え、J022は後にまわす。

10/14 原因者に調査状況の説明。3区、E35Y・F31U・同V区、鎌倉時代よりも新しい土壌を掘る(～10/21)。

10/15 調査区内を走るガス管の撤去。

10/16～10/17 台風が近づき、調査はほとんどできず。

10/19 3区、E45J・F41F区、井戸の写真撮影。

10/21 3区、E35Y・F31U・同V区、土壌の実測(～10/23)。

10/22 3区、E45D区で皇嘉門大路東側溝の調査。

10/23 敷地北隣のビル管理者に屋上からの写真撮影の許可を要請。

10/24 原因者に2区を引き渡す。3区、小雨も写真撮影を決行。

10/26 3区、南湿地を掘る(～11/7、図5)。楊梅小路北側溝を調査(～10/29)。F41A・同B区、平安時代末期・鎌倉時代の建物の調査(～10/27)。

10/27 調査区内に建物建設予定地の縄張りをしたことで、工事関係者と紛糾。

10/28 3区の調査終了の件などで原因者・工事担当者と全体会議。3区、E45J区の方形土壌J022は平安時代以降と判明。



図5 3区調査風景

F41A区、井戸A036の調査（～10/31）。

10/29 3区、E45D区、皇嘉門大路東側溝の実測。

10/30 3区、楊梅小路付近と建物の写真撮影。北湿地を断ち割り、掘り下げに先だって土層の堆積状況を把握する。湿地中には遺物はきわめて少ないことを確認。

10/31 原因者に調査状況を説明。北湿地を掘る（～11/16）。最上位には、平安時代の遺物が密な部分もある。これは、湿地の整地に関わるもので、湿地の形成は古墳時代に遡るか。

11/02 3区、南湿地の調査に全員が入る（～11/04）。この部分を11/15に原因者に引き渡すため。

11/04 3区、南湿地の遺物は、湿地の肩口に多い傾向を認める。E45E区では、焼けた土の流入を認める。

11/05 ヘリコプターからの写真測量で湿地の実測を行う予定をしていたが、周辺住民との関係を配慮し断念。クレーンによる写真撮影を行うことに予定を変更。3区、F31U区、北湿地の最上位を掘り下げ中に井戸の木枠らしき木片を確認。付近を精査する。

11/06 3区、F31U区、井戸U057を確認（～11/12）。F41A・同B区、建物の柱穴を断ち割って断面を観察（～11/09）。

11/7 3区、F31U区、井戸U057の写真撮影。

11/8 北隣のマンションの入居者約30名が現場を見学。

11/09 4区調査開始の件などで原因者・工事担当者と全体会議。3区、北湿地から古墳時代の遺物が出土し始める。南湿地、写真測量の準備を行う。

11/10 3区、南湿地の写真撮影と写真測量。北湿地、弥生時代の遺物も出土。4区の調査範囲を設定。

11/11 3区、南湿地の周辺の補足実測（～11/12）。

11/13 ソ連科学アカデミー一行4人が見学。3区南半の調査を終了し、原因者に引き渡す。

11/14 3区、北湿地の最下層から弥生・縄文の遺物が出土。

11/16 3区、北湿地の掘り下げ完了。4区、重機掘削（～11/25）。

11/17 3区、北湿地の断面実測（～11/18）。

11/18 工事の地鎮祭で作業一時中断。



図6 3区北湿地調査風景

地鎮祭に調査資料を展示。

11/19 3区、北湿地の写真撮影。

11/20 3区、北湿地の写真測量。北湿地基盤の断ち割り（～11/21、図6）。

11/21 原因者が5区の南側での調査（6区）を打診。3区の調査完了。4区、遺構検出を開始（～11/27）。実測のための割付を行う（～11/25）。

11/24 4区、遺構略測（～11/27）。

11/25 4区、建物02を検出。

11/26 5区の調査範囲の確定などで原因者・工事担当者と全体会議。4区、耕作関係の溝を掘り始める（～11/28）。建物01を検出。楊梅小路北側溝の続きを確認。同南側溝を新たに確認。

11/27 4区、遺構の実測を開始。

11/28 4区、土取穴を掘る（～12/04）。F41B区で井戸を検出。

11/30 4区、F31R区で瓦溜を確認。

12/01 4区、楊梅小路北側溝を掘り始める（～12/02）。

12/02 4区、平安時代末期から鎌倉時代の柱の調査（～12/03）。

12/05 4区、写真撮影。柱穴を断ち割って断面を調査（～12/09）。F41F区の溝F040は当初平安時代前期と思っていたが、平安時代末期・鎌倉時代のものと判明。

12/7 4区、溝F040が溝A009よりも新しいことを確認。

12/8 4区、建物01・02の調査。建物

01の続きを確認するために、調査区を南に一部拡張する件で原因者から了解を得る。

12/09 5区の調査範囲を縄張りする。

12/11 安全管理者から写真撮影の足場の安全不備を指摘される。本日の原因者・工事担当者との全体会議でもこの件で厳重注意を受ける。4区、平安時代前期の遺構を主とする写真撮影（図7）。建物01の南を拡張し、その続きを確認。合わせて南北6間（以上）の建物となる。さらに南は、ガスタンク基礎撤去の掘り込みで破壊されている。5区、重機掘削（～12/26）。

12/12 4区、補足調査（～12/16）。

12/14 5区、一部清掃を行い、建物を確認。

12/15 4区、建物01の写真撮影。

12/16 4区、調査終了。

12/19 5区、実測のための割付を行う（～12/26）。

12/21 5区、遺構検出と略測を行う（～



図7 4区全景

88/01/11)。

12/22 5区、土取穴を掘る(～88/01/30)。

12/25 原因者に調査状況を説明。

12/28 年末・年始の休みに向けて整理を行う。

12/29～88/01/04 年末・年始で調査中断。

昭和63年(1988)

01/05 原因者と年始の挨拶。5区、調査再開。

01/06 5区、建物8や平安時代末期・鎌倉時代の建物を確認。方形大土壌N011の存在を確認。この性格についてさらに調査が必要。

01/7 5区、建物04を確認。

01/8 原因者に調査状況を説明。5区、建物05・06を確認。

01/09 5区、井戸C068を確認。土取穴などの遺構実測に入る(～02/01)。

01/11 6区の調査開始について原因者・工事担当者と打ち合せ。

01/13 5区、建物04～8を確定。ただし、建物05はまだ曖昧。

01/16 5区、井戸C068を掘り始める(～01/20)。

01/20 6区の調査について原因者・工事担当者と全体会議。

01/21 5区、F41E区の調査区壁際で井戸のような落込を認め、その東を拡張して

調査する。

01/22 5区、井戸E005を確認。建物01と方形土壌N011の間で柱を確認。N011の建物の可能性を考える。

01/23 5区、井戸C068の写真撮影。

01/26 5区、F41D区付近の平安時代末期・鎌倉時代の建物の検討。井戸C068の実測(～01/27)。

01/27 5区、F31R・W区でも平安時代末期・鎌倉時代の建物を確認(図8)。

01/29 5区、F31R区の平安時代末期・鎌倉時代の建物を確定するために、調査区の北を一部拡張する。

01/30 5区、建物05は東西棟と確定。楊梅小路北側溝を調査(～02/02)。

02/01 5区、平安時代末期・鎌倉時代の遺構の点検。

02/05 安全管理者から、写真撮影足場組み立てでの、安全帽無着用で、作業中止命令を受ける。安全帽や命綱の着用を条件に作業を再開。5区、平安時代末期・鎌倉



図8 5区調査風景

時代の遺構を主として写真撮影。

02/06 5区、方形土壇 N011 の調査（～02/16）。平安時代末期・鎌倉時代の柱穴を断ち割って断面を観察（～02/16）。

02/09 5区、井戸 E005 の調査（～02/12）。円形の井戸枠の痕跡を確認。

02/12 5区、楊梅小路南側溝の調査（～02/15）。方形土壇 N011 の下で柱穴を確認。

02/13 5区、方形土壇 N011 の下に建物があることを確認。

02/15 5区、柵 10 が方形土壇 N011 よりも新しいことを確認。

02/16 杉山所長と遺構の検討。6区の調査結果を待って成果を判断する。5区、平安時代前期の建物の調査（～02/16）。

02/17 6区、調査範囲を縄張りする。

02/18 5区、平安時代前期を主とする写真撮影。建物の柱穴を断ち割って断面を観察（～02/22）。6区、重機掘削（～02/27）。

02/19 6区、実測のための割付を行う（～02/29）。

02/20 6区、建物の柱穴が相当数あることが重機掘削の段階でわかる。

02/22 5区、井戸 C068 を断ち割って木枠を取り上げる（～02/26、図9）。

02/24 6区、清掃を行う。平安時代前期の建物を3棟確認。

02/25 調査成果の公表の件について原因者・工事担当者と全体会議。報道記者発

表を03/18、現地説明会を03/21と決める。

6区、耕作関係の溝を掘る（～02/06）。

02/26 6区、略測開始（～03/02）。

02/29 6区、F41R区に井戸を認める。

03/01 6区、遺構の検討。平安時代前期の建物は6棟以上で、3群（3小期）認める。

03/02 6区、土取穴を掘る（～03/10）。

03/03 6区、土取穴の下で、建物柱穴の並びを相次いで確認。池 C004 の調査。上位では大礫を放り込む状況を確認。井戸 R059・S013 の調査に入る。

03/04 本日で、平安時代前期の建物の概要を確認。東西棟が南北1線に並ぶ状況を確認。南北棟はこれに対してほぼ等距離離れて並ぶ。池 C004 の下部は平安時代前期には遡らないことを確認。

03/7 5区、若干の補足調査。

03/8 6区、建物が廊下で結ばれる状況を確認。土器溜 0019 の調査。

03/09 杉山所長と遺構の検討。建物配



図9 5区井戸の調査

置は寝殿造りに近いこと、六条大路との間の空間が狭いこと、南側での池の有無の確認が必要などの点を話し合う。

03/10 6区、井戸 R059 の井戸掘形で完存の鋤を発見。平安時代前期の柱穴の調査（～03/14）。

03/14 6区、建物 11～27 の名称を確定。

03/15 現地説明会用の資料を作成（～03/18）。

03/16 6区、写真測量のための基準点を設ける。

03/18 報道記者発表。現地説明会のために安全柵や足場を設ける（～03/20）。

03/19 6区、実測。5区、若干の補足調査（～03/21）。

03/21 現地説明会。約500名が見学（図10）。

03/24 6区、平安時代前期の遺構の写真撮影。

03/25 6区、写真測量。6区の東・南・西の一部を重機で拡張（～03/29）。

03/28 6区、井戸の写真撮影。柱穴を断ち割って断面を観察（～04/15）。

03/31 原因者に調査状況を説明。6区、南の拡張部では平安時代前期の池はないことを確認。

04/01 6区、西拡張部を清掃。東の拡張部では建物 22 の東西の規模を確認。

04/05 6区の調査終了について原因者と協議。6区、西の拡張部の割付。東の拡

張部の柱穴実測。

04/06 杉山所長と遺構の検討。建物 16 の東底の有無の確認が必要。6区、西拡張部の遺構検出。建物 23 の規模を確認。

04/7 6区、西拡張部の遺構略測。土取穴を掘る。（～04/11）。

04/8 6区、西拡張部で濠 B016 を確認し掘る（～04/14）。

04/15 6区、建物 16 の東底の有無を確認のため、一部拡張する。東底を持たないことを確認。西拡張部の実測（～04/21）。

04/18 原因者に調査状況の説明。

04/19 6区、西拡張部の写真撮影。

04/20 6区、西拡張部の柱穴を断ち割って断面を観察（～04/21）。

04/21 全調査を終了。現場からの撤収（～04/25）。



図10 現地説明会

- 注 1 『史跡西寺跡』（文献 47）。
- 注 2 「住宅公団花園鷹司団地建設敷地内埋蔵文化財発掘調査概報」（文献 46）。
- 注 3 「下水道工事に伴う平安京跡の立会調査」（文献 1）。
- 注 4 『昭和 59 年度京都市埋蔵文化財調査概要』（文献 24）および『平安京右京三条三坊』（文献 31）の「はじめに」。
- 注 5 『昭和 58 年度京都市埋蔵文化財調査概要』（文献 21）。
- 注 6 『昭和 59 年度京都市埋蔵文化財調査概要』（文献 24）。
- 注 7 『昭和 60 年度京都市埋蔵文化財調査概要』（文献 25）。
- 注 8 「平安京跡（右京一条三坊九町）昭和 54 年度発掘調査概報」（文献 36）および「平安京跡（右京一条三坊九・十町）昭和 55 年度発掘調査概報」（文献 37）。
- 注 9 『寝殿造りの研究』（文献 6）。
- 注 10 平安時代末期には、関連史料がある。『平安遺文』補 96 には、楊梅西坊城の女房がみえる。従って、右京六条一坊三町～六町のどこかにこの女房が住んでいた。また『吾妻鏡』文治 2 年 7 月 19 日条に、没官領の成敗として、右京六条一坊四町の平信兼の家地がみえる。平信兼はこのほか、楊梅小路に面する 2 箇所の家地と所領があった。この 2 箇所が四町に接しているとすれば、調査地は 2 箇所の内に入る。なお、右京七条一坊一町の発掘調査で「陽院」を刻印する平安時代前期の瓦が 2 点出土している。史料では、「陽院」そのものはみえないが、調査地の東南付近に「陽院」が存在していた可能性がある。
- 注 11 『平安京跡発掘調査概要』（文献 19）。
- 注 12 この報告では、各遺構に冠する地区名の内、所属する 100m 方眼名を省いても主要遺構では名称の重複がないことがわかり、記述を簡便にするために省略している。

Ⅱ章 遺 構

1 節 条坊遺構

調査区内を皇嘉門（こうかもん）大路と楊梅（ようばい）小路が走る。皇嘉門大路は五町の西、楊梅小路は五町の北の道路である。ただし、皇嘉門大路は、その東側溝をわずかに調査できる位置である。道路は道路面・側溝・犬行（いぬばしり）・築地から成り立っているが、側溝の検出によってその存在を確認するだけで、道路面の整地や宅地との境の築地などはまったくわからない。『延喜式』の記述から、皇嘉門大路は幅 10 丈、楊梅小路は幅 4 丈とわかる。平安京の町はこのような大路・小路によって区画される 40 丈（約 120m）四方の広さの土地をいう。^{注1}

イ 皇嘉門大路（図版 3・6・28、図 11・12）

約 100m 離れた 2 地点、E45D 区と E55D 区で調査し、両地点で東側溝を確認した。東側溝は、その東の肩部に護岸の杭を打つ。この杭の位置に基づき溝の方位に対する振れを算出すると、N00 度 23 分 W の数値となる。この値は平安京条坊復元モデルの数値 N00 度 14 分 03 秒 W にきわめて近い。溝幅は 2～3m であるが、これは溝肩が侵食を受けた結果であって、『延喜式』の記述、大路の溝幅 4 尺が本来であろう。

溝 D009（図版 6、図 12） E55D 区で認めた東側溝である。西の肩を壊されており、それを考慮すると、溝幅は約 3m である。溝の基底幅は 1.6m、基底の標高は 24.5m である。深さは 40cm 残る。堆積土は上層が泥土、下層が粗砂で、当初はかなりの水量があったことを窺わせる。

上層と下層の境に瓦が層になって堆積する。東肩に護岸のための杭を 20～40cm 間隔で打つ。杭の 1 つの座標を示す

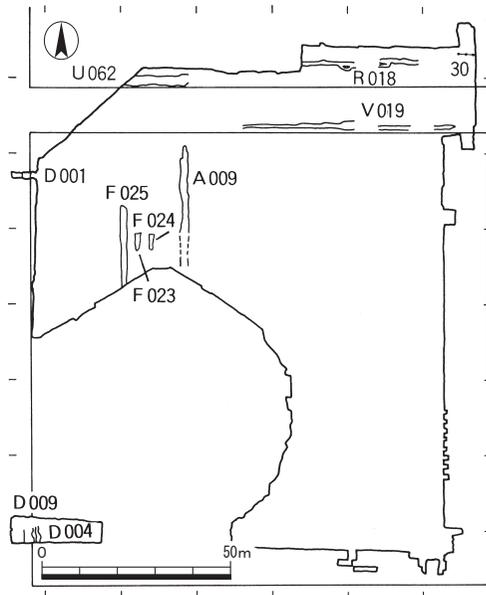


図 11 条坊遺構と区画遺構の分布 (1) (1:2,000)

と X=-111,902.4m、Y=-23,523.2m である。

溝 D001 (図版 3、図 11) E45D 区で認めた東側溝である。溝本体の幅は 2m ほどであるが、東側は肩の崩落が激しく土層が入り乱れている。深さは 50cm で、下位 20cm が平安時代の流れ、上位 30cm は平安時代末期・鎌倉時代以降の堆積である。東肩には径 5～10cm の杭の痕跡がある。一つの杭跡の位置は X=-111,806.7m、Y=-23,523.8m である。平安時代末期・鎌倉時代以降では明確な溝にはならず、幅広く浅いくぼみとなっている。溝の基底標高は 24.5m で、溝 D009 の基底標高と変わらない。

溝 D004 (図版 6、図 12) 幾分蛇行して南北に流れる。幅 1.8m 以上ある。深さは約 50cm で、堆積土は、砂を多く含む。遺物はきわめて少ない。溝 D009 の東で、築地の中心に位置する。通常、築地の中心位置に溝を掘ることはなく、この溝の性格は不明である。

ロ 楊梅小路 (図版 3・4・7・8・29、図 11・13)

北側溝と南側溝を検出した。ただし、平安時代前期の側溝は南側溝のみで、逆に平安時代末期・鎌倉時代の側溝は北側溝のみである。路面の整地は^{注2}検出していない。六町南面の築地位置で平安時代末期・鎌倉時代の門跡を認める。五町北面の築地位置でも柱穴を認めるが、後世の破壊が多く、遺構を確定しえない。

溝 V019 (図版 4・7・8) 東西 55.5m にわたり検出した南側溝である。残りが悪く、基底付近のみをとどめる。幅 1.65m 以上で、深さは 30cm 残る。堆積土の下層は泥土と砂の互層で、水量の豊富さを示す。上層は褐色の砂泥である。F31W 区付近では溝の底部に、原因は明らかでないが、直径

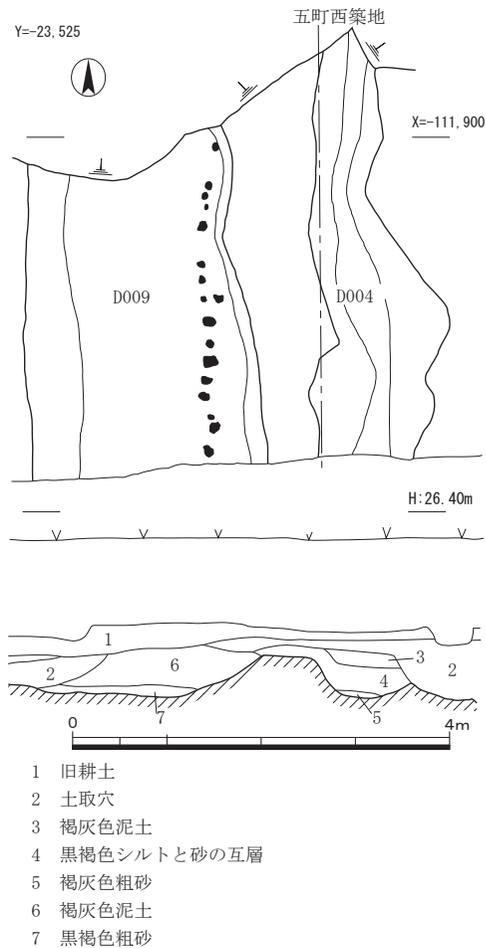


図12 溝D009付近(1:80)

20cm、深さ 10cm ほどのくぼみが無数に開く（図版 29 の 1）。溝の遺物は多い（図版 17 の 481～506）。平安時代前期である。

溝 V008（図版 3・4・7・8・29 の 4） 東西 97m にわたり検出した北側溝である。溝幅は 2.2～2.5m、深さは 30～45cm である。溝の底は西側が低い。堆積土は下層が暗灰色の泥土、上層は固く締まった褐色の砂泥である。溝の方位に対する振れは N00 度 13 分 W で、平安京条坊復元モデルの方位の振れとほとんど同じである。F31U・V 区付近では溝の重複を認める。平安時代末期・鎌倉時代である。

門 84（図版 7・29 の 2、図 13） この部分、築地幅 1.2m とするように 2 列の小柱穴がおよそ 2.4m 間隔で並ぶ。その中心線上に、約 4.4m 離れて深くて大きな門基の柱穴があり、その中間につなぎの柱穴がある。門基の東の柱穴には礎板を据えていた。楊梅小路に面して開く門で、六町の南面築地の位置にある。鎌倉時代である。

この東南で、楊梅小路南側溝相当位置に、鎌倉時代の土壇 X061 がある（図版 7、図 13）。平面は 3.3×1.6m の長方形で、深さ 32cm ある。西北から放り込むような状態で大礫が若干入っていた（図版 29 の 3）。これも門の位置を示す遺構かもしれない。平安時代前期の南側溝 V019 も、この X061 と重なる位置で北肩が若干道路側に膨れる（図 13）。六町内の宅地の主要部分を限る溝 R018 も、この真北で、一時期南寄りに蛇行している（図 13）。この位置はまた、五町内の主要建物である建物 04 と建物 14 の中心を結ぶ線の北延長でもある。平安時代前期に遡って、この位置に、五町と六町の各々の門が開いていた可能性がある。

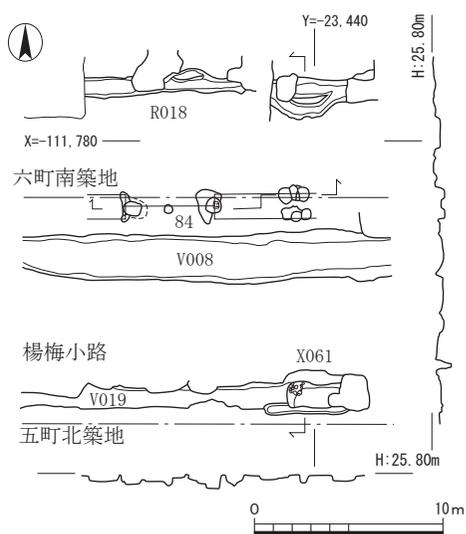


図13 門84付近(1:400)

2 節 町内の区画遺構

約 120m 四方の町を細分する遺構として、溝・柵の区画遺構を認める。ただし、条坊遺構の溝が道路の端を示さないのと同様に、区画の目安程度に考えるのが妥当である。これらが町を細分する遺構であることについての若干の考察は、IV 章で行う。

イ 平安時代前期（図版 3～8・30、図 11）

溝 A009（図版 4・6、図 11） 幅は 2.2m、深さは 15cm である。泥土が堆積し、流れた痕跡を認めない。F41A・F 区を南北に走る。南では平安時代末期・鎌倉時代の区画溝 F040 に破壊される。東西に走る溝 F040 もその部分で南に曲がるので、溝 A009 もさらに南下していると思われる。五町の西面築地から東へ約 39m の位置にある。

溝 F023（図版 6、図 11） 幅は 1.7m、深さ 20cm である。泥土が堆積する。Y=-23,495m 付近を南北に走る。X=-111,827m 付近で南端が消滅する。

溝 F024（図版 6、図 11） 幅は 1.0m、深さは 20cm である。泥土が堆積する。溝 F023 の東 4m にある。溝 F023 と同じ位置で、南端が消滅する。五町の西面築地から東約 30m にある。

溝 F025（図版 5、図 11） 幅は 1.0m、深さは 20cm である。泥土が堆積する。Y=-23,500m の東を南北に走る。北は X=-111,815m 付近で浅くなり消滅するが、楊梅小路まで延びていたと思われる。五町の西面築地から東へ約 23m の位置にある。

溝 R018（図版 7・8、図 11） 溝は 1.0～1.3m、深さは 15cm である。堆積土は黄褐色の砂泥である。長さ約 30m にわたり検出した。若干蛇行するため、方向は正しく東西を示さない。Y=-23,440m 付近では一時期南寄りに蛇行する。東寄りには後世の破壊を受け寸断されていたため S012・S042・S043 と命名したが、一連の溝である。六町の南面築地の北約 6m に位置し、六町の宅地内の主要部分の南を限る溝^{注3}と考える。

溝 U062（図版 3・4、図 11） 幅 2.4m である。溝 R018 の西延長上で、井戸 U057 から西に流れるような位置にある。溝 R018 と同一の溝かはわからない。

柵 30（図版 8、図 11） 2.4m 間隔で東西に 2 間分あり、すべてにヒノキの柱根が残る。柱の痕跡は径 21cm である。溝 R018 の北肩付近にあり、六町の東南隅近くに位置する。北や南に対を認めないので柵と考える。

ロ 平安時代末期・鎌倉時代（図版 4～6・9・11～15・30、図 14～16）

溝 F40（図版 6・11、図 14） 幅は 2.2m、深さは 20cm で、F41F・G・H 区を東西に走り、

Y=-23, 480m 付近で南に折れる。南に向かう部分は 55cm と深くなる。東は、Y=-23, 450m 付近で浅くなり消滅する。五町の北面築地から南約 37m の位置にある。南北部分は平安時代前期の区画溝 A009 と同一位置にある。

濠 B016(図版 13、図 14・15) 幅 3.6m、深さ 1.0m のしっかりした濠で、検出位置で北から西に折れ曲がる(図版 30 の 1)。五町の中央最南部にある。その北の延長では続きを確認しないので、どこかの地点で西に折れ、区画溝 F040 の南北部分に接続するのであろう。濠 B016 の曲がり角は溝 F040 の南北部分の東 20m にある。底から 10～50cm 上の部位には、北西側から投棄するような状況で、多量の瓦・壁土があった(第 3 章 2 節八、同 5 節を参照)。濠の西北に、これらの遺物を使用した小堂が存在すると考える。濠の曲がり角の東南隅肩部には、建築部材(図版 25 の 706)を転用した護岸の杭例がある(図 15)。これは、その東方の池 C004 から流れ込む水に対する配慮とみられる。

柵 10(図版 12、図 14) 南北方向の柵である。1.8m 間隔で 13 間、総長 23.4m を確認する。方形土壇 N011 よりも新しい。五町の東西の東寄り 3 分の 1 の位置にある。

柵 66(図版 4・6、図 14) 6 間、総長 13.0m を確認する南北方向の柵である。柱間寸法は 2.15m の等間隔とみられる。F41F 区にあり、平安時代末期・鎌倉時代の建物 65 の西側を南北に走る。南端はちょうど溝 F040 の北西隅にある。溝 F040 の西肩に沿ってさらに南に延びるかは不明である。その北は破壊されている。

柵 67(図版 4・6、図 14・16) 1.8m 間隔で 16 間、総長 29.2m の南北方向の柵である。F41A・F 区にあり、建物 65 の東壁と重なり、さらに南に延びる。南端は東西の区画溝 F040 の手前で終わる。座標上の真北に走る。

柵 68(図版 9、図 14) 9 間、総長 20.4m の南北方向の柵である。柱間寸法は、北から 3 間目のみが 3.8m と長い、ほかは 2.1m の等間隔と考える。柱筋は北から 4 間目のところでわずかにずれる。F41C・H 区にあり、建物 62 の西壁

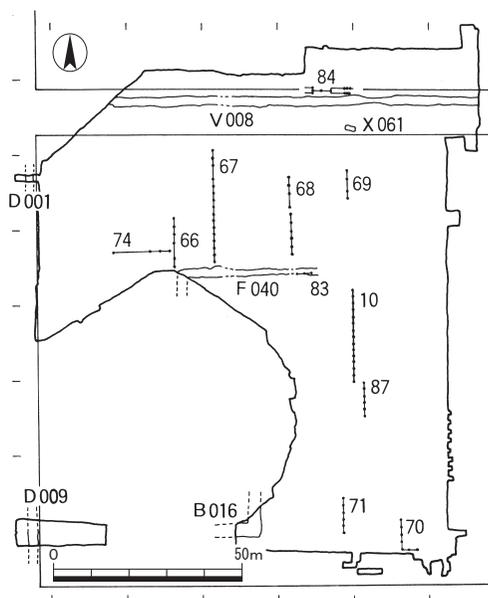


図 14 条坊遺構と区画遺構の分布(2)(1:2,000)

に接し、さらに南に延びる。

柵 69(図版 9、図 14) 4間、総長 6.6mの南北方向の柵である。柱間寸法は 1.65mの等間隔である。F41C区にあり、建物 61の西壁付近と重なる。建物 61の建て替え柱列の可能性もある。

柵 70(図版 15、図 14) 鉤型に折れる柵である。南北部分は 6間、総長 11.7mを確認する。柱間寸法は 1.95mの等間隔である。東西部分は 3間で、柱間寸法は 2.0mの等間隔である。南北部分の南端から東に折れ、建物 28の北壁に取り付く。東西部分の柱穴と、南北の南 2間分の柱穴で作り替えが認められた。F41X・F51D区にある。

柵 71(図版 14、図 14) 5間の南北方向の柵である。柱間寸法は 1.8mの等間隔である。F41W区にある。

柵 74(図版 5・6、図 14) 3間の東西方向の柵である。柱間寸法はほぼ 5mと広い。中間に補助的な柱が立つかもしれない。東端は柵 66の西で止まる。座標北に対し、西で南へ 1度 33分ほど振れる。F41F区にある。

柵 83(図版 11、図 14) 2m間隔で 2間分を確認する東西方向の柵である。ヒノキの柱根が残る。F41H区にあり、溝 F040の南肩沿いに並ぶ。

柵 87(図版 12・14、図 14) 1.8m間隔で 6間、総長 10.8mの南北方向の柵である。F41S区にある。柵 10の南端から東南に少しずれた位置を北端とする。



図 15 濠 B016 の護岸杭



図 16 柵 67

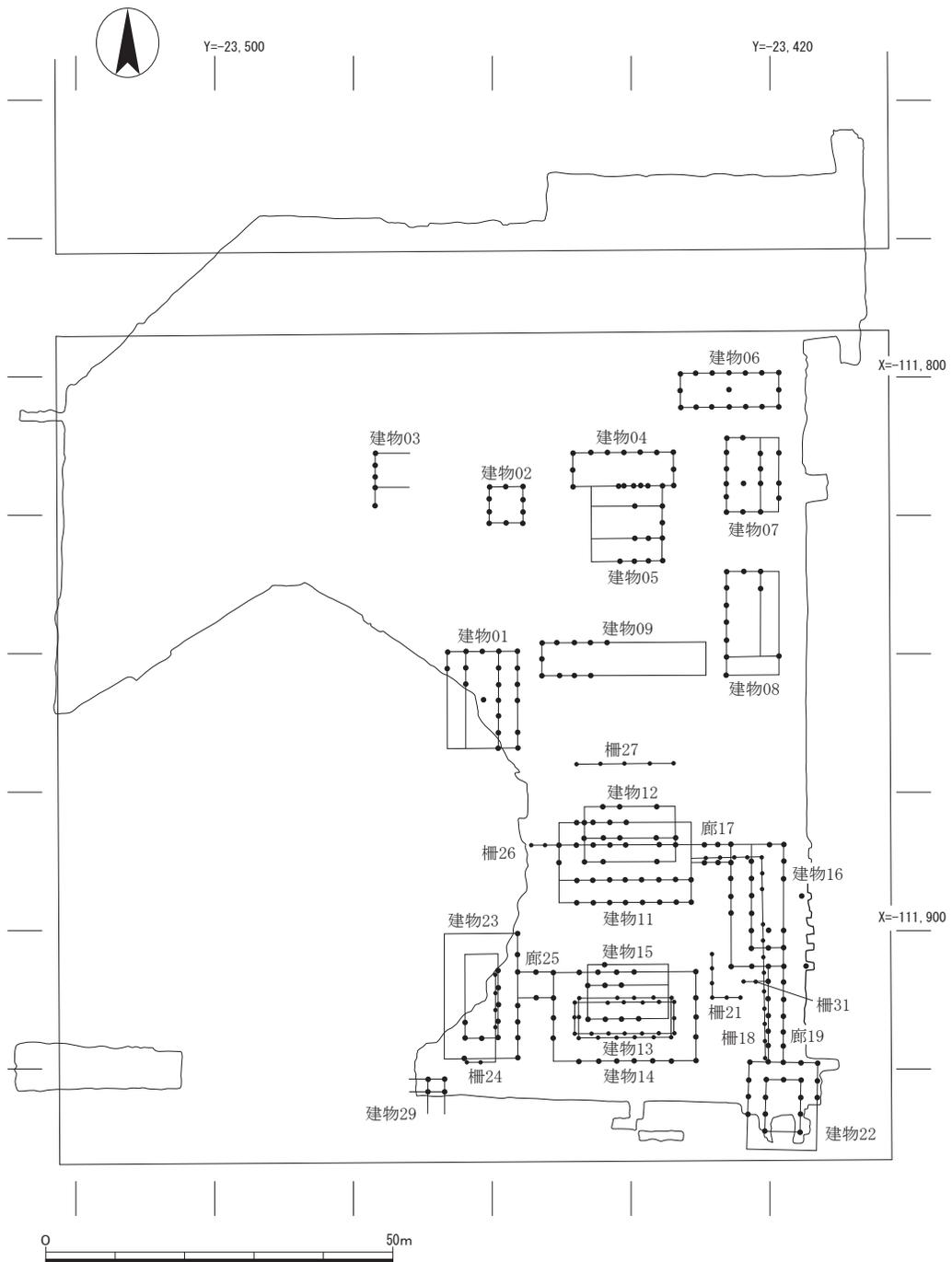


図17 建物遺構の分布(1) (1:1,000)

3 節 建物遺構

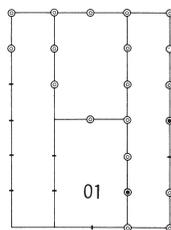
イ 平安時代前期（図版 4・9～15・32～39・41、図 17、表 3）

五町の東寄り 3 分の 2 にある。すべて、掘立柱の建物で、礎石立てではない。

掘立柱の場合、柱を立てる位置に方形に穴を掘り（掘形）、柱を立てたのち穴を埋める。掘形の大きさは柱の太さに比例して大きく、柱やその痕跡を確認できない場合でも、掘形の大きさで柱の太さを推定できる。掘形の大きさは 60～100cm に大半が入る（表 3）。この大きさは、平安京で普通に認める大きさで、格別大きいということはない。柱の根元が腐らずに残ったもの（柱根）を観察すると、いずれも丸太材で角材はない（図版 41 の 1）。柱根の径は、小さいものは約 18cm、大きいものは約 30cm ある（表 3）。柱の痕跡からみると、太いものは規模の大きな建物に多く、細いものは規模の小さな建物や廊・柵に多い。柱の沈下の防止と高さの調整をかねて、柱の下に礎板や根石を敷く場合がある（図版 41 の 2）。この仕事は規模の大きな建物に多い。

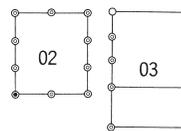
柱穴から復元する建物の平面は、母屋が単室となる古代に通例の平面で、この内部を一部分間仕切りしたり、外に庇を付けたりする。庇の有無は、建物の格に相応する。庇の出は、母屋の 1 間より若干長いものが多く、広庇といえるものもある（表 3）。柱間寸法は各建物によってまちまちで、当時の尺度で厳密に縄張りした様子はみられない。1 間の寸法を 2.4m 前後とするものが多く、概数として、これを 8 尺とみなす。特に梁の 1 間は 8 尺を基本とするらしく、これを外れるものは、16 棟中 3 棟がある（表 3）。五町の第 1・2 の主要建物である建物 11・建物 14 と建物 11 の後身の建物 12 である。母屋の桁の間数は、3 間や 5 間などの奇数間数が当時の通例であるが、6 間や 8 間などの偶数間数が主要建物にあり、この点は後の東三条殿の寝殿 6 間^{注4}につながる要素を持っている。なお、建物模式図の凡例は注 5 に示す。

建物 01（図版 11・35 の 1、図 17） 桁行は 6 間まで確認したが、その南は破壊を受けて不明である。7 間の建物がほかになく、6 間としておく。この時、建物の南妻は五町の南北を 2 等分する位置となる。北から 3 間目の位置で間仕切る。西庇は掘形が一回り小さく 60cm 前後である。ヒノキの柱根が 2 本残る。五町の中央付近にある。



建物 02（図版 9・36 の 1、図 17） 径 18cm のスギの柱根が残る。建物 01 の北にある。

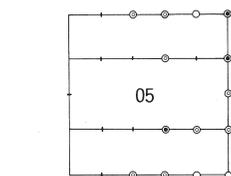
建物 03 (図版 4、図 17) 建物の西側列のみ 3 間分を検出した。東の対になる柱は破壊を受けて失う。この列の南 2.8m にも柱穴があり、南に庇を持つ可能性がある。建物 02 の西方にある。



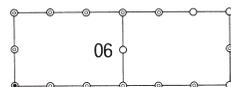
建物 04 (図版 9・36 の 2・37 の 2、図 17) ほとんどの柱穴で礎板を確認する。礎板は長さ 20cm から 60cm とまちまちであるが、幅は 36cm 前後である。径 36cm 前後の丸太材を半分に割ったものを据えたと考える。建物 02 の東にある。



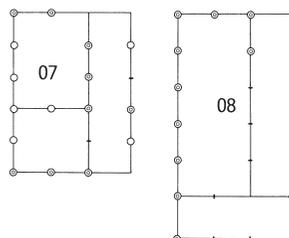
建物 05 (図版 9・37 の 1、図 17) 全容は明らかでないが、桁行 5 間に復元できそうである。南庇は桁に平行せず、東寄りほど庇の出が狭くなる。径 18cm のヒノキの柱根が残る。北庇が建物 04 の柱穴と直接重なり、それよりも新しい。



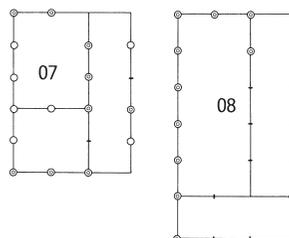
建物 06 (図版 10・38 の 1、図 17) 東西各 3 間に中央で間仕切る。スギの柱根が残るほか、柱根が腐って空洞となっているものがある。五町の東北隅にある。建物は、北面築地から 6m 離れるのみである。



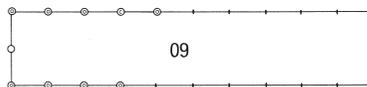
建物 07 (図版 10・38 の 2、図 17) 南から 2 間目で間仕切る。建物 04 の東、建物 06 の南にある。



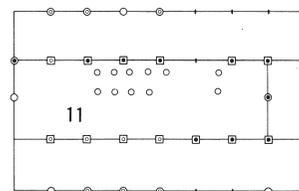
建物 08 (図版 12、図 17) 東庇は柱穴 1 個から復元した。また、南妻の南 9 尺の位置にも柱穴が 1 個あり、南にも庇が付いていた可能性がある。建物 7 の真南にある。



建物 09 (図版 11・39 の 1、図 17) 残りが悪く西寄り 3 間分しか検出していない。建物 01 の東、方形土壇 N011 の底で検出した。建物 04・11・14 の中心を結ぶ線上にこの建物もあったとすると、桁行 10 間の長大な建物となる。

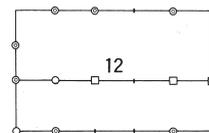


建物 11 (図版 14・32 の 2、図 17) 母屋の東 1 間を間仕切る。南の庇は出を 9.5 尺から 11 尺に造り替えている。北の出は 10 尺である。礎板を敷く柱穴が多く、特に、母屋の南桁ではすべての柱穴で確認する (図版 41 の 2)。柱根はヒノキ 9 本とスギ 1 本がある。スギ柱の位置は母屋北桁の東から 3 本目の柱で、これは後の補修かもしれない。



また、母屋内の中央4間の北寄りに8列2行の付属施設が伴う。この施設は、柱間1間につき二つを並べる浅い円形のくぼみの行列である。くぼみは径60～70cmである。建物01の東南にある。付属施設は建物12の柱穴と直接重複し、付属施設が古い。

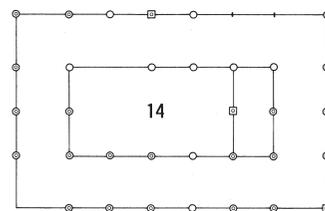
建物12(図版14、図17) 桁の間数は確定していないが、5間とみて間違いない。柱間寸法は桁・梁とも完数尺が得られない。建物11と重なり、それよりも新しい。



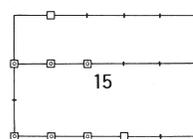
建物13(図版14、図17) 建物11の真南にある。建物14・15と重なり、もつとも古い。



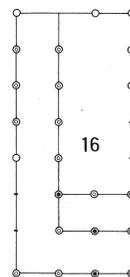
建物14(図版14・32の1、図17) 梁の柱間寸法は北から9.5尺と9尺である。東1間を間仕切る。建物13と同位置にある。五町の内でもつとも規模の大きい建物である。建物15よりも古い。



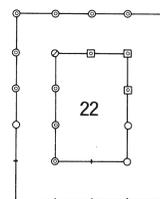
建物15(図版14、図17) 規模は確定していないが、桁行5間が妥当である。確認したすべての柱穴に礎板が残る。建物14と重複する。



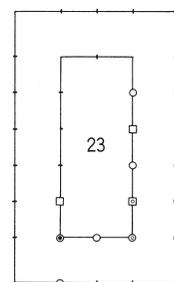
建物16(図版15・33の1、図17) 南1間を間仕切る。ヒノキ科5本・スギ1本の柱根が残る。残りの良い柱根の径は27cmである。建物11の東にあり、それとは廊17でつながる。西庇の北から5間目に井戸S013があるが、それとの並存関係は不明である。また、母屋東桁の北から4本目の柱の東2.4m、南庇の東端の東3.0mに柱穴の痕跡があり、建物16の東に別の建物があった可能性がある。柵18と直接重なり、建物16が古い。



建物22(図版15、図17) 母屋の桁行は3間分を確認した。もつとも南の柱穴は南面築地からわずかに北4.7mの位置にある。南面にも庇が付くとすると、建物と南面築地の距離はわずかに2.1mとなる。礎板を敷く柱穴や根固めに石を込める柱穴がある。建物16の南にあり、それとは廊19でつながる。



建物23(図版13・34の2、図17) 西の庇は確認していないが、4面とみて間違いない。ヒノキの柱根が1本残る。建物14の西側にある。



建物29(図版13、図17) 全容は明らかではない。東西8.5尺、南

北7尺の離れで4柱穴がある。柱間寸法に8尺がみられない点、通常の建物ではないようである。建物23の西南にある。



廊17(図版15、図17) 建物11と建物16をつなぐ単廊である。両建物間を3間に割る。

廊19(図版15・34の1、図17) 建物16と建物22をつなぐ単廊である。両建物間を6間に割る。ヒノキの柱根が2本残る。

廊25(図版13、図17) 建物14と建物23をつなぐ短い渡り廊下である。柱は建物14の柱筋に揃うが、建物23の柱筋とは喰い違う。

柵18(図版15、図17) 東西部分6間、南北部分12間の鍵型に折れる柵である。東西部分の柱間寸法は7尺で、南北部分の柱間寸法は8尺である。建物16・廊17・廊19と重なる。

柵21(図版15、図17) 東西部分2間、南北部分3間の鍵型に折れる柵である。ヒノキの柱根が残る。建物14と建物16の間にある。

柵24(図版13、図17) 南北5間以上、東西2間以上の鍵型に折れる柵である。ヒノキの柱根が2本残る。建物23の母屋東桁の位置を南北に走り、その南庇の位置から西に向かう。柱間寸法が8尺であることや、柱の痕跡がほかの廊・柵よりも一回り太い24cmであることは、建物に復元できる条件を備えているが、梁を結ぶ対の柱を確認していないので、柵とみておく。

柵26(図版13、図17) 2間分を検出した。スギの柱根が2本残る。建物11の母屋北桁から西に延びる。柱間寸法は、建物23の東庇の北延長と建物11の西妻の間を3分した値である。

柵27(図版11・12、図17) 五町を南北に2分する位置よりもわずかに南にある。

柵31(図版15、図17) 建物16の南にある。廊19と重なり、この柵が古い。

	棟	桁行	桁柱間	梁柱間	柱痕跡	掘形	庇	庇の出
建物 01	南北	(6 間)	8 尺	8 尺	21cm	75cm	東西	9.3 尺
建物 02	南北	3 間	6 尺	8 尺	18cm	70cm	-	
建物 03	南北	3 間	5.5 尺	?	18cm	60cm	?	
建物 04	東西	6 間	8 尺	8 尺	30cm	85cm	-	
建物 05	東西	(5 間)	7 尺	8 尺	18cm	60cm	南北	9.5 尺
建物 06	東西	6 間	8 尺	8 尺	24cm	80cm	-	
建物 07	南北	5 間	7 尺	8 尺	24cm	50cm	東	9 尺
建物 08	南北	5 間	8 尺	8 尺	24cm	75cm	東(南)	9 尺
建物 09	東西	(10 間)	8 尺	8 尺	30cm	100cm	-	
建物 11	東西	8 間	8 尺	8.5 尺	30cm	75cm	南北	11 尺
建物 12	東西	(5 間)	8.6 尺	7.5 尺	21cm	55cm	南	11 尺
建物 13	東西	6 間	8 尺	8 尺	27cm	75cm	-	
建物 14	東西	5 間	9 尺	9.5 尺	30cm	80cm	4 面	12 尺
建物 15	東西	(5 間)	8 尺	8 尺	24cm	75cm	北	10 尺
建物 16	南北	6 間	8 尺	8 尺	27cm	65cm	西南	9.5 尺
建物 22	南北	(3 間)	8 尺	8 尺	30cm	75cm	4 面?	8.5 尺
建物 23	南北	5 間	8 尺	8 尺	24cm	85cm	4 面	10 尺
建物 29	?	?	8.5 尺?	7 尺?	?	65cm	?	?
廊 17	東西	3 間	6.3 尺	8 尺	21cm	50cm		
廊 19	南北	6 間	7.5 尺	8 尺	21cm	65cm		
廊 25	東西	(2 間)	8.9 尺	12 尺	24cm	50cm		
柵 18	鍵型	18 間	7.8 尺		21cm	55cm		
柵 21	鍵型	5 間	6.5 尺		21cm	65cm		
柵 24	鍵型	7 間	8 尺		24cm	75cm		
柵 26	東西	(3 間)	6.5 尺		21cm	65cm		
柵 27	東西	4 間	11.3 尺		15cm	40cm		
柵 31	東西	2 間	6.7 尺		24cm	70cm		

表 3 平安時代前期の建物の要覧

() は推定

ロ 平安時代末期・鎌倉時代（図版4・7～9・39・40・42、図18・19、表5）

この時期の建物遺構は21棟を数え、各所に分布するが、道路に近接する部分に目立つ（図18）。特に六町の東南隅では重複が著しい。

建物は、平安時代前期同様、掘立柱の建物ばかりであるが、小邸宅の予想される五町の東南部3分の1にはそれに見合う建物がなく、土台に石を据えその上に柱を立てる石場立ての建物があった可能性もある。掘立ての建物の掘形は30cm前後と、かなり小さい。これは、遺存する柱が10～12cm角のものがほとんどという現象からもわかるように、この頃は丸太材ではなく、かなり規格性を持った角材を柱に用いたからである（図版42）。

柱穴から復元する建物は、古代の単室構造とは異なり、複室構造やそれへの過渡的な構造としての総柱構造である。柱間寸法は、1.8～2.0m（仮に小間とする）と2.4m前後（仮に大間とする）、それにこれらの倍の寸法が基本のようであるが、厳密ではない。この寸法を手がかりとして、平面形態から類別すると、次のようになる^{注6}。

建物54型（図版8、図19の1） 間口は、中央が広く両脇が狭い。奥行きには大間を用いる。間口3間、奥行きも3間ほどである。

建物61型（図版9・40の2、図19の5） 間口は大間に近いが一定していない。奥行きも、大間に近いものと、小間を混用する。間口3間、奥行き5～6間。

建物55型（図版8、図19の3） 大間を用いる。間口3間、奥行きも3～4間。

建物53型（図版8、図19の2） 間口に小間、奥行きに大間を用いる。間口3～4間、奥行きも3～4間か。

建物65型（図版4・39の2、図19の6） 小間を用いる。間口3～4間、奥行きは最大で6間までである。

建物51型（図版7・40の1、図19の4） 部屋の内部に柱が立たない。間口には小間の倍の寸法、奥行きには小間の倍の寸法と大間を併用する。間口3間、奥行き2間。

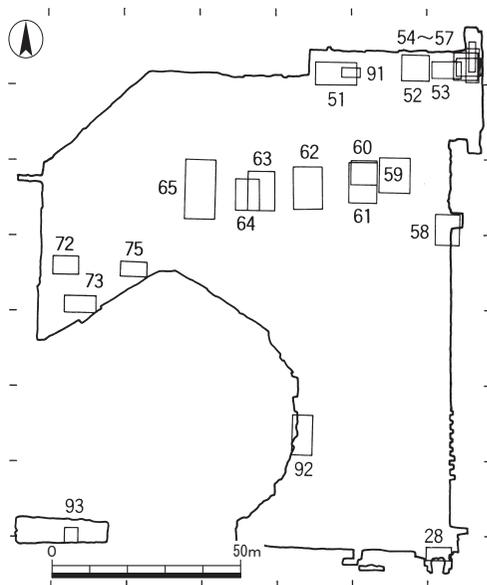


図18 建物遺構の分布(2) (1:2,000)

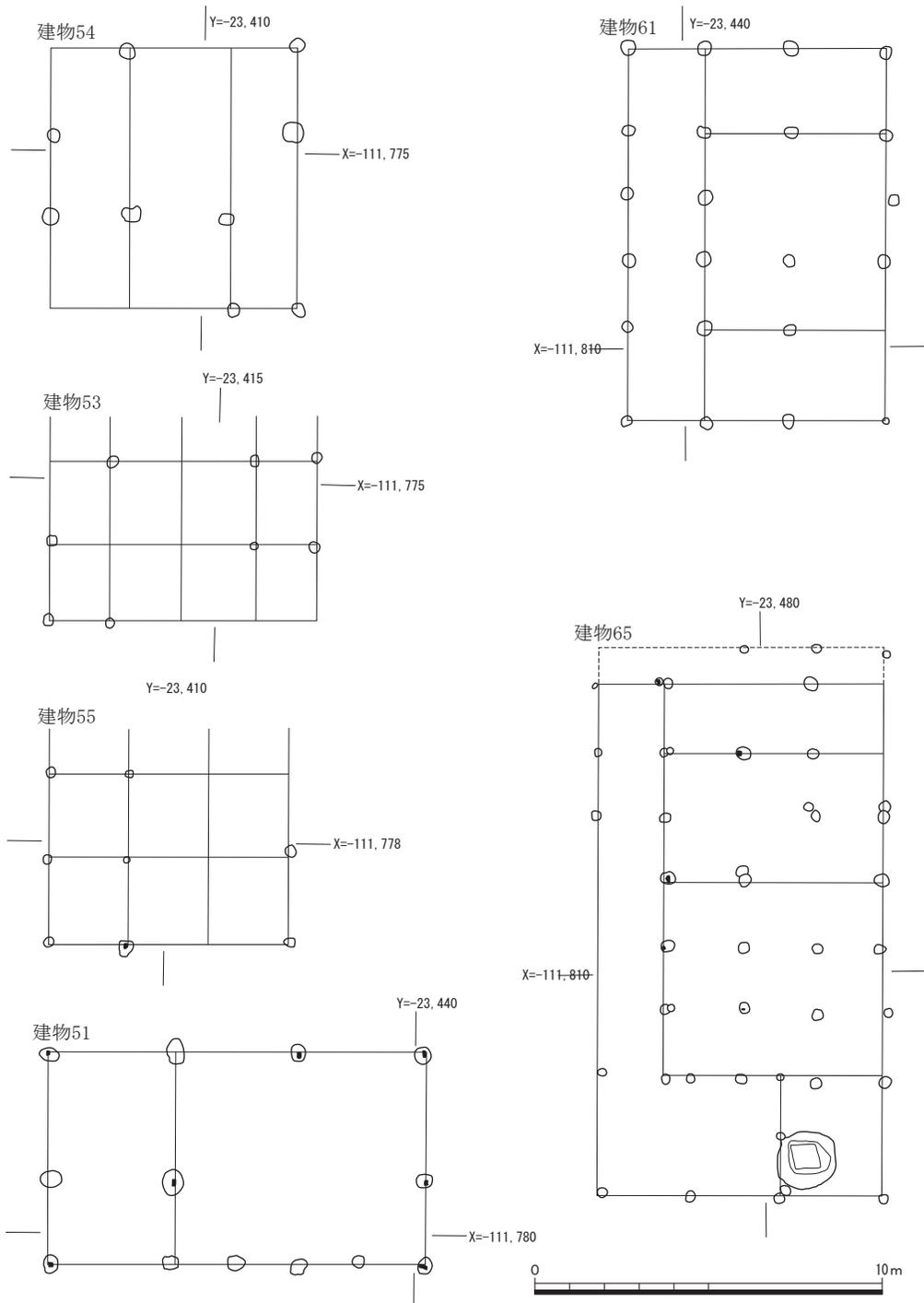


図19 平安時代末期・鎌倉時代の建物遺構の典型例(1:200)

4 節 井戸遺構

井戸は合計11基検出した。素掘りのもの(図版45の2)と側枠を持つものがある。側枠は、一般に木枠・石枠・漆喰枠などがあるが、ここでは木枠のもののみである。ただし、近代の野壺は漆喰枠で作る。枠の平面形態は円形(図版44の1)と方形(図版45の1)がある。枠の組み方には、枠板を立てるもの(縦板組み、図版47の2)と、セイロのように横に組んだ枠を重ね上げるもの(横板組み、図版43の1)がある。縦板組みの場合、枠が崩れないように、方形に組んだ棧(横棧)を深さに応じて数段重ねて内側から保持するのが通例であり、目張りや補強を兼ねて、枠の外側にさらに薄い板を添えることも多い。

井戸は湧き水を利用するので、井戸の深さはその時期の地下水位の高さを反映する。平安時代前期は、標高24.5～25.0m付近に底があり、平安時代末期・鎌倉時代は標高23.5～24.1mに底がある(表4)。時期が下るにつれ、地下水位が低下したことを示す。この傾向は市内の遺跡で一般に認めるものである。

イ 平安時代前期(図版43・44、図20・21) 円形縦板組みと方形横板組みがある。

井戸E005(図版10・43の2、図21の3) 方形の掘形のやや西寄りに径87cmの円形に井戸枠の痕跡がある。枠板は残っていない。井戸S013と同種の構造とみる。

井戸S013(図版15・44、図21の1) 円形縦板組みの井戸である。1辺2.3mの

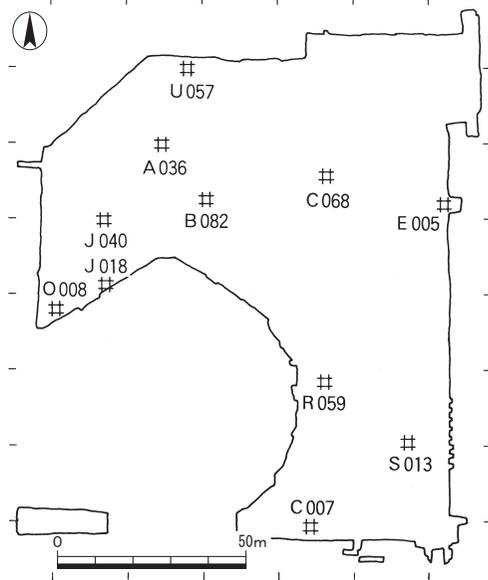


図20 井戸遺構の分布(1:2,000)

時期	平安時代前期			平安時代末期・鎌倉時代							
遺構名	E005	S013	U057	A036	B082	C007	C068	J018	J040	O008	R059
基底標高	24.8m	24.5m	25.0m	24.1m	23.8m	24.0m	23.8m	23.7m	23.6m	23.7m	23.5m

表4 井戸の基底標高

方形掘形の北寄りに板を二重の円形に組んで枠を作る。内枠は21枚の板を用い、径72×82cmに作る。外枠は26枚の板を用い、径114×120cmに作る。枠板にほぞ穴を開け、別にほぞを用意して相互を固定する。ほぞ穴の位置は、内枠は下端から30cm上、外枠は同じく60cm上と異なる(図版44の2)。枠の中の底に板材が2枚あり、板の先端には小さな穴が開く。先端は内枠の下にもぐり込んでいた(図版44の3)。枠を組む時に枠の固定に用いたものかもしれない。土器・石を多数放り込んで埋めていた。建物16と重複する。

井戸U057(図版4・43の1、図21の2) 方形横板組みで最下段のみ残る。枠は一辺1.6mと大きい。枠内の底に拳大の礫を敷き詰める(図版43の1)。井戸の掘形は土器溜U058と重なりわからなかった。六町の南縁にあり、北湿地の上にする。

□ 平安時代末期・鎌倉時代(図版3～5・9・14・45～48、図20・22・23、表4)

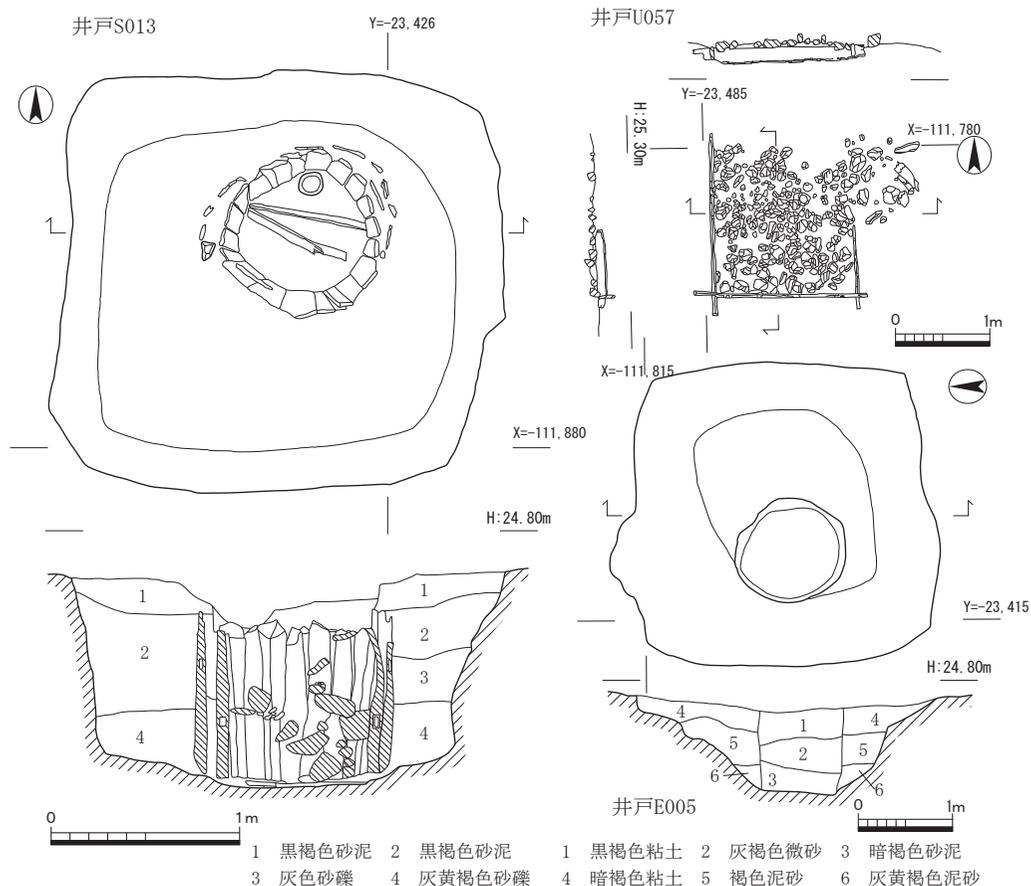


図21 平安時代前期の井戸遺構(1:40)(1:80)

円形の素掘りと方形の縦板組みがある。杵は、一辺 1m 前後が多い。杵に用いる板材は、幅 20cm 前後のもの、幅 10cm 前後のものがある。

井戸 A036(図版 3・47、図 23 の 1) 方形縦板組みの井戸である。杵は一辺 95cm で、各辺に 5 枚ずつ板を立てる(図版 47 の 2)。板の下端は不揃いである。縦板の外側にはその継目を塞ぐように薄い板材を添えている。深さは 1m ほどの残り、横棧は 2 段確認する。遺物は、曲げ物(図版 24 の 674)が出土したのみである。楊梅小路のすぐ南にある。

井戸 B082(図版 4) 方形縦板組みの井戸である。杵の大半は壊されていたが、底に方形に組んだ横棧が残っていた。横棧は土圧のためか変形が著しい。杵は一辺 75cm に復元できる。横棧の北東と南東の隅には、棧を支える長さ 50cm ほどの隅柱が残る。杵板は幅 10cm ほどである。建物 65 の裏の一面に納まるようにある(図 19 の 6)。

井戸 C007(図版 13) 素掘りの円形の井戸である。上の径 1.8m で、底へ行くほど狭くなる。深さは 1.5m 残る。遺物はほとんど出土しなかった。池 C004 の下で検出した。

井戸 C068(図版 9・46、図 22 の 2) 方形縦板組みの井戸である。掘形の南に寄せて杵を組む。杵は一辺 84cm である。杵板は幅 10cm ほどのものを各辺 9 枚ずつ並べる。その外側には薄い板材で二重、三重に補強する。深さは約 1.5m 残り、横棧は 3 段を確認する。

井戸 J018(図版 5、図 23 の 3) 円形の素掘りの井戸である。上の径 2.1m で、下ほど径が狭くなる。井戸の中の第 1 層の下部からは箸(図版 24 の 678～686)を含む木片、土師器杯・皿(図 44 の 138～153)などが出土した。

井戸 J040(図版 5・45 の 2、図 23 の 2) 円形の素掘りの井戸である。上の径 1.8m で、下ほど径が狭くなる。底の径は 40cm である。深さは 1.6m 残る。上から 4 分の 1 の所で、土器が多数出土した(図 46 の 230～251)。

井戸 O008(図版 5) 井戸杵は完全に壊され、深さ約 1m の所に杵板が散乱する。底に一辺 1.0～1.1m の方形に巡る礫を検出し、木杵組みの井戸であることを確認した。掘形は 2.2m の円形である。

井戸 R059(図版 14、図 22 の 1) 方形縦板組みの井戸である。東西 3.5m、南北 2.6m の掘り方の東寄りに杵を組む。杵は一辺 1.0m で、幅 24cm ほどの板を各辺 4 枚ずつ並べる。その外側にも薄い板材で目張りをする。横棧は 35～40cm 間隔で 4 段残る。井戸杵の西側の掘り方内から、完全な形で残る鋤(図版 25 の 712)が出土した(図版 45 の 1)。また、杵の中の底から宋銭が 1 枚出土した(図 54 の 348)。

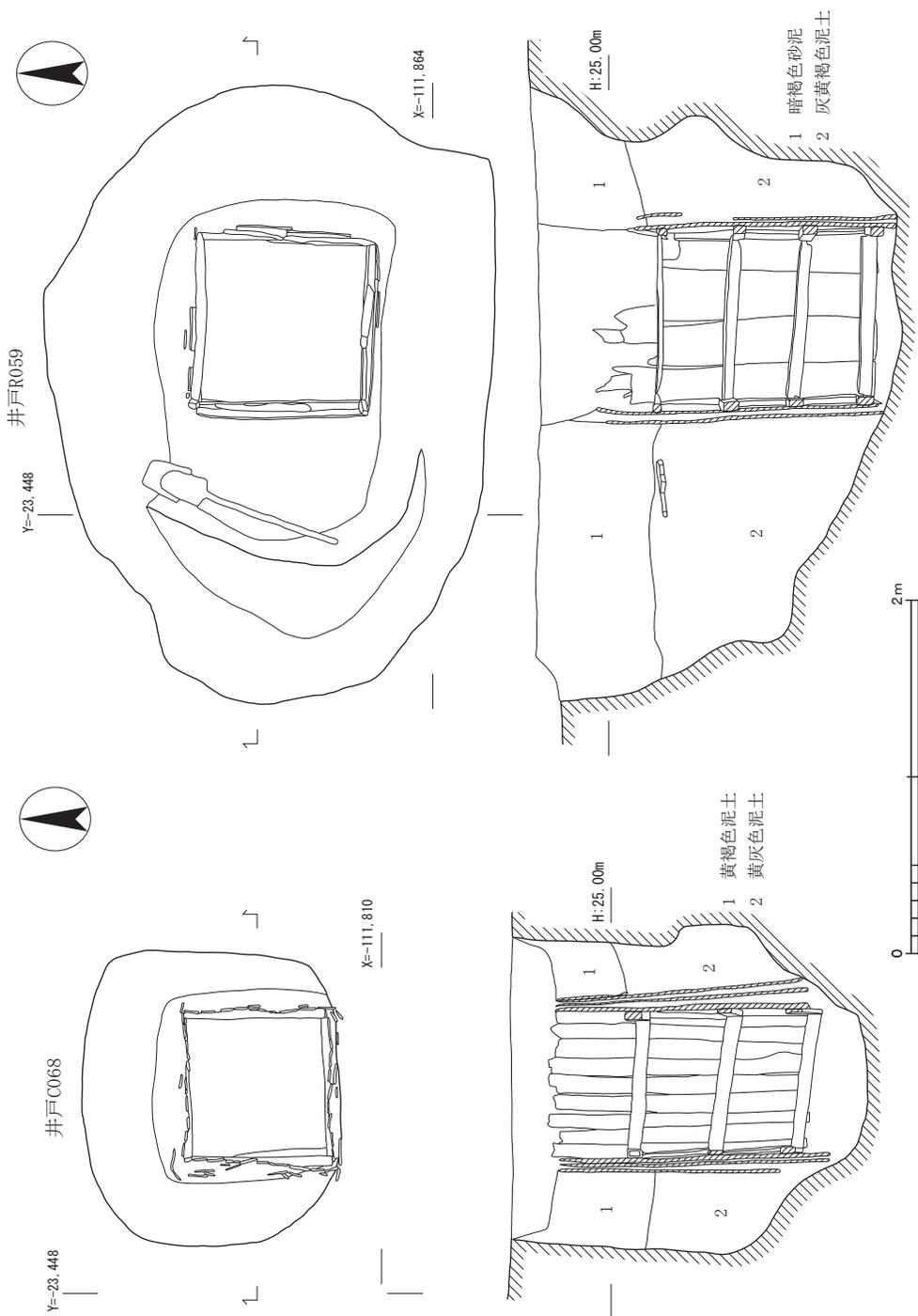


図22 平安時代末期・鎌倉時代の井戸遺構(1) (1:40)

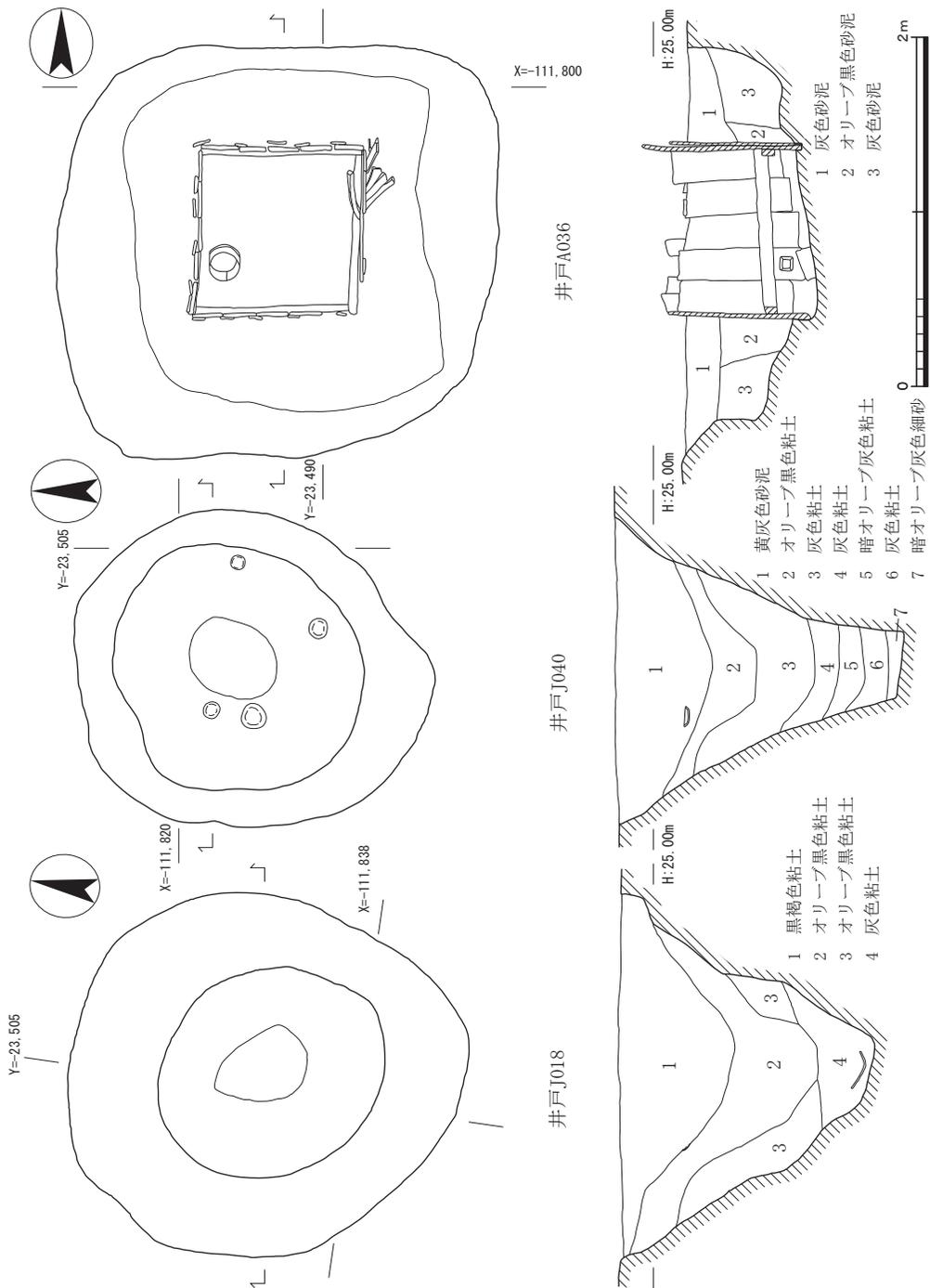


図23 平安時代末期・鎌倉時代の井戸遺構(2) (1:40)

5 節 池遺構

池 C004 (図版 13・14、図 24) 東西 12.5m、南北 8.5m で楕円形を呈する。これから濠 B016 に向かって深さ 10～20cm の浅いくぼみが延びる。池の深さは約 70cm で、中央の西寄り径 2.5m ほどさらに 30cm くぼむ。景石や州浜などの本格的な仕事はない。池の土壌の植物遺体の分析では、草本の雑草が若干出土したのみで、木本は出土しなかった (Ⅲ章 4 節)。五町南部にある平安時代末期・鎌倉時代の池である。

6 節 土器溜遺構・瓦溜遺構・方形土壌

Ⅰ 土器溜遺構 (図版 4・8・12・49、図 24)

土器溜 U058 (図版 4) 井戸 U057 を中心におよそ東西 4m、南北 8m の範囲に遺物が集中していた。井戸に属する遺物とすると出土範囲が広すぎ、井戸と重なる土器溜と判断した。遺構の輪郭がわからず、4m 方眼で遺物を取り上げた (U059・060・061)。平安時代前期の遺物 (図版 16 の 437～480) が出土した。

土器溜 0019 (図版 12・49 の 1) 東西 2.0m、南北 4.5m の長楕円形の平面で、深さは 20cm ある。平安時代前期の遺物 (図版 17 の 507～531) が出土した。瓦や炭が混じる。五町の土器溜である。

土壌 B103 (図版 4・49 の 2) 東西 1.0m、南北 1.2m、深さ 50cm の土壌である。この上位から鎌倉時代の土師器杯 5 個体、皿 6 個体が出土した。土器溜といえるほどの土器出土量ではないが、留意すべき遺構としてここに記述しておく。次の T066 も同様である。

土壌 T066 (図版 8・49 の 3) 径 70×82cm、深さ 22cm の土壌である。中から土師器皿 3 個体、瓦器皿 1 個体が出土した。

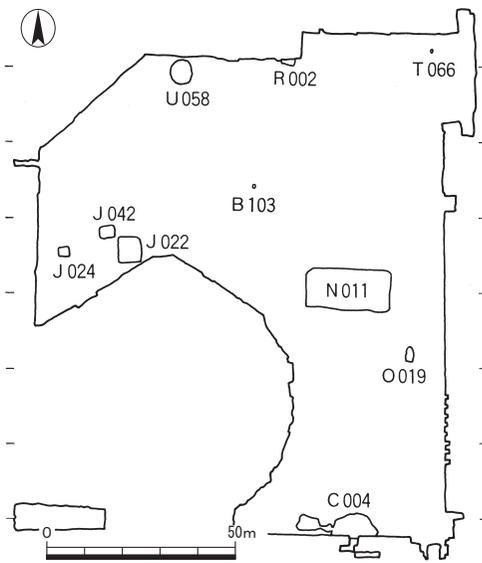


図 24 池・土器溜・瓦溜・方形土壌の分布 (1:2,000)

ロ 瓦溜遺構（図版 7・50、図 24）

瓦溜 R002（図版 7） 規模は東西 3.7m、南北 1.8m 以上で、北は調査区外に広がり、全容は不明である。深さは 30 cm で、平安時代末期・鎌倉時代の瓦を多量に投棄していた（図版 50 の 1）。軒瓦は巴文軒丸瓦・剣頭文軒平瓦がほとんどである（表 9）。六町の南端に位置し、六町内の建物を壊した時に投棄したものである。

なお、五町では、濠 B016 に多量の瓦を投棄している（表 9）。この軒瓦は瓦溜 R002 のものとは異なる製作手法の瓦である（Ⅲ章 2 節ハ）。

ハ 方形土壇（図版 5・6・11・12・50、図 24）

方形あるいは長方形の大型の土壇である。4 遺構あり、うち 3 遺構は E45 J 区に集中する（図版 50 の 2）。一辺 3m 以上で、深さは 30～50 cm ある。平安時代末期から鎌倉時代頃の遺構と思われるが、一部に室町時代の遺物が微量混じり、その時代を下る遺構があるかもしれない。当初、古墳時代頃の堅穴住居や平安時代の建物の基壇の可能性も考え調査したが、いずれでもなかった。中に泥土が堆積するが、池にしては掘り込みがしっかりしており、また、木の葉や種子の堆積はまったくない。方形のものでは、これを内に納めるように平安時代末期・鎌倉時代の建物と重なる例もあるが、同時期の大半の建物では、類似するような土壇との重なりを持たない。性格の解明は今後にゆだねる。

方形土壇 J022（図版 5・6・50 の 2） 南北 6.5m、東西 6.5m、深さ 30cm の方形の土壇である。内部の土層は均質な泥土である。意図的に埋めた様子はない。当初、堅穴住居かと思ったが中から瓦が出土した。この土壇が内に納まるように建物 75 と重なる。

方形土壇 J024（図版 5） 東西は 3.5m、北に行くほど浅くなり、南北は 2.5m まで確認する。東西を生かし一辺 3.5m の方形土壇とみる。J022 の西にある。この土壇が内に納まるように建物 72 と重なる。

方形土壇 J042（図版 5・50 の 2） 東西 4.2m、南北 3.2m、深さ 30cm の規模を持つ。J022 の西北にある。

方形土壇 N011（図版 11・12） 東西 22.2m、南北 11.0m の長方形で、ほかよりも大きい。深さ 30cm で、底はほぼ平坦である。砂礫の基盤を掘り込む。平安時代末期・鎌倉時代の柵 10 よりも古い。遺物は平安時代末期のものが少量出土した（図 44 の 164～167）が、遺構の時期はそれよりも遡る可能性もある。この底で平安時代前期の建物 09 をみつけた。

7 節 その他の遺構

イ 湿地遺構（図版 3～6・51・52、図 26）

調査区の西北部に形成要因の異なる二つの湿地がある。その位置から、北湿地・南湿地とする。両湿地の上には、平安時代の遺物を含む土層が部分的に覆う。付近には平安時代前期の建築遺構を認めず、平安時代前期にあっても、依然として居住には不向きであったことを物語る。井戸から採取した植物遺体の分析では、平安時代末期・鎌倉時代にあっても、湿地付近がかなり湿潤であったことを示す結果を得ている（Ⅲ章 4 節）。

北湿地（図版 3・4・51 の 2） 現状で、最大長約 50m、幅約 20m を有する。敷地の北部で行われたガス管理設工の掘削断面でも、この湿地の堆積層を確認している。

湿地の検出する高さは、標高 25.1m から、東側がやや高く標高 25.4m である。湿地の底は凹凸があり、低いところで標高 24.3m を測る。堆積層は全体で 70～90cm あり、上層・下層・最下層の 3 層に大別できる。最下層は、水の流れた状態を示す砂と泥の混じった砂礫層で、縄文土器・弥生土器を出土する。下層は木の葉を多く含む腐植土層で、弥生時代後期や古墳時代初期の土器それに木製品を若干出土する（Ⅲ章 6 節）。湿地の形成時期はこの頃である。上層は厚さ約 20cm の泥土である。湿地の南肩部では、古墳時代前期や後期の土器が出土している。その時期の土器には大きな破片や摩滅の少ないものがいくつかあり、近くに集落遺跡の存在を想定できる。

南湿地（図版 5・51 の 1） 南北約 30m、東西約 13m を確認する。その東縁は西に中心がある弧状を呈する。検出する高さは標高 25.0m 前後、底は標高 24.2m 前後である。湿地の堆積層は厚さ約 90cm ある。灰色泥土の堆積する上層と黒色泥土・腐植土の堆積する下層の 2 層を認める。下層は間に基盤の泥砂の流入土を挟む部分もある。

下層では、主に流入土から後期・晩期の縄文土器を出土した（Ⅲ章 6 節）が、弥生土器は出土していない。湿地の形成時期が北湿地よりも古く、縄文時代にあると考える。北部では、流入土に焼土粒を若干認めた。その北東には、焼けた石の密集する遺構がある。

上層では古墳時代や平安時代の遺物も若干出土したので、二次的な攪拌を受けている部分があるかもしれない。

古流路 E011（図版 6） 調査区西南隅の E55E 区に認めた、東北から西南に流れる自然流路である。粘土混じりの微砂と粗砂が互層となって堆積する。最下部に弥生土器とみる小土

器片を微量含む。流路の堆積土の上には平安時代の瓦が多く、この時期に整地をしている。

古流路 E020 (図版 3・4) 北湿地の南にあり、西寄りはその南縁と重なる。その部分は平安時代に整地を受けていたために、湿地との識別はできなかった。緩やかな弧を描く。東寄りでは断面 V 字形を呈し、人工の可能性もある。泥土のみの堆積である。弥生時代後期・古墳時代初期の土器を若干出土する。

焼石集積遺構 E019 (図版 3・52 の 1) E45E 区にあり、北湿地と南湿地の間に位置する。径約 1m の範囲に焼けた拳大の礫が群集する。基盤の泥砂を少し掘り下げて検出した。時代を確定できないが、縄文人の生活の痕跡と思われる。

焼石集積遺構 U065 (図版 4) F31U 区にあり、北湿地の南際に位置する。南半は破壊を受ける。東西 1.3m、南北 0.9m、深さ 3cm のくぼみの中に、焼けた石が群集する。上の焼石集積遺構 E019 の東北約 35m にある。

ロ 土取穴 (図 25)

平面形状は、概して長さ 10m、幅 1.7m 前後のものが多い。これは、1 回の採掘面積が一定であったことを物語る。穴の深さは泥砂層の深さによって決まり、砂礫に達した時点で止める^{注7}。穴の底や壁には、鋤などの掘削具による凹凸がみられる。

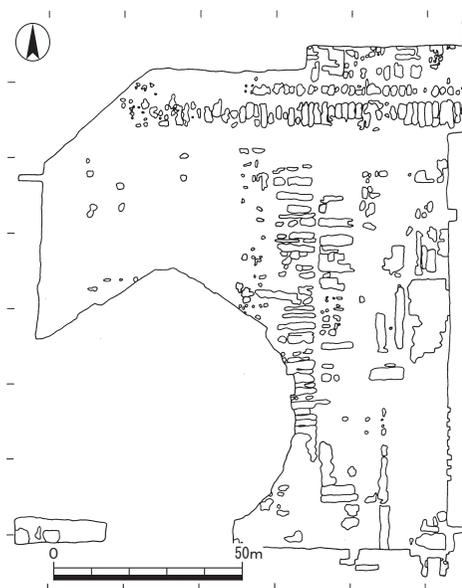


図 25 土取穴の分布 (1:2,000)

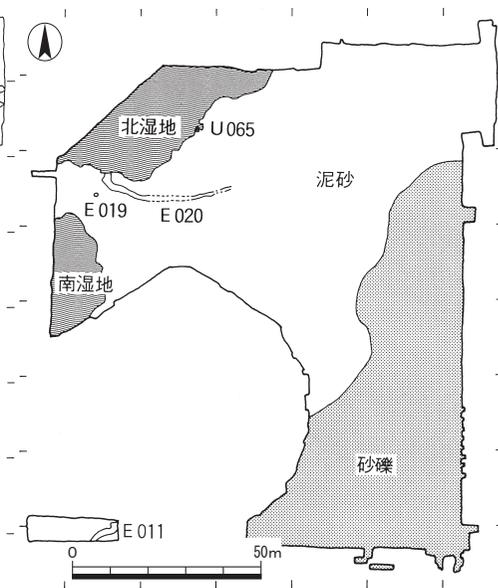


図 26 基盤土層の分布 (1:2,000)

土取り穴は耕作関係の溝の間に納まるようにして群を作る傾向がある。これは、地上の溝などが採掘場所の目印となっていたことを示す。江戸時代中頃の採掘である。

ハ 耕作関係の遺構（図 27）

漆喰枠の野壺が楊梅小路の南側に東西に並ぶ。小路の北側にはないので、小路の南側が地境の畦畔となっていたのであろう。

溝は楊梅小路や六町域では明確ではなく、五町域に顕著である。五町では、南北方向のものが卓越するが、東西方向のものもある。^{注8} 12.0～12.5m 間隔で基幹のものが走り、その間を3分するように補助の暗渠とみられる溝が走るようである。いずれも土取り穴よりも新しく、江戸時代中頃以降のものである。



図 27 耕作関係の遺構の分布 (1:2,000)

ニ 京都競馬場跡（図版 52、図 28）

Y=-23,469m の西と Y=-23,439m の東に径 35～40cm、深さ 50cm で中に石の詰まった柵が 3.6m 間隔で並んでいる。一部では径 25cm ほどの柵杭が残っていた。両柵の間隔は 31m で、この間が馬場となる。馬場は北で東に若干振れている。調査区内では馬場の曲がりのみならず、直線部分のみの検出である。この馬場の西に接して、幅 5.7m の掘り込みが並行していた（図版 52 の 2）。

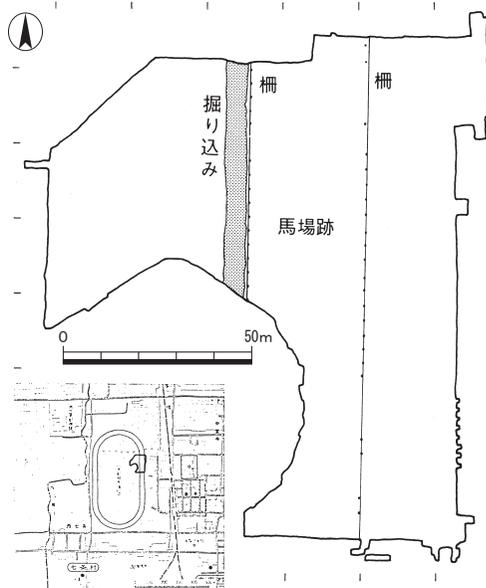


図 28 京都競馬場跡 (1:2,000)

注 1 参考に五町・六町の築地 004 隅の座標データを示す。

五町 東北 X=-111,794.13m 東南 X=-111,913.47m
 Y=-23,403.12m Y=-23,402.64m
 西南 X=-111,913.95m 西北 X=-111,794.61m
 Y=-23,521.98m Y=-23,522.46m
 六町 東北 X=-111,662.86m 東南 X=-111,782.20m
 Y=-23,403.66m Y=-23,403.17m
 西南 X=-111,782.68m 西北 X=-111,663.34m
 Y=-23,522.51m Y=-23,522.99m

注 2 北湿地の覆土から出土した遺物の整理時に、平安時代末期・鎌倉時代の土器が南側溝の想定位置に帯状に密に分布することがわかり、その時期の側溝を調査時に見逃していた可能性がある。

注 3 通常、宅地は築地や垣根などによってその限りが明示される。ところが、限りの内側に浅い溝が走る場合がある。この溝を宅地の主要部分を限る溝と呼ぶことにする。溝は築地などの限りのすぐ内側を走る場合と、かなり離れて走る場合がある。

注 4 『日本建築史図集』（文献 51）の P. 30。

注 5 各建物の模式図の記号の凡例を示す。

- 礎板もしくは根石を確認した柱穴
- 礎板もしくは根石を確認していない柱穴
- ☒・◎ 柱の痕跡を確認した柱穴
- ・● 柱根が残る柱穴
- ☒・○ 柱の抜き取りを確認する柱穴
- + 実際には確認していないが、存在したと考える柱位置

注 6 各型に類似する建物は次の通りである。

建物の型	類似建物
建物 54 型	建物 52
建物 61 型	建物 62・63・(73)
建物 55 型	建物 91・72
建物 53 型	建物 60
建物 65 型	建物 (56)・57・58・59・64・(92)・93
建物 51 型	建物 28

表 5 平安時代末期・鎌倉時代の建物類別

- 注7 遺跡基盤は、基本的には鴨川の氾濫原で、砂礫を主体とする。この表層あるいは砂礫のくぼみに泥砂質の土層が堆積する。調査区の東南寄りの半分は、基盤の表に砂礫が露出し、西北寄り半分は、泥砂が砂礫を覆って分布する。この泥砂を削って湿地の泥土が堆積する。泥砂の分布域に土取り穴が多い。良好とはいえないまでも平安時代前期の宅を発見できたのは、その主要部分が砂礫の分布域にあり、土取りによる壊滅的な破壊から免れたからである。
- 注8 調査地の現在の標高は、敷地東北部で26.7m、敷地西南部で26.1mで、その距離約160mを考慮すると、東北部が若干高い程度で、ほぼ平坦である。一方、遺跡の基盤の標高は、東北部の1区付近で25.8m、西南部の2区付近で24.8mである。おおむね、現地表から0.9mから1.2m下に遺跡の基盤がある。この間の上位0.7mから1.0mほどは旧工場敷地時の盛り土で、下位約0.2mはそれより前の耕作土である。従って、調査地内での東北部と西南部での基盤の高低差は、耕作における水利の便にしたがう。
- 注9 明治40年(1907)、調査地付近に京都競馬場が作られた。当時の地図から、調査地は東馬場直線部分にあたるとわかる。大正元年(1912)、競馬場が焼失し、京都府船井郡須知町へ移転した。

Ⅲ章 遺 物

1 節 土器

イ 平安時代前期（図版 16～18・53～55、図 29～37）

この時期の土器は種類が多様である。前の時代から引き続く土師器や須恵器のほかに、新たに普及するものとして、土師器と同様な焼成であるが表面を炭で黒化処理した黒色土器、鉛成分をうわ薬に用いる緑釉陶器、木灰をうわ薬に用いる灰釉陶器、それに、白土を用いて恐らく窯で焼いた白色無釉陶器^{註1}などがある。総量においては、土師器が圧倒的に多く、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、白色無釉陶器の順である。それに中国製の白磁・青磁が若干加わる。

器の種類も都市生活を反映し多様である。機能からみて、大きく食器（杯・椀・皿・高杯）、小形容器（壺・短頸壺・瓶子・平瓶）、煮炊き具（甕・釜）、調理具（鉢）、貯蔵具（甕・瓶）に分類するが、各々で様々な形態がある。食器以外の種類は、土器の種類を選択している。特に、火を扱う場合には土師器・黒色土器という低火度焼成のものを用いている。食器と機能上分類する土器でも、使用痕から煮炊き（土師器皿、黒色土器椀）、灯明（土師器杯・椀、須恵器杯）、摺皿（土師器皿・杯）、加工台（土師器皿）、漆溶き（須恵器杯、土師器杯）、硯（須恵器蓋）に用いたとわかるものがある。

a 時期区分

土器は、製作手法の変化によって、細部の特徴が微妙に異なる。特に、土師器の食器は、その変化が顕著でしかも大量に出土し、時期区分の絶好の指標となる。すでに、『平安京右京三条三坊』（文献 31）で平安時代の土器、特に食器を中心にしてⅠ期からⅤ期に区分する型式編年を提示している。その編年に従って、出土した平安時代前期の土器群の帰属する時期を示すと次の通りである。

Ⅰ期中（780～810年）土器溜 U058

Ⅰ期新（810～840年）溝 U062・溝 V019・土器溜 0019・井戸 S013

Ⅱ期古（840～870年）該当する土器群なし

Ⅱ期中 (870～900年) 井戸 E005・井戸 U057

Ⅱ期新 (900～930年) 該当する土器群なし

b 形態の概略

<土師器：図 29 >

杯・椀 やや丸味を持って開く体部を持つ。底部はほぼ平らである(1・2・5)。杯には台の付くもの(5)と、台の付かないもの(2)がある。椀は台が付かない。また、台の付く杯と組み合う蓋(4)がある。回転台を用いない手作りで、なで調整を基本とする。外面を削って形を整えるが、削りを省くものもある。回転台を用いて調整するものがごく少量ある(図版 17 の 484、18 の 564)。

皿 短い体部を持ち底部は広く大きい。調整は、杯・椀と同様である(3)。

高杯 横に大きく開く杯部に、面取りした細く高い脚部が付く(6)。

短頸壺 短い受け口を持つ小形の壺である。これに組み合う蓋は確認できない。体部の調整に磨きを加える(7)。

甕 丸い体部を持ち、底部も丸い。頸部のくびれが少なく、口径と体径がほぼ等しい。成形は粘土紐の積み上げを基本(8)とし、タタキを加えるものがある(図版 17 の 504)。

<須恵器：図 30 >

杯 直線的に開く体部を持つ。台の付くもの(13)と付かないもの(11)がある。台の付くものと組み合う蓋(12)がある。調整には回転台を使用する。これに、緑釉陶器と同一形態・調整で、釉を掛けない一群が加わる。

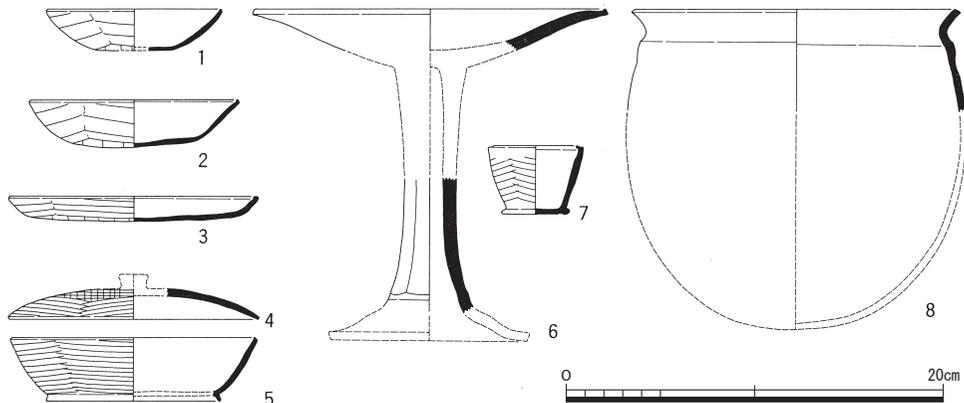


図 29 土師器 (1:6)

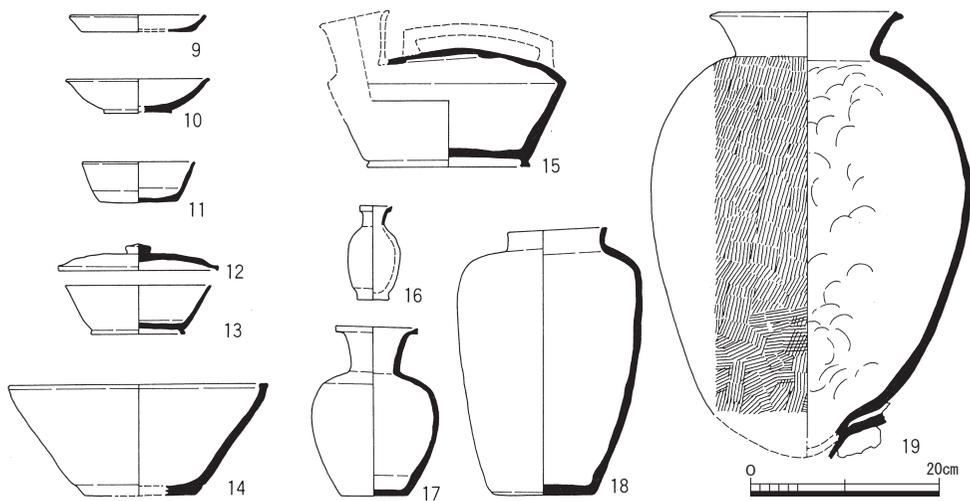


図 30 須恵器 (1:8)

Ⅲ 短い立ち上がりの体部と平らな底部を持つ形態 (9) と、少し深みのある体部と低い台の底部を持つ形態 (10) がある。後者は緑釉陶器と同一形態・調整である。

壺 丸味のある体部を持つ。ほとんどが台を持つ (17)。

瓶子 丸みのある体部を持つ小形の壺で、ほとんどに台が付かない。底に糸切りによる切り放し痕を残す (16)。

平瓶 大きい杯に蓋をかぶせたような体部を持つ。蓋をした体上部の一方に寄せて、口を付ける。把手が付く (15)。

甕 上位に丸みの中心がある体部を持ち、底部も丸い。タタいてつくる (19)。

瓶 上が少し開く筒状の体部を持ち、底部は平らである。短い口頸部を持つ (18)。

鉢 直線的に開く体部を持つ。頸部にくびれがあるものと、ほとんどないものがある。大半は平底であるが、台の付くものもある (14)。

< 黒色土器：図 31 >

杯 土師器の杯よりも幾分深めの体部を持つ。台の付くものもあるが台の付かないものには、内側に渦・花文を暗文で表す。内面と口縁部のみを黒化処理する (21)。

Ⅲ 体部と口縁部が一体となって直線的に開く。大小ある。台が付く。内面と口縁部のみを黒化処理する (20)。

甕 丸い体部を持ち、底部も丸い。頸部が若干くびれる。内面と口縁部のみを黒化処理する (22)。

< 緑釉陶器：図 32 >

椀 丸みを持って開く体部を持つ。底を軽く削り出して台とする (24)。台を貼り付けるものはごくわずかである。

皿 椀の体高を低くしたような形態 (23) と、口縁の両側を内に折り返した耳皿の形態がある。

壺 全体の形は不明であるが、体部の破片が少量ある。

< 灰釉陶器：図 33 >

椀 丸みを持って開く体部を持つ (26)。いずれも台が付く。

皿 椀の体高を低くしたような形態 (25) と、体部と口縁部の境が段をなす形態がある。

壺 須恵器と同じ形態である。

瓶子 底部近くに最大径があり、上にいくにしたがい細くなる体部を持つ。底部は平らである (27)。

平瓶 須恵器と同じ形態である。

< 白色無釉陶器：図 33 >

椀 丸みを持って開く体部を持つ。緑釉陶器の椀の形態に近い (28)。

皿 開きの大きい体部を持つ。

< 白磁：図 34 >

椀 心持ち丸い体部と幅の狭い台を持ち、小さな玉縁口縁となる形態 (29) と、体部が直線的に開く体部と中心のくぼみの小さな蛇の目台を持ち、平縁となる形態 (30) がある。

皿 下位に心持ち稜のある体部を持つ (31)。

< 青磁：図 34 >

椀 丸みを持って開く体部を持つ形態 (35・36) と、直

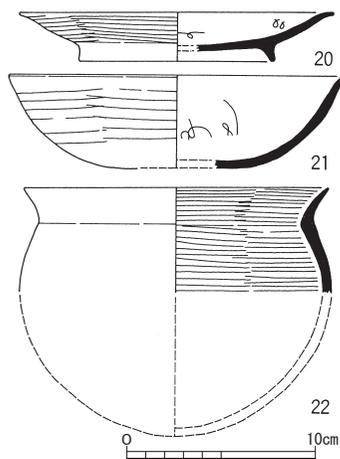


図 31 黒色土器 (1:4)

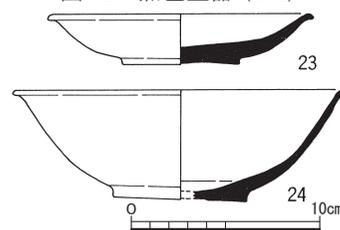


図 32 緑釉陶器 (1:4)

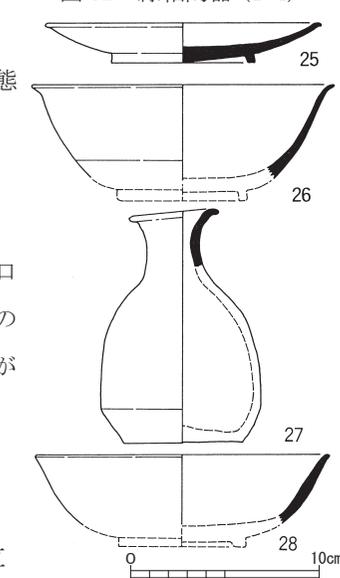


図 33 灰釉陶器・白色無釉陶器 (1:4)

線的に開く体部を持つ形態 (34・37・42～44) がある。

皿 直線的に開く体部を持つ (40・41)。口縁端に輪花を刻むものがある (40)。

壺 宝珠形の壺の蓋がある (39)。

合子 身 (33) と蓋 (32) がある。

鉢 丸みのある体部を持ち、口縁にたが様の縁取りがある (38)。

c 土器群の概略

土器溜 U058 の土器群 (図版 16 の 437～480) I 期中の土器群で、土師器・須恵器・黒色土器はあるが、緑釉陶器・灰釉陶器・白色無釉陶器はない。

溝 U062 の土器群 (図 37 の 59～72) 土師器の食器のほとんどにケズリ調整を認め、I 期新でも古い様相の土器群である。土師器・緑釉陶器・青磁 (図 34 の 36) がある。

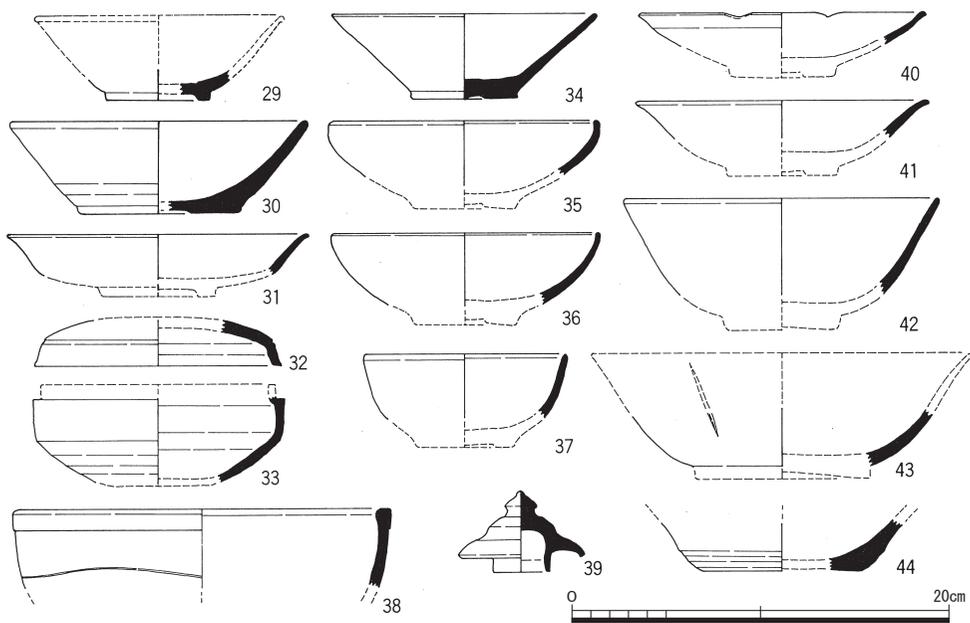


図 34 白磁 (29～31)・青磁 (32～44) (1:4)

溝 V019 の土器群（図版 17 の 481 ～ 506） これも土師器の食器のほとんどにケズリ調整を認め、I 期新でも古い様相の土器群である。土師器・須恵器・灰釉陶器・白磁がある。

土器溜 0019 の土器群（図版 17 の 507 ～ 531） I 期新でも古い様相の土器群である。土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・白磁（図 34 の 29）・青磁がある。

井戸 S013 の土器群（図版 18 の 532 ～ 587） I 期新でも新しい様相の土器群である。^{注3}土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器がある。

土師器の食器では、器面調整において I 期中の一律なケズリ調整が崩れ、その省略が目立つ。^{注4}灯明に使用した痕跡を持つものが、杯・椀に 10 点ある。

緑釉陶器の食器は、焼成時の焼き重ね方法に相異なる 2 群を認める。その 1 は、明確なトチンの目跡を残さない群である。低い台を持つ。口縁が外反せず直線的に開く形態（573）では、焼成時、重ねる器体の間に粘土の小粒を置いて、溶着止めとした痕跡を認める。口縁が外反する形態（567・569～571・574）では、明確には確認できないが、同様な溶着止めの方法を取っていた可能性がある。内面の口縁付近に釉よりも濃い緑色の斑文を数箇所付ける。その 2 は、トチンの目跡を明瞭に残す群である。これには底が軽くくぼむ台の皿（568）とやや高めの蛇の目高台の椀（572、図 32 の 24）がある。

井戸 E005 の土器群（図 37 の 73 ～ 99） II 期中の土器群である。土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・白色無釉陶器、白磁（図 34 の 30）・青磁（図 34 の 34）がある。

井戸 U057 の土器群（図 36 の 45 ～ 49） II 期中の土器群である。井戸は I 期中の土器溜 U058 と重なっていたため、その遺構の遺物が相当量混じっている。それを除くと、井戸の土器と認定するものは、少量の土師器のみとなる。

建物出土の土器（図 36 の 50 ～ 55・58） 建物の柱穴から出土した土器は、建物の年代を推定する上で重要であるが、出土量はきわめて少なかった。建物 02(54)・05(51)・06(50)・13(52)・14(53・55・58) のものを図示する。大半が I 期のものである。建物 14 の土師器椀（53）は II 期中の特徴を示す。建物 14 の廃絶の時期を示すものとみられる。

d 文字資料

文字資料は、時として、発見遺構の解明に有力な手がかりとなる。しかし、発見した平安時代前期の文字資料の大半は六町域からの出土で、五町の性格解明の手がかりは得ていない。また、木簡の類はまったく出土しなかった。

「口田」（図版 16、図 35 の 464）同一筆跡で 2 点ある。いずれも土師器皿の外面底部に墨書する。1 字目は「八」もしくは「入」・「大」か。土器溜 U058 から出土した。

「菩薩油」（図 35・37 の 71）須恵器の台の付く小さな皿の外面底部に墨書する。「菩薩」は「ササ」と略す。平安時代前期、六町内に菩薩像を安置する建物があったことを暗示する。溝 U062 から出土した。

「磯」（図 35・36 の 56）須恵器杯の外面底部に墨書する。湿地を攪乱した土層から出土した。

「可口」（図 35・36 の 57）須恵器杯蓋の天井部に墨書する。湿地を覆う土層から出土した。

「志」（図 37 の 83）黒色土器杯の外面底部に 1 字を墨書する。井戸 E005 から出土した。



図 35 文字資料

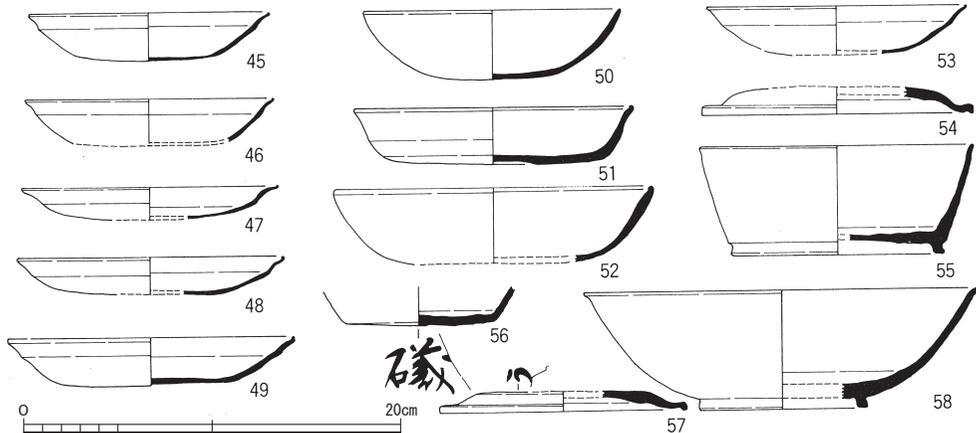


図 36 井戸 U057(45～49)・建物(50～55・58)出土の土器及び文字資料(56・57)(1:4)

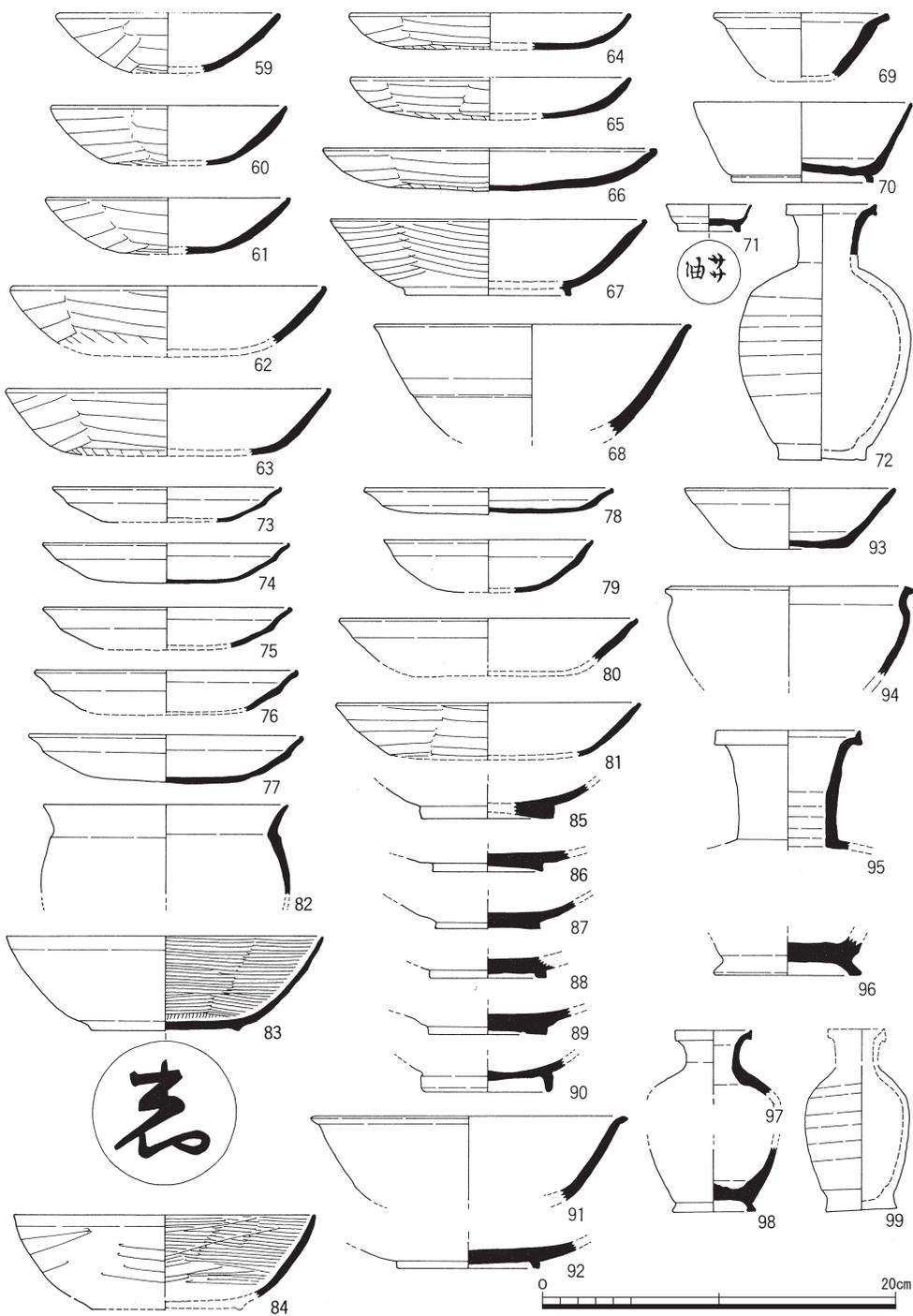


図 37 溝 U062(59 ~ 72)・井戸 E005(73 ~ 99) 出土の土器及び文字資料(71・83) (1:4)

ロ 平安時代末期・鎌倉時代（図版 55、図 38～46、表 6）

国産の土師器・陶器・瓦器と輸入の陶磁器がある。このうち、国産の陶器には、須恵器の系譜を引くもの、灰釉陶器の系譜を引くもの、それに焼締陶器がある。また、瓦器は、平安時代後期に成立する新たな焼物で、窯を用いて焼き、表面を黒化处理する。輸入の陶磁器には白磁・青白磁・青磁・陶器がある。

a 時期区分

土師器の杯による、この時代の時期区分注 6 とそのおよその年代、該当する土器群は次の通りである。各土器群の内容は実測図に示す。

V期新（1150～1180年）

井戸 C068（図 44 の 168～173）、井戸 J018（図 44 の 138～153）、方形土壇 N011（図 44 の 164～167）

V期新～VI期古^{注7}

井戸 J040（図 46 の 230～251）、井戸 R059（図 44 の 154～159）、土壇 T066（図 44 の 160～163）

VI期古（1180～1210年）

井戸 B082（図 45 の 208～212）、溝 F040（図 45 の 196～202）、方形土壇 J042（図 46 の 252～260）、池 C004（図 45 の 213～229）、土壇 B103（図 45 の 184～195）、土壇 X061（図 45 の 203～207）、北湿地の整地土（図なし）

VI期中（1210～1240年）該当する土器群なし

VI期新（1240～1270年）北湿地の整地土（図なし）

なお、溝 V008 出土の土器（図 46 の 261～284）は V 期新から VI 期新までであるほか、VI 期よりも新しいものが若干混じる。

建物から出土した土器（図 45 の 174～183）は、V 期新か VI 期古の特徴を持っているものが多い。建物 51（174・175）、53（178・179）、61（180～183）、65（176・177）を示す。

b 形態の概略

<土師器：図 38 >

杯 高さが低く斜めに開く体部を持つ。底部は平らである。手作りで、口縁と内面のナデ調整が基本である。底部との境付近を押し挟んで体部を持ち上げる方法を基本とする(102)が、その方法を取らない異質な一群(図46の268～273)が若干混在する。

皿 わずかに立ち上がりのある体部を持つ(101)。別に、口縁を内に折り返した形態(100)がある。

<国産陶器：図 38 >

椀 直線的に開く体部を持つ。断面3角の低い高台が付く。灰釉陶器の系譜を引く(104)。

皿 斜めに開く体部を持つ。高台は付かない。灰釉陶器の系譜を引く(103)。

鉢 体部と口縁部が一体となって開く形態で、高台は付かない。口縁は斜めに面を持つ。須恵器の系譜を引く(105)。

甕 上位が著しく張る体部と、大きく開く口縁部を持つ。焼き締め陶器(図46の284)と、須恵器の系譜を引くもの(図44の173)がある。

<瓦器：図 39・40 >

椀 丸みを持って開く体部を持つ。底に萎縮した粗雑な高台が付く。調整はミガキを基本とする(107)が、外面のミガキは粗く、ミガかないものもある。

杯 土師器の杯に近い形態であるが、体部下位に丸みがある。高台は付かない(108)。

皿 土師器の口縁部を折り返した皿と同じ形態である(106)。

鍋 上が心持ち開く体部を持ち、口縁部に蓋の受けがある(109)。

釜 丸みのある体部で、底部もやや丸い。口縁部に鋳が付く。細く高い3足が付くものもあり、必ずしも竈に据えない(111)。

火鉢 斜めに開く体部を持つ。小さな3足が付く。体部の上位から口縁にかけては厚く丈夫に作る(110)。

<白磁：図 41 >

椀・皿・壺・水注・小壺がある。

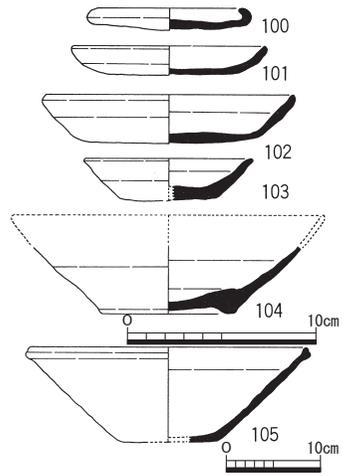


図 38 土師器(100～102)・陶器(103～105)(1:4)(1:8)

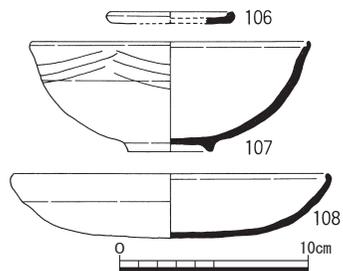


図 39 瓦器(1)(1:4)

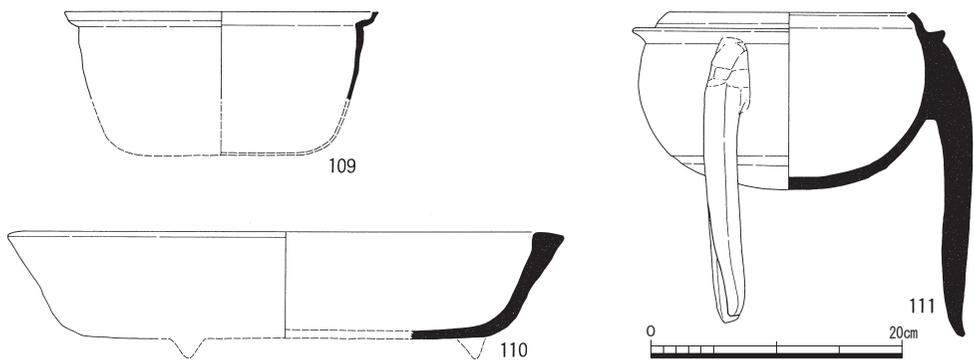


図40 瓦器(2)(1:6)

碗A 玉縁口縁を持つ。浅いくりこみの高台を持つ(116)。

碗B 平縁口縁を持つ。低い高台を持つ。内底の釉を環状に掻き取る(117)。

碗C 平縁もしくは外折する口縁を持つ。細く高い高台を持つ。内底に釉の掻き取りはない(118)。

皿A 屈曲がある体部を持ち、平底である。内面に文様を持つものがある(112)。

皿B 斜めに開く体部を持ち、低い台が付く。内面の底部の釉を輪状に掻き取る(113)。

皿C 斜めに開く体部を持ち、平底である。外面の体部をケズらない(114)。

皿D 丸みのある体部を持ち、低く小さな高台が付く(115)。

皿E 斜めに開く体部を持ち、平底である。口縁部の釉を切り取る。

<青白磁：図43>

碗(130)、小碗(129)、壺、小壺(127・128)、合子(124～126)がある。

<青磁：図42>

碗・皿・壺・合子・鉢・盤・壺がある。

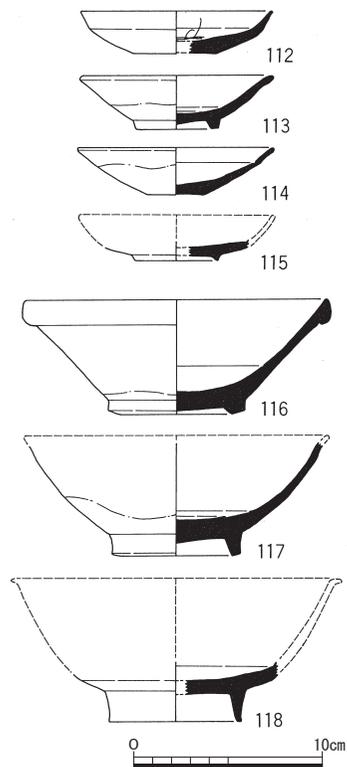


図41 白磁(1:4)

椀A 直線的に開く体部を持つ。内外面に文様を持つ(121)。

椀B 下部に丸みがあり上部は直線的に開く体部を持つ。内面に文様を持つ(122)。

椀C 下部の丸みが目立つ体部を持つ。外面に蓮弁文を持つ(123)。

皿A 稜のある体部を持つ。平底である。内面に文様を持つ(119)。

皿B 稜の目立たない体部を持つ。平底である。内面に文様を持つ(120)。

<輸入陶器：図43>

緑釉陶器 壺は、下部が細く高い体部を持つ(132・

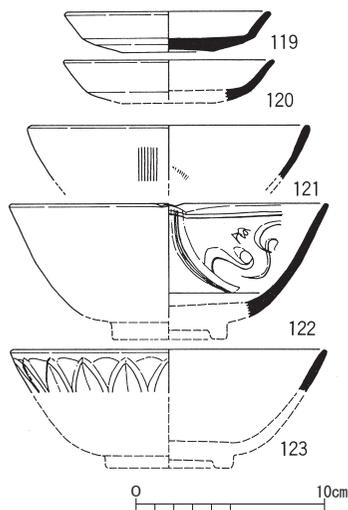


図42 青磁(1:4)

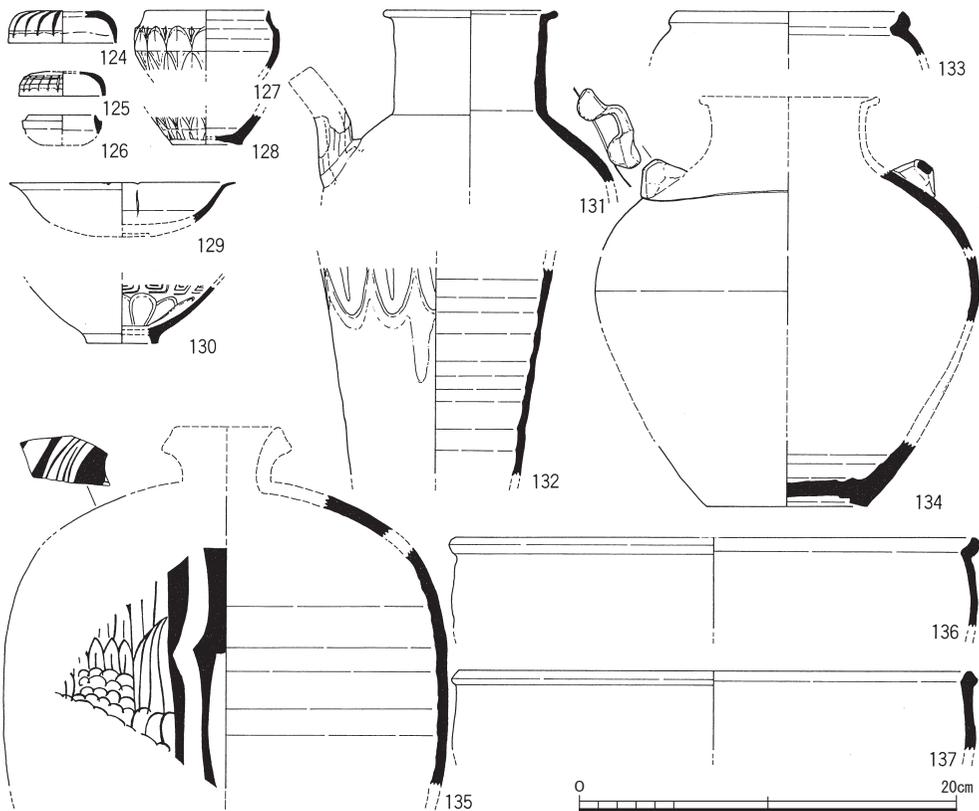


図43 青白磁(124～130)・輸入陶器(1:4)

135・137)。白地鉄彩（図版 55 の 135、注 8）がある。盤（137）は、丸みのある体部と玉縁様の口縁部を持つ。

黄釉陶器 盤は丸みのある体部を持つ。短く外折する口縁部を持つ（136）。

褐釉陶器 壺は丸い体部を持ち、特に上部の丸みが大きい。水注は注口片がある（133・134）。

白釉陶器 壺は丸い体部を持つ。水注も丸い体部を持ち、垂直に立つ口頸部が付く（131）。

c 技法

輸入陶磁器は、この時期の各遺構から（表 6）のほか江戸時代の土取穴からも相当量出土し、観察に十分な量（約 800 点）がある。製作技法に主眼をおいて観察する。

成形 基本はロクロによる引き上げで、青白磁の小壺・合子では外型枠を使用する。青白磁小椀は内型枠による可能性があるが、内面の圏線や外面のケズリなどについて説明の付かないことが多い。

調整 基本はケズって形を整える。その集約される部分は高台で、形態・精粗などからいくつかの群別ができる。緑釉陶器盤や黄釉陶器盤ではケズらない。高台部分を再度ナゲたり、ミガク例がある。焼き台からの取り離しを容易にするための手法とみられ、白磁椀 A・椀 B に顕著である。

井戸 B082	白磁皿 B(1 点) 青白磁合子(1 点)
井戸 C068	白磁椀 B(1 点) 皿 B(2 点) 青磁椀 A(1 点) 褐釉水注(1 点)
井戸 J040	白磁椀(1 点) 皿 C(1 点) 青白磁椀(4 点)
井戸 R059	白磁椀 A(2 点) 皿 C(114 他 1 点)
土壌 J042	白磁椀 B(1 点) 皿 C(1 点)
土壌 N011	白磁椀 B(1 点) 皿 A(1 点) 皿 B(1 点) 青磁椀 B(1 点)
土壌 X061	白磁皿 B(1 点)
溝 F040	白磁皿 A(1 点) 皿 B(1 点) 青白磁合子(1 点) 青磁椀 A(1 点)
溝 V008	白磁椀 A(116 他 5 点) 椀 B(117 他 4 点) 椀 C(1 点) 椀(6 点) 青磁椀 A(5 点) 皿 A(283) 皿 B(4 点) 皿 C(1 点) 皿 E(1 点) 皿(2 点) 壺(4 点) 青白磁壺(1 点) 合子(1 点) 青磁椀 A(5 点) 椀(2 点) 緑釉壺(1 点) 盤(1 点) 黄釉盤(2 点) 褐釉壺(2 点)

表 6 遺構出土の輸入陶磁器

胎土 磁土は目立った砂の混入はみられない。陶土は白色・赤色・黒色の砂の粒子がみられ、その混じり方が個体によって異なる。

化粧土 黄釉・緑釉陶器では成形時の肌の目潰しに胎土泥あるいは白泥を塗った跡が明瞭に残る。緑釉白地鉄彩壺は白土を全体に塗り、文様地の部分に鉄彩することにより、文様部分の白さを強調する。白釉陶器は内面と外面の肌感に相違があり、外面に白土を塗っている可能性がある。褐釉陶器ではその明確な痕跡は観察できない。白磁壺の底部近くの体部にやや褐色を帯びる透明な液の下塗りが明瞭にみられるものがある。白磁皿Eの釉を削り取った部分の縁や外面底部にも同様な釉の褐色変化がみられる。白磁壺では外面と内面の肌感が異なるものがある。青磁・青白磁では観察できない。

釉 磁器・陶器共に漬け掛けを基本とする。白磁碗C・皿A・皿Eでは白濁するものがある。青磁は全般に粘りがある。碗Cは釉が厚く、青白濁するものがある。青白磁碗・壺では透明なガラス質のものがある。陶器はいずれも釉が薄い。白地鉄絵以外の緑釉は釉が濃く、黄釉は釉が淡い。白釉は白濁している。

施釉部分 白磁碗A・碗B・皿B・皿Cでは外面の体部下半と底部に釉を掛けない。高台を持たない皿Aは外面の底部を除き施釉する。青白磁小壺・合子も外面の体部下半と底部には釉を掛けない。青磁碗Aは外面の体部下半と底部に釉を掛けない。碗Bは外面底部を除き、高台付近まで釉を掛ける。碗Cは外面底部を含む全面に釉を掛ける。陶器は外面底部には釉を掛けない。外面の体部下半に釉を掛けないものもある。緑釉・黄釉陶器盤は内面のみに釉を掛けるもの、内面と外面の口縁部に釉を掛けるもの、外面の底部を除いた部分に釉を掛けるものとまちまちである。

釉の削除 白磁碗B・皿Bは内面底部の釉を環状に掻き取る。白磁皿Eは口縁部の釉を削り取る。白磁皿A、青磁碗C・皿A・皿Bは高台縁の釉を削り取る。ほかに高台に垂れた釉や青白磁合子の口縁部に付いた釉を拭き取るものがある。

溶着防止 焼き台あるいは下に重ねる製品との間に溶着防止のための物質を挟むものがある。白磁碗Bでは貝粉泥とみられる液を高台縁に塗る。内面底部の釉の掻き取り部分にも二次的にその液が付着する。ほかでは、高台の内側に胎土やガラス質の物質を認めるものもある。白磁碗A・碗B・碗C・皿Bでは高台縁から体部との境にかけて、器表を平滑にするために再度のなで調整を行っている。いずれもここは釉を掛けない部分であり、釉に対する効果というよりも、溶着防止の効果をねらっているようである。高台縁を磨研しさらに効果を求めるものもある。高台縁に溶着防止の液を塗る白磁碗Bでも磨研を併用す

るものが多い。

重ね焼き 白磁碗 B・皿 B の内面底部に重ね焼きの跡をとどめる。緑釉・黄釉陶器盤では口縁部に器体を焼き台から離した痕があり、白磁皿 E 同様、伏せて焼いたものと考えられる。

焼成 通常は素地と釉を一度に焼くとみられる。緑釉白地鉄彩壺は白土・鉄釉と緑釉の溶解温度の差から二度焼きとみられ、ほかの陶器も二度焼きの可能性はある。青磁碗では底部が焼成不良なものがある、これは焼き台と関係する現象とみられる。

文様 刻（彫）文、彩文、型文がある。

彩文には黄釉鉄絵盤と緑釉白地鉄彩壺などがある。緑釉白地鉄彩壺は体部の一方に樹下懸垂の鳥を、一方に樹花を線彫りし、全面に白土を塗ったのち、文様の地となる部分を鉄彩する。鉄彩は、所々文様部分にはみ出ている。いわゆる掻き落しの技法ではない。また緑釉陶器壺は白土を塗ったのち、線彫りで下向きの蓮弁文を表しているようにみえる。

型文は青白磁がほとんどで碗・小壺・合子にみる。青白磁小碗の内面の浮き上がった線の輪花文も型によるものとみられる。

内面の刻（彫）文は青磁に多く、白磁皿 D にもある。片彫りの花文が主で、櫛目によるジグザグ文・渦に巻く花文（飛雲文）を併用することが多く、この例に青磁碗 A・皿 A・皿 B・白磁皿 A がある。櫛目を認めないものに青磁碗 B・白磁皿 A がある。

外面の文様は陽刻の蓮弁文がほとんどである。これに櫛目による縦線文を組合せる例が青磁碗 A にあり、碗 A では櫛目の縦線文のみのものもある。青磁碗 C は蓮弁文のみである。青白磁壺は主文様の地となる部分を櫛目で埋め、主文様は片彫りの花文である。

輪花文は青磁碗 B、青白磁小碗・合子にある。また、褐釉・白釉陶器の壺・水注にも 1～2 条の沈線の単純な文様がある。

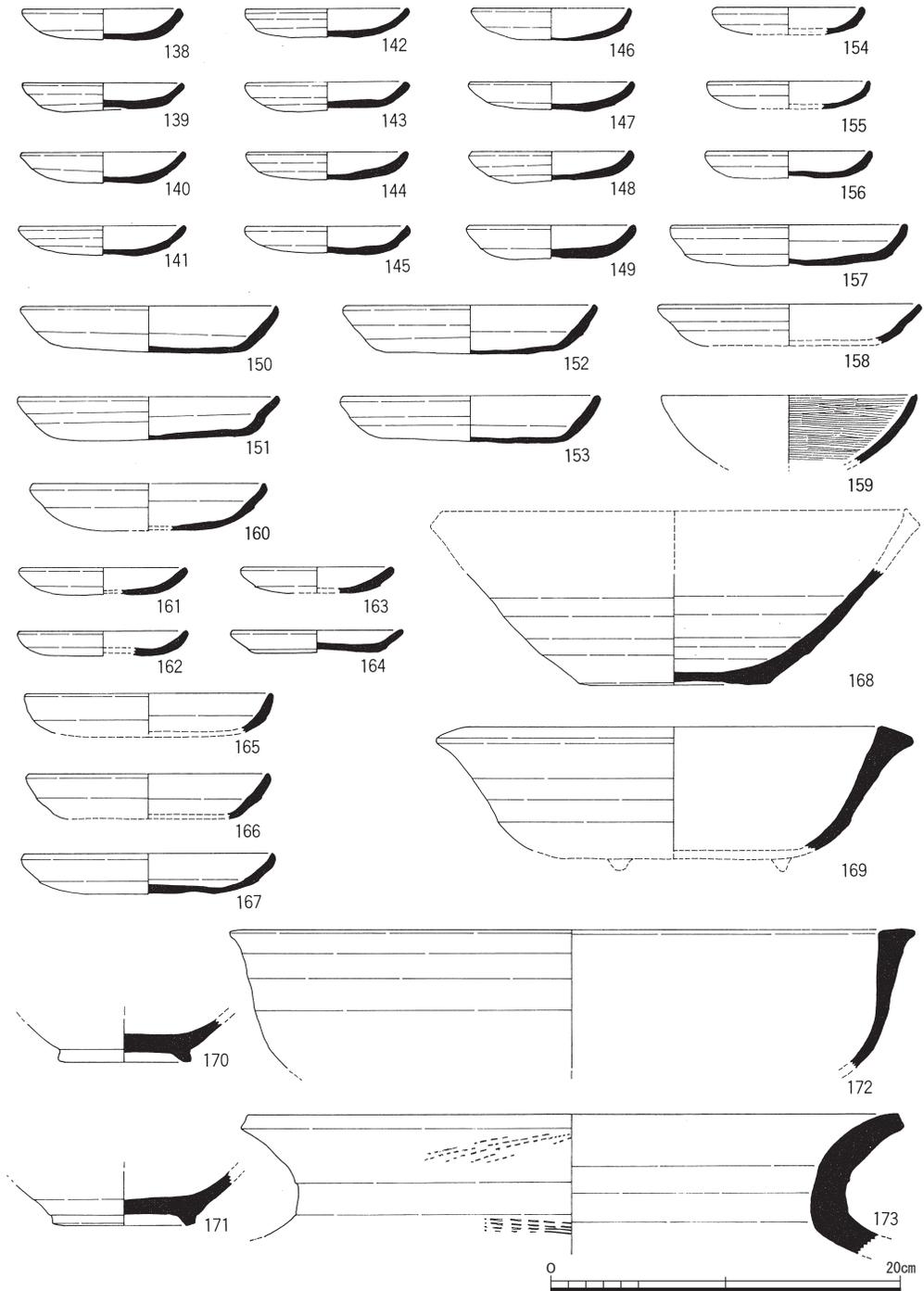


図44 井戸 J018(138～153)・井戸 R059(154～159)・土壙 T066(160～163)
 ・方形土壙 N011(164～167)・井戸 C068(168～173) 出土の土器 (1:4)

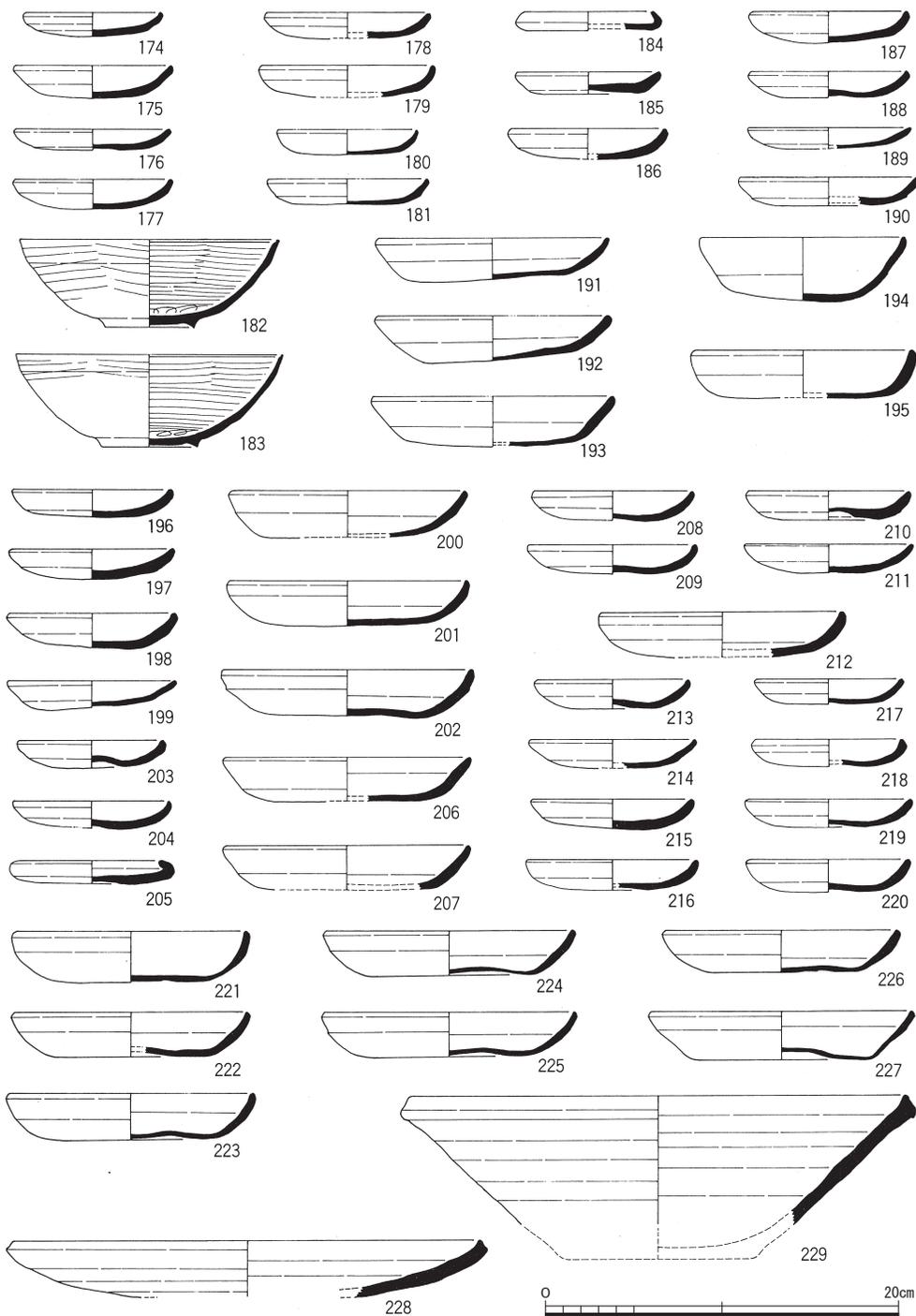


図 45 建物 (174 ~ 183) ・土壙 B103 (184 ~ 195) ・溝 F040 (196 ~ 202) ・土壙 X061 (203 ~ 207) ・井戸 B082 (208 ~ 212) ・池 C004 (213 ~ 229) 出土の土器 (1:4)

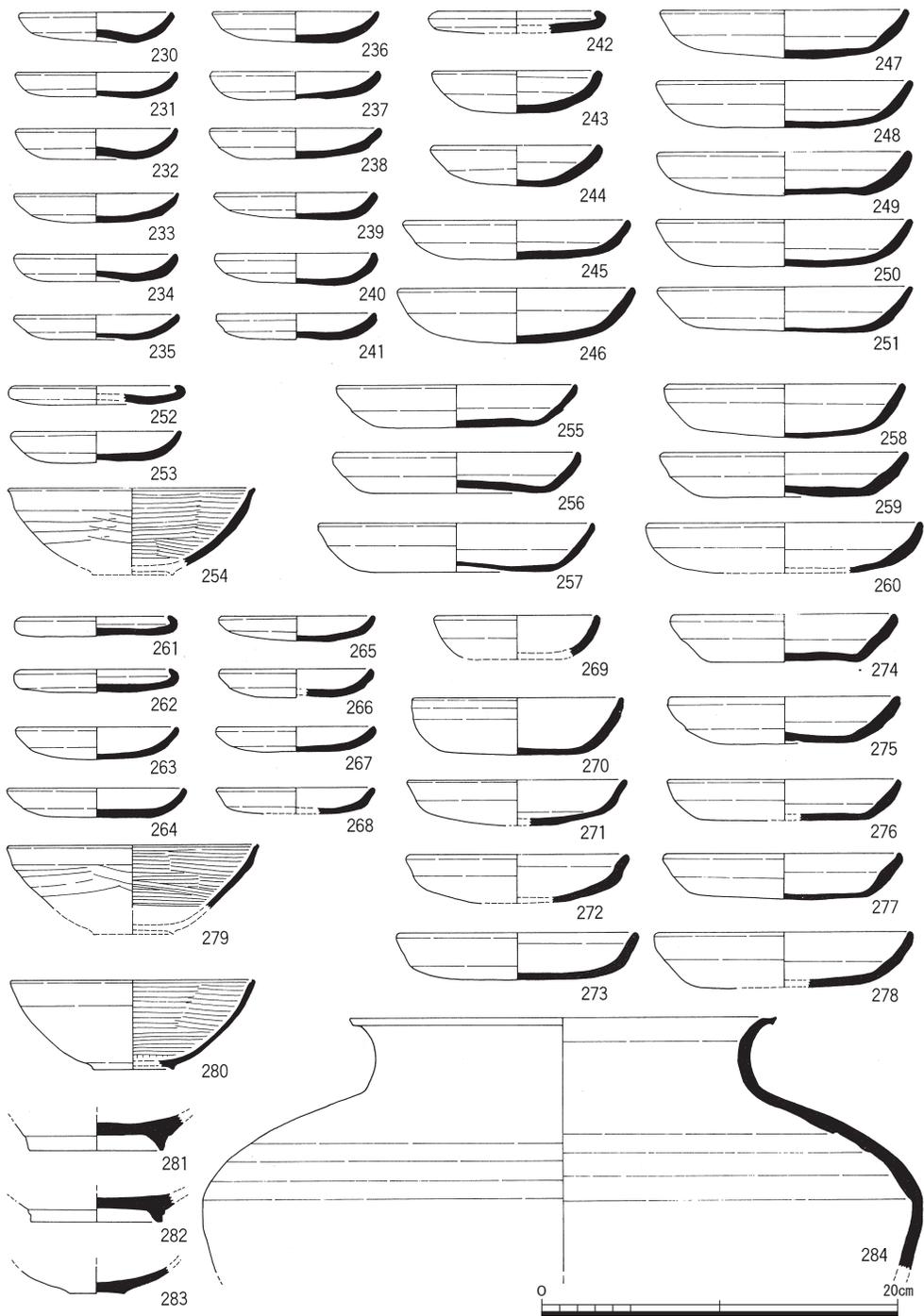


図 46 井戸 J040 (230 ~ 251) ・ 方形土壙 J042 (252 ~ 260) ・ 溝 V008 (261 ~ 284) 出土の土器 (1:4)

2 節 瓦

平安時代前期の瓦の半数は土取穴からの出土であるが、半数は平安時代前期の建物柱穴や井戸・土器溜からの出土である（表 7）。建物柱穴では、その根固めに用いたり、柱の抜き取り穴を埋めるのに用いている。平安時代末期の井戸 C068 では、平安時代中期・後期の瓦を井戸の埋め戻しに用いている。平安時代末期・鎌倉時代では、六町の南部と五町の南部に各々瓦溜があり（表 9）、遺構は発見していないものの、各町内に瓦葺きの建物の存在を想定できる。

イ 平安時代前期（図版 19・20・56、表 7）

平城京・難波宮・長岡京から移入した再使用の瓦と平安京の瓦がある。^{注10}

平城京の瓦（596・602） 軒平瓦 602 は平城宮 6691A 型式である。^{注11} 軒丸瓦 596 は平城宮 6316 型式である。^{注12}

難波宮の瓦（599） 型式名は特定できないが、難波宮の軒平瓦である。

長岡京の瓦（600・601） 軒平瓦 600 は長岡宮 7757A a 型式である。^{注13} 軒平瓦 601 もこの同文とみられる。

平安京の瓦（588～595・597・598・603～609） 西賀茂角社瓦窯のものが多く。^{注14} 複弁の蓮華文でその外側が二重の界線となる軒丸瓦の一群（590・597・598）がある。軒丸瓦 590 は角社瓦窯東群の瓦である。^{注15} 軒丸瓦 597 と 598 は蓮華の文様がぼけたような仕上がりを特徴とする。^{注16} 別に、肉づきの豊かな単弁蓮華文を特徴とする軒丸瓦の一群がある（588・589・591～594）。^{注17} 大が 7 点（589・593・594）、小が 5 点（588・591・592）ある。大と小では中房の蓮子の数が異なり、大は中央に 1 つとその周囲に八つ、小は中央に一つとその周囲に四つある。大の同文は冷然院跡にあり、そこでは「近」の銘を持つものがある。^{注18} 小の 591 は蓮華文のそとの珠文帯に「近」とみられる銘を消した跡が盛り上がり残る。以上のほか、軒丸瓦 595 は角社瓦窯西群の瓦である。^{注19} 軒平瓦 603 も角社瓦窯の瓦と考える。^{注20}

松ヶ崎芝本瓦窯の繊細な唐草文の軒平瓦が 2 点ある（608）。^{注21} 生産した瓦窯は不明であるが、これに似通った文様を持つ軒平瓦が 3 点ある（604～606）。瓦当範のきずが明瞭に残る。^{注22} このほか幡枝栗栖野瓦窯系の軒平瓦 609 がある。^{注23}

ロ 平安時代中期・後期（図版 22、図 47）

軒瓦は少ない。文字を刻んだ瓦の半数は平安時代末期の井戸 C068 から出土した（285・287・289）。今熊野池田瓦窯^{注24}と共通するものが見立つ。

唐草文軒平瓦（626～631）628 は向かって右に延びる偏向の唐草を文様に持つ。幡枝栗栖野瓦窯^{注25}のものである。626・627 は小片である。いずれも幡枝瓦窯系か。631 は播磨系の瓦である。大和（南都）系の瓦が同範^{注26}2点（629・630）ある。

「木工」^{注27}（285）正陽字の同印が2点ある。平瓦部凹面に押す。285 は近接して2行を押す。これと同印かは不明であるが、平瓦部凹面に上下に離れて2箇所を押す正陽字が1点ある。

「右坊」^{注28}（286・288・289）288 は正陰字の印である。平瓦部凹面に押す。289 は正陰字の印である^{注29}。286 はだるま形の印で、正陽字である^{注30}。平瓦部凹面に押す。

「右坊」^{注31}（287）平瓦部の成形台に正陽字を彫ったものである。従って、瓦では、凹面に裏陰字がぼんやりとみえる。池田瓦窯に同様のものがある。

「右坊常」^{注31}（290～292）裏陰字で同印が3点ある。平瓦部の凹面に押す。

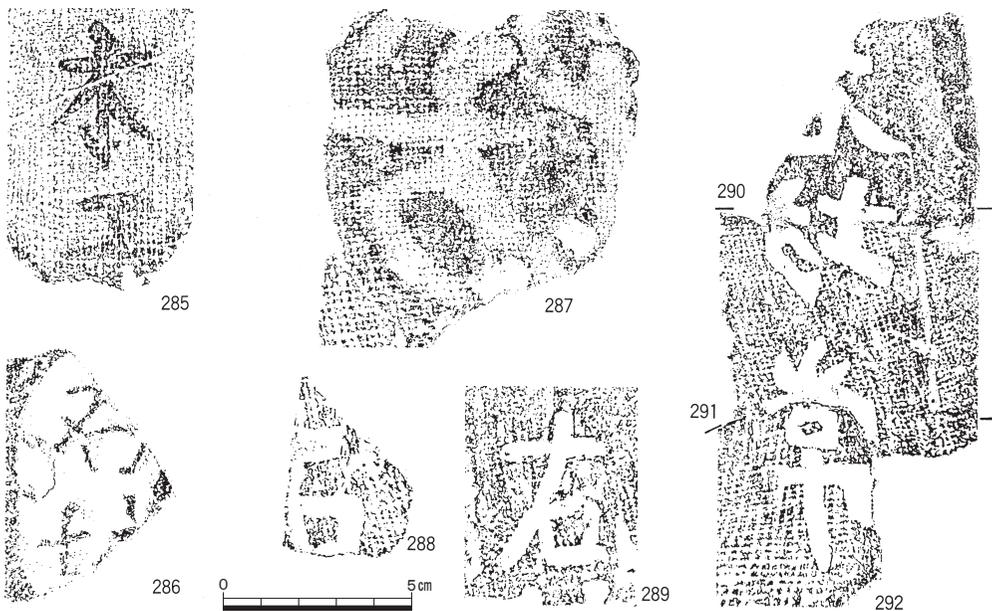


図 47 文字瓦の集成（1:2）

ハ 平安時代末期・鎌倉時代（図版 21～23・57・58、図 48・49、表 8・9）

軒丸瓦は蓮華文（2点）・巴蓮華文（1点）・巴文（34点）、軒平瓦は宝相華文（1点）・格子文（3点）・唐草文（12点）・剣頭文（31点）・雁巴文（1点）がある。軒瓦はすべて幡枝諸瓦窯^{注32}のものと考えられる。

製作手法（図版 57・58、図 48） 軒瓦の調整に二つの群^{注33}がある。その1は、瓦当面や瓦当側縁に叩きの調整痕を残すものである（1群）。瓦当面のタタキの調整は、軒平瓦・軒丸瓦ともに、文様の范型^{注34}を外した後に行う。軒平瓦では唐草文（295、図版 22 の 635・636）・格子文（図版 22 の 640）・剣頭文（図版 23 の 644）の文様を、軒丸瓦では蓮華文（293）・巴蓮華文（294）・巴文（図版 21 の 610・617）の文様を持つ。いずれも五町から多く出土した。点数は少ないが、濠 B016 の軒瓦はこの群のみである（表 8・9）。軒平瓦は瓦当が相対的に大きく、その文様、特に唐草文は平安時代後期からの系譜をたどれる。

その2は、瓦当面や瓦当側縁にタタキの調整痕を認めないものである（2群）。軒平瓦では若干の宝相華文（図版 22 の 634）・雁巴文（図版 22 の 641）・格子文（図版 22 の 639・643）・唐草文（632・633・637・638・642）のほかは剣頭文がほとんど（図版 23 の 645～657）で、軒丸瓦は巴文のみ（図版 21 の 611～616・618～625）である。六町の瓦溜 R002 の軒瓦は、詳細不明の1点を除き、この群である（表 9）。軒平瓦は瓦当が一群と比べ小さい。軒丸瓦は瓦当の大きさでは一群と大差ないが、瓦当の厚さが薄い。

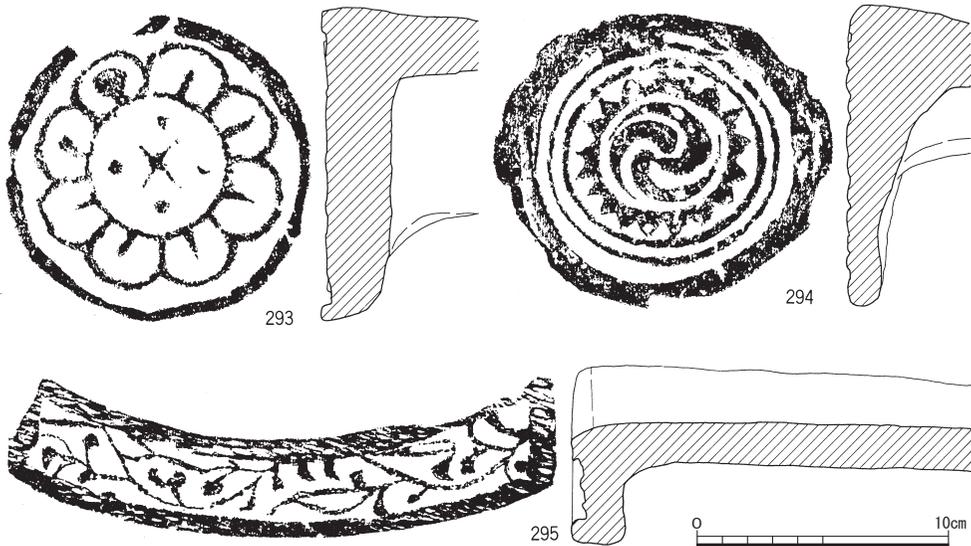


図 48 タタキを残す軒瓦（1:3）

蓮華文軒丸瓦（図48の293）瓦当の外周をタタク一群の瓦である。^{注35}

巴蓮華文軒丸瓦（図48の294）瓦当外周の上半をタタク一群の瓦である。

巴文軒丸瓦（図版21の610～625）珠文を持つものが20点、珠文を持たないものが13点、珠文の有無不明なものが1点ある。珠文を持つものは、巴の数で3巴と2巴があり、向かって右に巻き込むものと、左に巻き込むものがある。濠B016出土の6点はすべて同範で、右に巻き込む陰刻の2巴である（610）。珠文は大粒で密である。瓦当外周をタタク一群の瓦である。溝V008から出土の612は右に巻き込む3巴で、珠文は16前後である。瓦当外周を軽くケズる2群の瓦である。615は右に巻き込む3巴で、珠文は13である。2群の瓦である。珠文を持たないものは、3巴で右に巻き込むものが多い。617のみが一群の瓦で、ほかは2群の瓦である。

宝相華文（図版22の634）・雁巴文軒平瓦（図版22の641）小片がある。

格子文軒平瓦（図版22の639・640・643）639・643は2群の瓦、640は下顎を再度タタク一群の瓦である。

唐草文軒平瓦（図版22の632・633・635～638・642、図48の295）偏向の唐草文を文様とし、瓦当にタタキ調整を残す一群の瓦が6点ある。向かって左に延びるもの（295・636）と、その逆文（635）がある。^{注36}一群の唐草文のさらに崩れた文様を持つ2群の瓦の小片もある（632・633）。別種の唐草の文様を持つ2群の瓦が3点ある（637・638・642）。^{注37}

剣頭文軒平瓦（図版23の644～657、図49の296～301）剣頭の数で、6剣頭が3種

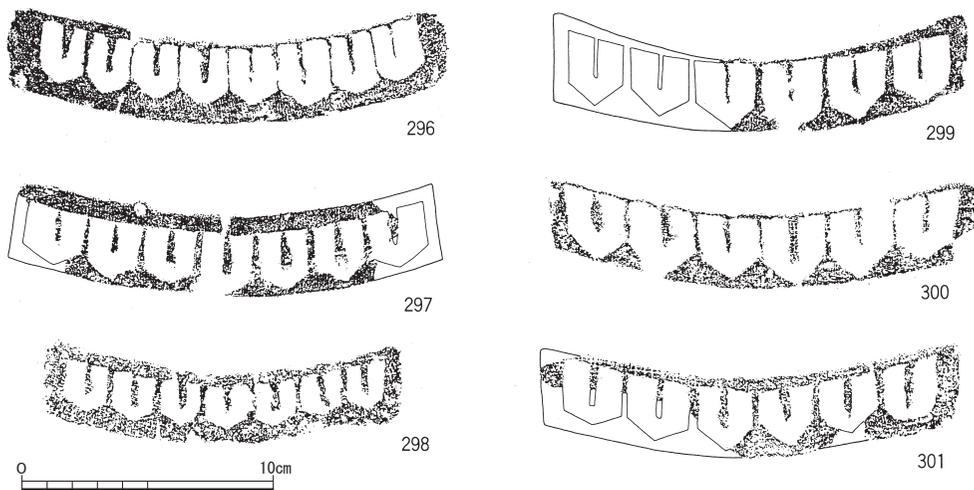


図49 同範瓦から復元した剣頭文の各種（1:3）

の范型(11点)、7剣頭が2種の范型(4点)、8剣頭が2種の范型(9点)、帰属不明小片7点がある。このうち、8剣頭のものに、瓦当をタタく一群の瓦が1点ある(644)ほかは2群の瓦である。8剣頭の2群の瓦8点(296・645・646・648～650)は同范である。296は顎裏まで体部のタタキが残る。剣頭の数は不明ながら、648は644に近い特徴を持つ。7剣頭のは、瓦当面に布目を残し、顎裏にも折り曲げ時のシワを残すものが多い(297・298・647)。6剣頭のは、顎裏のなで調整が良好である(299～301・651～657)。

記号を刻む瓦(図50・51) 濠B016に多量に投棄されていた丸瓦・平瓦は、ほとんど同一の胎土・作り・焼き上がりで、同じ窯(製作者)の製品である。これらの瓦の大半は、丸瓦では玉縁部の端面に、平瓦では広端面に、各々ほとんど同一位置に2条の線を刻んでいる(図50・51の302～308)。生瓦の乾燥過程で、1枚ずつ刻んだもの^{注38}のようである。

同じ濠B016出土の軒平瓦の瓦当近くの凸面に「7」を刻むものが2点ある(295・309)^{注39}。瓦当を残すものは瓦当にタタキ調整を残す一群の唐草文である。上述の端面に2条の線を刻む丸瓦・平瓦と対をなすのであろう。

瓦溜R002などからは、別群の記号を持つ瓦が出土している。記号を刻む位置は、丸瓦では筒部の玉縁近くの凸面が多い。ここに「V」を刻むものが004点(310～312・318)、「×」を刻むものが3点(313・314・320)ある。平瓦でも、「V」を平瓦部の凸面に刻むもの(316)や、「V」に近い「人」を平瓦部の凹面に刻むもの(315)、剣頭文軒平瓦の瓦当近くの平瓦部凸面に「×」を刻むもの(297)がある。

太くて短い「V」を、丸瓦の側端面に刻むもの(319)や平瓦の凹面に刻むもの(317)は、別群の記号であろう。

さらに、平瓦の端面に刻印するものがある。322は、陰字でみて「二」を刻印する。印の大きさは5×7mm角である。321は、菊花を刻印する。菊花は8弁で、印径11mmである。

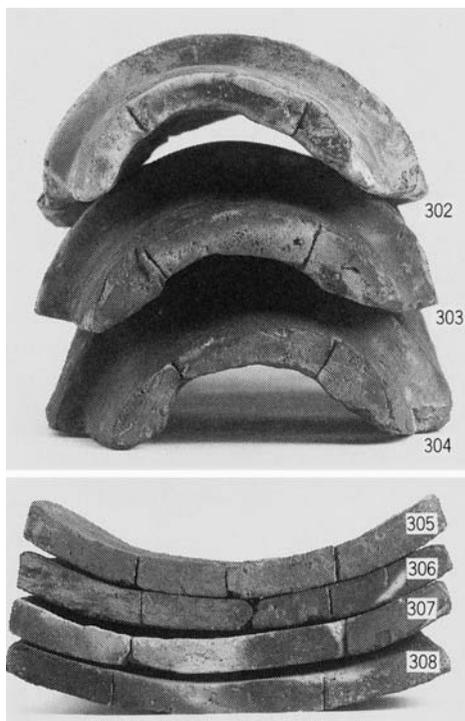


図50 記号を刻む瓦(1)

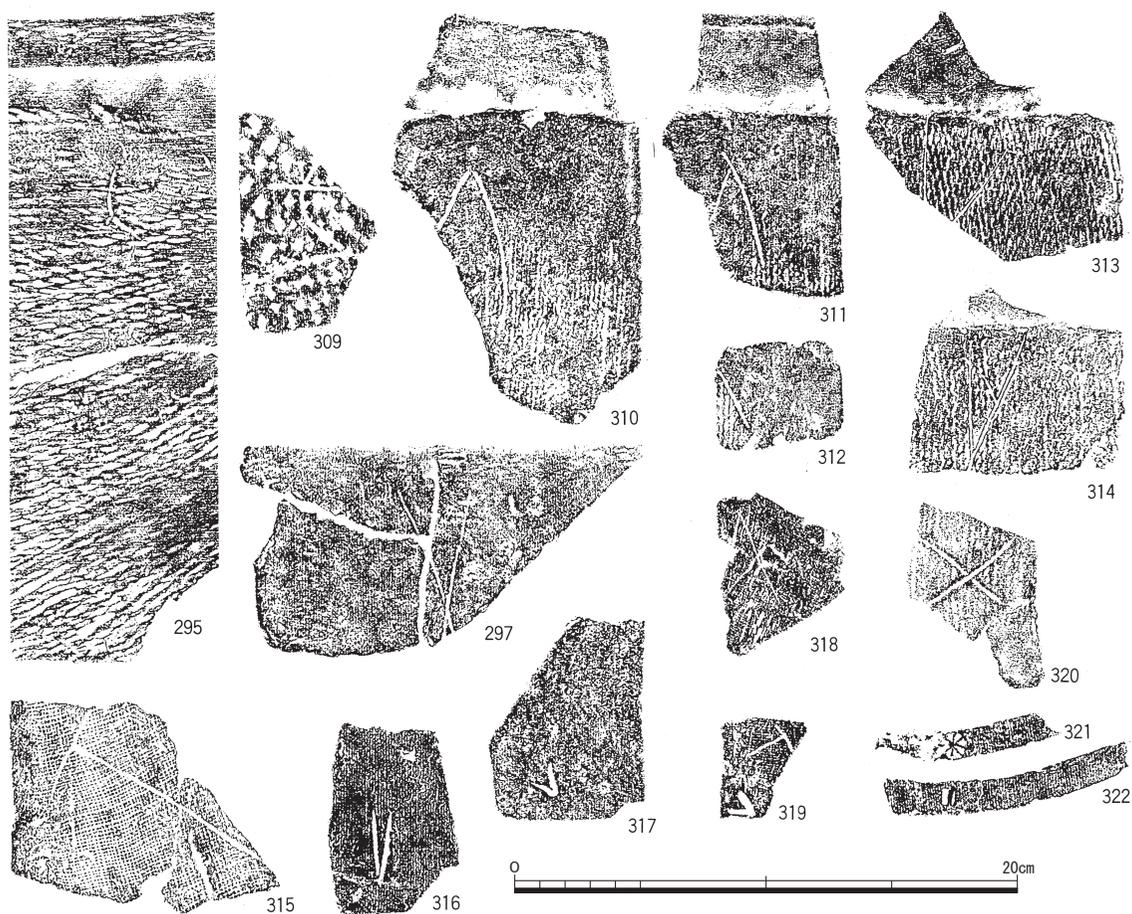
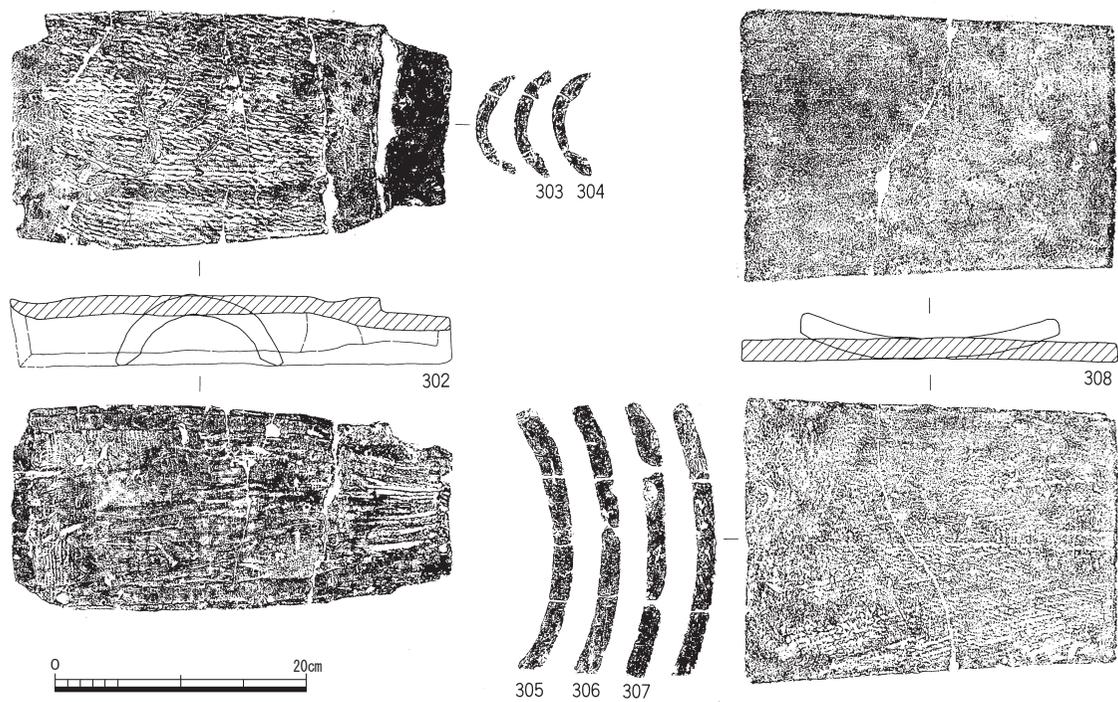


図 51 記号を刻む瓦 (2) (1:6) (1:3)

588	建物 16(F41S009)、溝 V019、井戸 U057 付近、F31W065、F41N001	
589	土器溜 0019、井戸 U057 付近、F410002、F41V012、F31V013、F41A 区	
590	土器溜 0019	602 溝 V019
595	F31V064	603 北湿地 (E45E)
596	建物 22(F51E007)	606 3区表採、北湿地、F41N011
597	溝 A009、F31V008	608 井戸 E005 2点
599	建物 16(F41S018)	609 F41H043
600	井戸 S013、井戸 U057 付近	

(性格を明示していない遺構は後代の遺構)

表7 平安時代前期の軒瓦の出土遺構一覧

295	濠 B016、井戸 C068	300 瓦溜 R002 4点、F41C017
296	瓦溜 R002 7点、F31S023	建物 51(F31S038)
297	溝 V008、F31X069	612 溝 V008 3点
298	瓦溜 R002 2点	615 溝 V008 2点
299	瓦溜 R002 3点	635 井戸 C068 2点、溝 V008
301	瓦溜 R002 2点、溝 V008	

(性格を明示していないものは新しい遺構)

表8 平安時代末期・鎌倉時代の同范瓦の出土遺構一覧

		蓮華文	巴蓮華文	巴文	宝相華文	唐草文	格子文	剣頭文	雁巴文
五 町	濠 B016	1		6		1			
	井戸 C068					3	2	1	
	その他			3		1	1	2	
計		1		9		5	3	3	
六 町	瓦溜 R002			5		1		19	
	溝 V008			11		2		3	
	その他	1	1	5	1	1		6	1
計		1	1	21	1	4		28	1

表9 主要遺構出土の平安時代末期・鎌倉時代の軒瓦

3 節 その他の製品

イ 木製品（図版 24・25・59・60、表 10）

用途により、農具・工具・服飾具・容器・食器具・遊戯具・祭祀具・建築部材・雑具・用途不明品に分類する。大半は平安時代末期・鎌倉時代のものである（表 10）。

農具（図版 25 の 694～696・710・712） 鋤・田下駄がある。鋤（712）は全長 117cm の長柄鋤の完存品である。U 字形の鉄製刃を装着したまま残る。刃は身に藁を巻き隙間を充填して装着する。柄尻は二又に分かれず単なる棒状である。鋤の柄がもう 1 点ある（710）。田下駄（694～696）は、足板の前後に孔を開け枠に取り付ける。鼻緒の孔のうち、前壺が中央に開くもの（695）と、右に偏るもの（694）がある。残りが悪く全形は不明であるが、大足と考えるもの（696）もある。

工具（図版 24 の 666） 刀子の柄がある。螺鈿細工を施すが、螺鈿はすべて剥落し、それを嵌めた跡のみが残る。

服飾具（図版 24 の 658～661・図版 25 の 697～700） 櫛・下駄がある。櫛（658～661）は、肩に丸みを持つ長方形の横櫛である。鋸で両側から歯を刻む。661 は、歯もとを決める切り通し線が背に平行して曲線を描く。下駄（697・699・700、その歯 698）は、台と歯を 1 木から作る連歯下駄で、前壺は中央より右に偏る。歯がまったく擦り切れるまで履きつづすもの（700）や、破損した歯を釘で留めなおして使用するものがある。

容器（図版 24 の 669～674・687～689・図版 25 の 708） 曲物（673・674・687～689）・漆器（669～672）・柄杓（708）がある。曲物は、円筒に曲げた側板を樺皮で閉じ、底板を木釘で側板と固定し、さらに、側板の底板と重なる部分をたがで補強する。内外面に黒漆を塗った跡が残るものもある。漆器は椀（672）・蓋（669）・鉢（670）・壺（671）の形態がある。柄杓は柄のみが残る。

食器具（図版 24 の 678～686） すべて箸である。木片を小割りして棒状に整形する。長さは 22～24cm のものが多く、次いで 17cm 前後のものが多い。25cm を越えるものもある。

遊戯具（図版 24 の 662～665） 毬杖（ぎっちょう）に用いる木球がある。粗く球形に仕上げる。大小がある。

祭祀具（668・676・677） 齋串（いみぐし）、形代（かたしろ）がある。齋串（677）は、頭が尖り、側に左右対称に 3 個を 1 単位とする小さな切り込みを密に入れる。形代は刀子を形どったもの（668）と人形（676）がある。

建築部材（図版 25 の 705）ほとんど同形同大のものが 3 点ある。

用途不明品（図版 24 の 667・675・690～693・図版 25 の 701～704・706・707・709・
711）^{注41} 絵馬の形をしたもの（667）がある。

品名	井戸									濠	湿地			計
	S013	E005	A036	B082	C068	J018	J040	0008	R059	B016	整地	上	下	
鍬												1		1
鋤									1			1		2
田下駄											2	1		3
篋													1	1
楔形							1							1
刀子							1							1
櫛	2					1								3
下駄				2			1				4			7
木槽													1	1
曲物		2	1		1	1	1		1	1	4			12
柄杓				1										1
漆器					3			1			2			6
箆			1	10		79	16			3	3	6		118
木球							3				1			4
齋串										1				1
形代											2			2
井戸部材	58		57	27	179			45	45					411
建築部材										3	9	1	2	15
不明部材					1						6	12	2	21
杭			2							5	10	6	2	25
用途不明品			3			1					15	4	8	31
棒状加工木		1	1	3						5	25	8	3	46
加工木		1		2							7	8	7	25
加工板			1		1		1				12	3	2	20
計	60	4	66	45	185	82	24	46	47	18	102	51	28	758

表 10 木製品の出土遺構一覧

ロ 石製品 (図 52)

石帯 (323 ~ 326) 一辺 35mm ほどの正方形のもの (巡方、323・324・326) と長径 40mm ほどの楕円形の 1 側面を直線にしたもの (丸軀、325) があり、帯に留めるための孔が主として裏にある。324 は平安時代末期・鎌倉時代の井戸 R059 から、ほか 3 点はそれより新しい遺構から出土したが、奈良時代・平安時代に流行した革帯に付ける装飾品である。各人の位階によって、その仕様が厳密に規定されていた。金属製のものも知られているが、出土していない。

硯 (327・328) 3 点ある。全体の形がわかるものはない。327 (頁岩製) は、宝珠形の海を持つ。土取穴からの出土である。平安時代前期には遡らないであろう。328 は粘板岩製である。

釜 (329) 滑石を彫り込んで作る。土器に似て、顎を付ける。鎌倉時代・室町時代に生産された。溝 V008 から出土した。

砥石 6 点ある。土取穴など新しい遺構からの出土である。

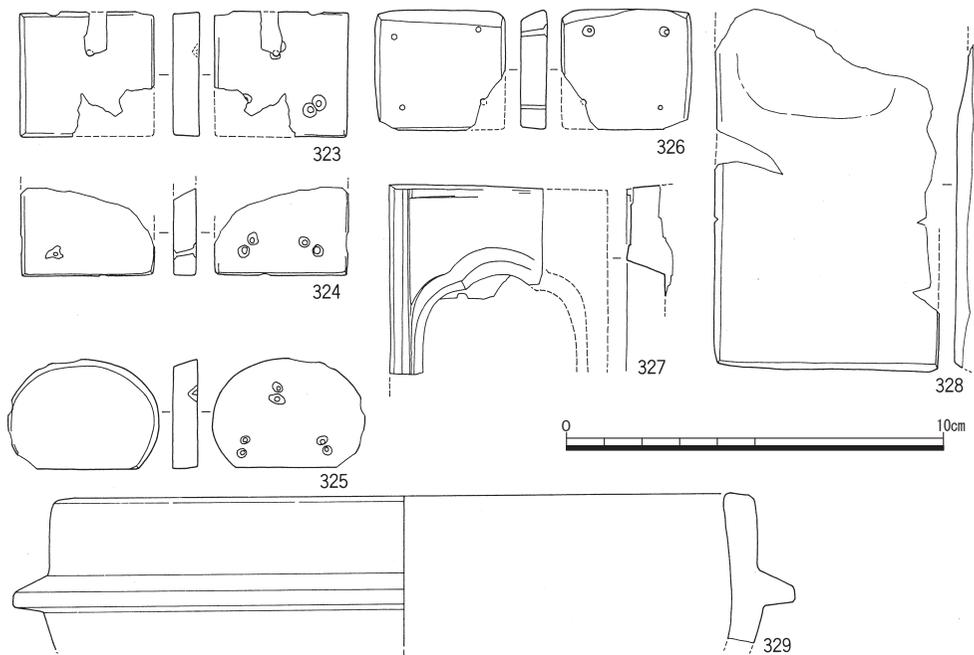


図 52 石製品 (1:2)

ハ 土製品 (図 53)

鼓胴 (341) 須恵器で、土は精選され、焼きも良好である。口径 12.4cm。幅 5mm ほどの溝が口縁から 1.5cm と 2.5cm 離れた位置にある。また、油がにじんだような光沢のある節目が口と溝の間にたすき掛けに残る。製品の仕上がり状態からみて、平安時代前期のものと判断する。縦杵のように握りの部分が細く、両側がやや太い細腰鼓の形態を想像する。^{注42}

土馬 (332～337) 6点あるが、いずれも破損品である。雨乞いなどの土俗信仰で用いる。奈良時代・平安時代に盛行した。

硯 (338・339) 焼物の硯である。円面硯 (灰釉陶器 2点、須恵器 338 ほか 1点)・風字硯 (灰釉陶器 2点、黒色土器 3点)・宝珠形硯 (灰釉陶器 339)・杯蓋硯 (須恵器 3点) がある。杯蓋硯は通常の食器の形態のものを用いるので、使用の跡がないとわからない。平安時代前期の土器溜 0019 に黒色土器風字硯が 1点、井戸 U057 に灰釉陶器の硯脚片 1点、建物 04 に須恵器杯蓋硯 1点があるほかは、新しい遺構からの出土であるが、いずれも平安時代前期の製品とみて誤りない。

紡錘車 (340) 平瓦片を加工している。孔に棒を通して使う。孔に擦れたような痕跡はないが、表面は摩滅している。平安時代前期の井戸 S013 から出土した。

土錘 (330・331) 細い管状のもの (330) と、やや太めの管状のもの (331) がある。後者は平安時代前期の溝 V019 から出土した。前者は平安時代末期以降のものである。

ニ 銭貨 (図 54)

古代銭 (342～346) 平安時代前期の土器溜 U058 から隆平永寶 (初鑄 796 年) が 1点 (344)、溝 V019 から神功開寶 (初鑄 765 年) が 1点 (343)、井戸 E005 から隆平永寶が 1点 (345)、富寿神寶 (初鑄 818 年) が 1点 (346) 出土している。遺構の時期と矛盾するものはない。このほか、湿地から神功開寶 2点 (342) が出土している。承和昌寶 (初鑄 835 年) 以後のものは出土していない。

中国銭 (347～350) 祥符通寶 (北宋・大中祥符年間)、元祐通寶 (北宋・元祐年間、348)、洪武通寶 (明・洪武元年、349)、光緒通寶 (清・光緒年間、350)、祥符元寶 (鑄造年代不詳、347) がある。元祐通寶は、平安時代末期・鎌倉時代の井戸 R059 の枠内の最下底から出土した。ほかの 4 点は、土取穴など新しい遺構からの出土である。

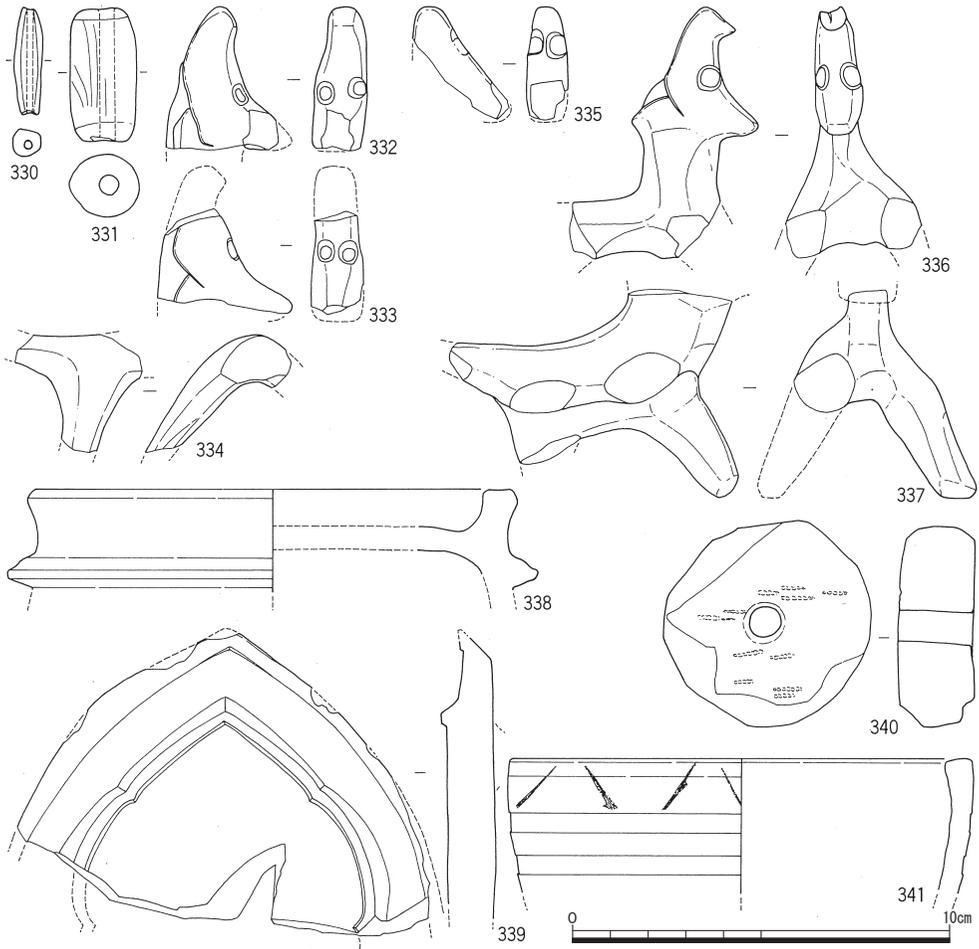


图 53 土製品 (1:2)

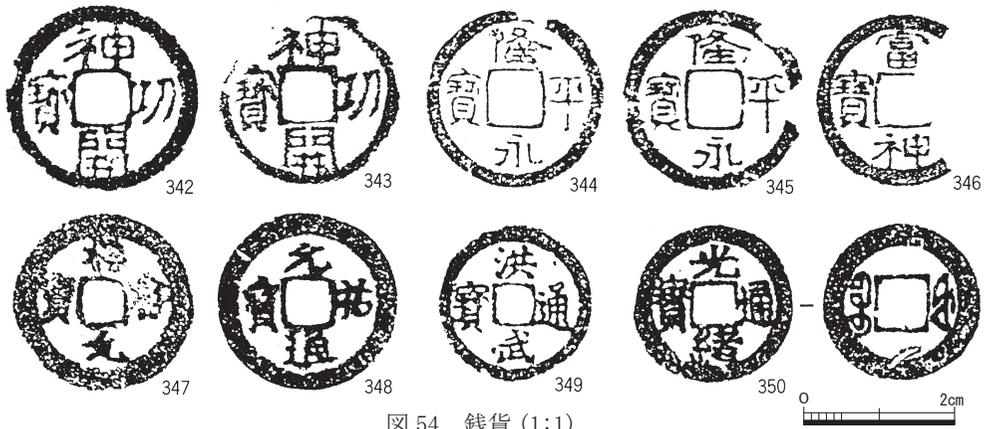


图 54 錢貨 (1:1)

4 節 植物遺体

分析を行ったのは、平安京造営前の北湿地・古流路、平安時代前期の井戸 1 例、平安時代末期・鎌倉時代の井戸 6 例・濠・池の資料である。北湿地については、層位と 4m 方眼ごとに採取した。採取土量は各 5,000cm³ である。

平安京造営前（表 11） 北湿地は大きく覆土・上層・下層の 3 層に分層して採取した。覆土は湿地を覆う平安時代の土層で一部に鎌倉時代の土層が混じる。上層は古墳時代、下層は弥生時代後期・古墳時代初期の土層である。各土層の分析結果は表の通りである。

下層からは木本が 15 地点で 11 種類、草本は 16 地点で 34 種類が出土した。木本の特徴はすべてが落葉広葉樹で、常緑広葉樹がみられないことである。樹木の構成は二次林であり、周辺が人間によってすでに開発されていたことを示す。草本では湿地に生育する種類（ミズソバ・ミクリ・オモダカ・ホタルイ属・イボクサ・コナギ）が多いほかに、栽培植物（ナス・ウリ・イネ・キビ）もある。ウリの種子やキビの穎果は平安時代のもの比べて小形である。

上層では木本が 16 地点で 8 種類、草本が 45 地点で 38 種類が出土した。木本の構成は下層と同じく落葉広葉樹からなり、下層よりも出土種類数は減っているが、内容は類似している。草本は下層と同様に湿地に生育する種類が多く、地点によって栽培植物（ナス・ウリ・^{注43}キビ）がみられる。

古流路 E020 は 004 地点で採取し、草本 15 種の種実が出土した（表 11）。各地点から、湿地に生育する種類（タデ属・キンポウゲ属・ホタルイ属）が出土し、分析地点が溝として機能していたことを示す。ただし、古流路が東で消滅しかかる地点の分析では、わずか 1 種類（ホタルイ属）の検出に止まった。

平安時代前期（表 11・12） 井戸 S013 からは、木本 2 種（モモ・センダン）、草本 2 種（ナス・ウリ）が出土したのみであった（表 12）。

北湿地の覆土として採取した土壌は、部分的に平安時代末期・鎌倉時代の土壌が混じるが、それを考慮しても分析結果に大差が生じないので、覆土全体を平安時代前期とみなして報告する。分析 68 地点の内、木本種実が 13 地点 9 種類、草本種実が 46 地点 32 種類出土した（表 11）。木本の構成はマツを除き、落葉広葉樹が主体である。サクラ・カジノキをはじめとする落葉広葉樹の構成は平安京のこれまでの分析調査例に類似しており、時代は下るが鳥羽離宮跡の庭園出土の木本構成とも類似する（文献 30）。マツ・サクラ・カジ

	和名	下層	上層	覆土	E020		和名	下層	上層	覆土	E020
木 本	マツ	—	—	○	—	草 本	クサネム	○	○	—	○
	オニグルミ	○	○	—	—		カタバミ	○	○	◎	○
	クリ	—	—	○	—		ノブドウ	○	○	○	○
	エノキ	○	—	—	—		エノキグサ	○	○	○	○
	クワ属	○	○	—	—		セリ	○	◎	○	○
	カジノキ	○	○	○	—		チドメグサ属	○	○	○	○
	モモ	—	—	○	—		ヤブジラミ	○	—	—	—
	サクラ皿属	—	—	○	—		セリ科	○	○	○	—
	キイチゴ属	○	○	○	—		シソ	○	○	○	○
	サンショウ	○	—	—	—		ナス	○	○	○	—
	イヌザンショウ	—	○	○	○		ナス属	○	○	—	—
	センダン	—	—	○	—		スズメウリ	○	○	○	—
	ブドウ属	○	○	○	○		ウリ	○	○	○	—
	タラノキ	○	○	○	—		ゴキヅル	○	○	○	—
ガマズミ属	○	—	—	—	メナモミ	—	○	○	—		
エゴノキ	○	○	—	—	タカサブロウ	◎	○	◎	—		
草 本	カナムグラ	—	○	—	—	キク科	—	○	○	○	
	イラクサ	○	○	—	○	ミクリ	◎	◎	◎	—	
	ミゾソバ	◎	○	○	—	ヒルムシロ属	—	○	○	—	
	タデ属	○	○	◎	○	オモダカ	◎	◎	◎	—	
	ギシギシ属	○	○	—	—	ヘラオモダカ	○	○	○	—	
	アカザ属	○	○	◎	—	イネ	○	—	—	—	
	ヒユ属	○	○	◎	—	キビ	○	○	—	—	
	スベリヒユ	—	—	○	—	イネ科	—	○	◎	—	
	ハコベ属	—	—	○	—	カヤツリグサ属	◎	○	○	○	
	ヤエムグラ属	—	—	○	—	ホタルイ属	◎	◎	◎	○	
	マツモ	○	—	—	—	ツユクサ	—	—	—	○	
	タガラシ	○	○	◎	—	イボクサ	◎	◎	◎	○	
	キンボウゲ属	○	○	◎	○	ミズアオイ	○	○	—	—	
	アブラナ科	—	○	—	—	コナギ	○	◎	◎	—	

(種実の検出量は、—= 0、○≤ 10、◎> 10粒を示す。表11・12とも同じ)

表11 湿地・古流路出土の植物遺体分析結果

ノキの出土地点は北湿地の西寄り部分に分布し、北湿地の東寄り部分では少ない傾向がみられる。草本では、全体に湿地に生育する種類の出土が目立つ。これらは出土地点数でも多く、タガラシ 13 地点、キンポウゲ 13 地点、カヤツリグサ 17 地点、ホタルイ属 42 地点、イボクサ 37 地点などを数える。抽水性のヒルムシロが 4 地点で出土しており、部分的に水が滞水した場所もあったようである。分析の結果、栽培植物はわずかにナス (3 地点)、ウリ (1 地点) を確認するだけでこの湿地を耕地として積極的に利用した形跡は認められない。

平安時代末期・鎌倉時代 (表 12・13) 井戸 B082 からは木本 2 種 (ウム・モモ)、草本 22 種 1,672 粒の種実が出土した。草本は大部分が雑草の種実で、ゴマ・ナス・ウリの栽培植物を若干含む。

井戸 C068 は堆積土を 4 層に分け、1 層を除く下 3 層分を採取した。4 層から草本のみ 17 種 259 粒、3 層から木本 1 種 (クワ)、草本 12 種 129 粒、2 層から草本のみ 9 種 325 粒が出土した。草本の大部分が狭義の雑草で、栽培植物のマメ・ナス・イネ・コムギがわずかにある。この内、イネとコムギは炭化しており、人為的な取り扱いを受けている。分層結果と草本の内容の関連では、4 層でやや植物の種類が多く、3 層、2 層と上に行くにしたがい種類がやや減る傾向がある。特に、下層にみる湿地の要素 (タガラシ・クサムネ・ホタルイ属) が 2 層では減っている。出土種実の結実時期の分布によっては土壤の堆積季節を割り出すことが可能な場合もあるが、ここでは不明である。

井戸 R059 からは、木本 3 種 (ヤマモモ・センダン・アカメガシワ)、草本 13 種 130 粒が出土した。ヤマモモは常緑広葉樹で、果実は甘く食用になる。センダン・アカメガシワは落葉広葉樹である。草本は雑草が中心で、栽培植物としてゴマ・ナスがある。雑草の構成は井戸 B082・井戸 C068 に近似する。

井戸 J040 は 7 層に細分して採取した。木本は 1 層から 1 種 (モモ) が出土したのみである。草本は各層ともに出土量が少ない。1 層 3 種 9 粒、2 層 10 種 20 粒、3 層 4 種 9 粒、5 層 9 種 163 粒、6 層 7 種 88 粒、7 層 7 種 17 粒を検出する。種実の総量が少ないので、層位による比較は不可能である。

井戸 A036 は 3 層に分けて採取した。木本は 3 層からモモ 2 粒が出土したのみで、あとは草本である。草本は 1 層 10 種 100 粒、2 層 16 種 488 粒、3 層 19 種 201 粒である。種実の量はまとまっているが、層位による種類の違いはない。

濠 B016 の 2 層から木本 2 種 (センダン・アカメガシワ)、草本 16 種が出土した。木本

は落葉広葉樹で、草本は雑草の種実が多い。雑草の内容は井戸のものと大差ない。ただし、ヒシの出土により、2層は滞水状態であったことがわかる。

池 C004 は、2 地点で採取し、草本のみ 6 種類が出土した。いずれも雑草で、湿地や水辺に生育する 1 年草を含む。

	和名	部位	井戸							濠・溝	
			S013	A036	B082	C068	J018	J040	R059	B016	V008
木 本	ヤマモモ	核	—	—	—	—	—	—	1	—	—
	クワ属	種子	—	—	—	1	—	—	—	—	—
	ウメ	核	—	—	0.5	—	—	—	—	—	—
	モモ	核	4	1.5	5.5	—	—	1	—	—	—
	センダン	核	1	—	—	—	—	—	2.5	1	—
	アカメガシワ	種子	—	—	—	—	—	—	破片	1	—
栽 培 草 本	アサ	種子	—	—	—	○	—	—	—	—	—
	ソバ	果実	—	—	—	—	○	—	—	—	—
	アブラナ科	種子	—	◎	○	○	—	—	◎	—	—
	マメ	種子	—	—	—	○	—	—	—	—	—
	シソ	果実	—	○	◎	○	◎	○	○	◎	○
	ゴマ	種子	—	—	○	—	○	—	○	—	—
	ナス	種子	◎	—	○	○	○	○	○	○	○
	ウリ	種子	○	○	○	—	○	○	—	○	○
	ヒョウタン	果実	—	—	—	—	○	—	—	—	—
	イネ	穎果	—	—	—	○	—	—	—	—	—
	コムギ	果実	—	—	—	○	—	—	—	—	—
	ヒエ?	穎果	—	—	—	○	—	—	—	—	—

表 12 平安時代・鎌倉時代の木本・栽培草本種実分析結果

	和名	生育地	井戸						濠・溝・池		
			A036	B082	C068	J018	J040	R059	B016	V008	C004
耕地 の 雑 草	アカザ属	畑地・荒地	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	○
	ヒユ属	いたる所	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	○
	スベリヒユ	道端・畑縁	○	◎	○	—	—	—	—	—	—
	ハコベ属	いたる所	◎	◎	○	○	○	○	—	○	—
	カタバミ	庭・道端	◎	◎	◎	◎	○	◎	◎	○	—
	エノキグサ チドメグサ属	畑・道端 日陰の庭	○	○	○	○	—	○	○	○	—
路 傍 の 雑 草	サナエタデ	道端	—	—	—	—	○	—	—	—	—
	ギシギシ属	道端	○	—	○	—	—	—	—	—	—
	ヘビイチゴ属?	道端	○	—	—	—	○	—	—	—	—
	ノブドウ	山野	—	—	—	—	—	—	○	—	—
	オオバコ	道端	◎	○	—	—	○	○	—	○	—
	メナモミ	山野	○	○	—	—	—	—	—	—	—
水 辺 の 雑 草	タデ属	道端・水辺	○	◎	○	◎	○	◎	○	○	—
	タガラシ	田・溝	◎	◎	◎	—	○	○	○	◎	○
	キンポウゲ属	溝・湿地	○	◎	—	—	○	—	◎	○	—
	クサムネ	田・湿地	—	—	○	—	—	—	—	—	○
	スズメウリ	水辺	—	—	—	—	—	—	○	—	—
	タカサブロウ	湿地・田	○	◎	◎	◎	○	◎	◎	○	○
	オモダカ	池端・田	—	○	—	○	—	—	—	—	—
	ヘラオモダカ	池端・田	—	—	—	—	○	—	—	—	—
	ヒルムシロ	池	—	—	—	—	○	—	—	—	—
	イネ科	湿地?	○	—	○	◎	—	—	—	○	—
	カヤツリグサ属	田・道端	◎	○	◎	○	◎	—	—	—	—
	ホタルイ属	溝・湿地	○	○	—	◎	○	—	—	—	○
	イボクサ	湿地・池	○	○	—	—	○	—	—	○	—
	ミズアオイ	田・沼地	—	—	—	—	○	—	—	—	—
コナギ	田	—	—	—	—	○	—	—	—	—	

表 13 平安時代・鎌倉時代の雑草分析結果

5 節 壁土

鎌倉時代の濠 B016 から壁土が多量に出土した。壁土は上塗りの白壁だけが遺存している。表面に絵画や彩色の痕跡は認めない。

出土した白壁の大部分は 5cm 角以下で、厚さが 1cm ほどの破片である。出土総重量は 2,080 g、体積はおよそ 3,500cm³ である。^{註44} すべての破片について観察した結果、原因は不明であるが、白壁の下に塗られた土壁はまったく残っていない。観察により、表面の仕上げの様子、混和・強化材の量の多少により、以下の 3 種類に分類する。

a 類 (図 67 の 1) 白壁表面の仕上がりは大変滑らかで、粒子が細かく均質で、非常に細かい繊維が無数に入る。繊維に方向性はみられない。

b 類 (図 67 の 2) 白壁表面は凹凸が顕著で全体にザラザラしており、幅 0.1mm、長さ 2～6mm の隆線が同一方向に多数走る。褐色の鉄錆が付着したものが多く、部分的に壁土深く浸透する。

c 類 (図 67 の 3) 表面は大変滑らかなものとそうでないものがある。1mm 以下の炭化物が多量に入り (図版 62 の 3)、a 類、b 類に比べると粗く、結合力が弱くもろい。

実体顕微鏡で白壁材を観察した結果、3 者に共通な点として細粒 (1～2mm) の岩石が含まれるほか、内部に繊維が観察できる。分類した白壁の小破片を希塩酸に付けると発泡して大部分が溶解した (表 14)。このことから出土した白壁は漆喰で、主成分が炭酸カルシウムであり、壁土内の岩石は石灰岩であることが推定できる。また、溶解して残った不溶性成分の内容には 3 者に明瞭な差がみられ、a 類では不溶性成分はごくわずかに砂粒が、b 類では鉄錆が顕著に、c 類では木炭の微小破片が残った。c 類で顕著な木炭は a 類、b 類の中にもごくわずかながら観察できた。このことから、この漆喰材は石灰石に熱を加えて生石灰を作り、生石灰に水を入れて消石灰にしたものを利用したとみられる。木炭は石灰の製造過程で石灰岩を焼いた燃料が混入したものとみられる。

表面観察	出土重量	出土体積	主成分	酸溶解成分	酸不溶成分
a 表面なめらか	850 g	1,400 cm ³	CaCO ₃	98.0%	砂粒 (2.0%)
b 表面鉄錆	960 g	1,600 cm ³	CaCO ₃	74.0%	鉄錆 (26.0%)
c 木炭粉入り	270 g	500 cm ³	CaCO ₃	95.1%	木炭 (4.9%)

表 14 壁土の量と希塩酸溶解試験結果

壁材の薄片を作成し、光学顕微鏡、偏光顕微鏡で内部組成、混和材の内容を観察した。まず、偏光顕微鏡による薄片観察の結果、a類、b類、c類のすべてについてカルサイトの結晶を確認した。木炭片の観察では、放射状の導管・単列放射組織を持つことからブナ科のシイ（図版 62 の 2）やクリ（図版 62 の 1）と同定できるもののほか、放射組織の分野壁孔の特徴によりヒノキ科と推定するものがある。木本ではなくイネ科と推定できるものもある（図版 62 の 4）。そのほか繊維が一定の幅で同一方向に走行するのが観察できる（図版 62 の 5～8）。繊維断面はやや三角形に近いもの、楕円形をさらに扁平にしたものなどがあり、断面の大きさは長径 15 μ m 短径 6 μ mほどである。大きさから麻系統の植物繊維とみられる。これらの繊維は同一方向に並ぶ傾向がみられることから、糸屑ないしは布に由来するものと推定できる。

白壁の科学的な分析（^{注45} 蛍光 X 線分析、X 線回折分析）を行った（表 15）。蛍光 X 線分析による成分分析の結果は各試料ともよく似たもので、カルシウムが主成分であり、ほかに鉄分がかなり含まれる。

X 線回折による結晶成分の定性分析では各試料ともカルサイト (CaCO₃) を検出した。また、a類では約 47～50%、c類では 52～55%のカルサイトを含有していることが判明した。^{注46} このカルサイトは壁材に含まれるカルシウム分が大気中の二酸化炭素を吸収して炭酸カルシウムに再結晶したものである。X 線回折分析の結果は水酸化カルシウムすべてが再結晶しておらず、非結晶質の部分が半分近くあることを示しており、これは偏光顕微鏡で観察した結果とも合致する。

	Al	Si	P	S	K	Ca	Ti	Mn	Fe	Sr
a類	0.75	1.70	0.40	1.00	0.26	90.00	0.17	0.30	5.10	0.28
c類	0.35	1.10	0.46	0.86	0.20	92.00	0.12	0.47	4.50	0.18

表 15 壁土の蛍光 X 線による成分分析 (%)

6 節 平安京造営前の遺物

イ 土器（図 55 ～ 58）

主として南北両湿地から出土した。破片が各所に散在する状態で、付近の高所からの二次的埋没遺物である。平安京造営前史を語る資料ではあるが、格別まとまりはない。

<縄文時代>

後期北白川上層Ⅰ式（図 55 の 351・353・図 56 の 357・358） やや肉厚の口縁部に縄文原体を転がし、頸部を無文帯とする縁帯文を特徴とする甕（351）がある。^{注47} 縄文を持たないが、口縁部の作りが縁帯文と同一な鉢（353）もある。両土器は胎土に角閃石を多く含む。^{注48} 口縁部の上側が幅広い面をなし、その部分に沈線を刻む甕（357）や体部に沈線で綾杉文を飾るもの（358）もある。

後期北白川上層Ⅱ～Ⅲ式（図 56 の 359・360・362） 口縁部内側や体部上位に太めの凹線を引く甕がある。

後期後半（図 55 の 356） 無文の鉢（356）は一乗寺 K 式～宮滝式のものである。

晩期滋賀里Ⅱ式（図 56 の 361） 波状の口縁部を持ち、内側に波状に沿って 2 条の沈線を刻む浅鉢がある。^{注49}

晩期滋賀里Ⅲ b 式（図 56 の 363 ～ 365） 直立する口縁部の直下に半分に割った管で押し引きの列点文を刻むもの（363）がある。頸部と体部の境に爪形の列点文を押す甕（363・365）は、岡山県下の原下層式^{注50}と共通する特徴である。

晩期長原式（図 55 の 352・354・355・図 56 の 366 ～ 372） 口縁部に突帯を廻らし、その部分に細かめの列点文を刻む甕（352・366 ～ 372）がある。^{注51} 甕の底部は下が外側にはみ出るような特徴を持つ（354・355）。縄文時代の土器のうちではこの時期のものが多い。

<弥生時代>

前期Ⅰ様式（図 57 の 373・374） 頸部に突帯とへらで描いた平行線文を持つ壺（373）がある。このほかに、口縁部の端に沈線を 1 条刻む壺の小片（374）がある。

中期Ⅲ様式（図 57 の 375 ～ 378） 体部に櫛目の波状文と平行線文を持つ大形の鉢（378）がある。体部下半の開きが少なく、底が突き出るような感じの壺の底部（375）や座りの良い大きな底部（377）もこの時期である。蓋の破片（376）もこの時期か。

後期Ⅴ様式（図 57 の 379 ～ 390） 無文で体部の丸い壺（389）、算盤玉のように体部が屈曲する台付壺（390）がある。外面を丁寧にハケメ調整する甕（384）のほか、タタキ成形

の甕(381・382)がある。高杯(379・380・385・386)と壺もしくは鉢の脚台(387・388)もある。

<古墳時代>

初期(図58の391・393～397) 凹線文風の平行線文を口縁部に飾る壺(391)、筒状の口縁部を持ち、口縁部と体部上位に細い爪形の列点文を持つ壺(395)がある。小さな鉢形の壺(394)もある。甕は受け口の口縁部のもの(396)と、直線的に開く口縁部のもの(397)がある。高杯は杯部が小椀形で、脚部は低く裾が大きく開く(393)。

前期(図58の392・398～400) 二重に開く口縁部を持つ壺(392・398)と、軽く開く口縁部を持ち、口縁部の内側が一樣に肥厚する甕(399)がある。いずれも、球形に張る体部を持ち、底部も丸い。内面をケズる。高杯は、底が平らで直線的に開く杯部を持つ(400)。

後期(図58の401～410) 須恵器を多く認める^{注52}。須恵器は杯身(407～410)とそれに組み合わせる杯蓋(401～406)がある。杯身は口縁部と体部の境に受けがある。杯蓋では天井部と口縁部の境に段痕跡が残る。

末期(飛鳥時代)(図58の411・412) 受けより上がほとんど萎縮・退化した須恵器の

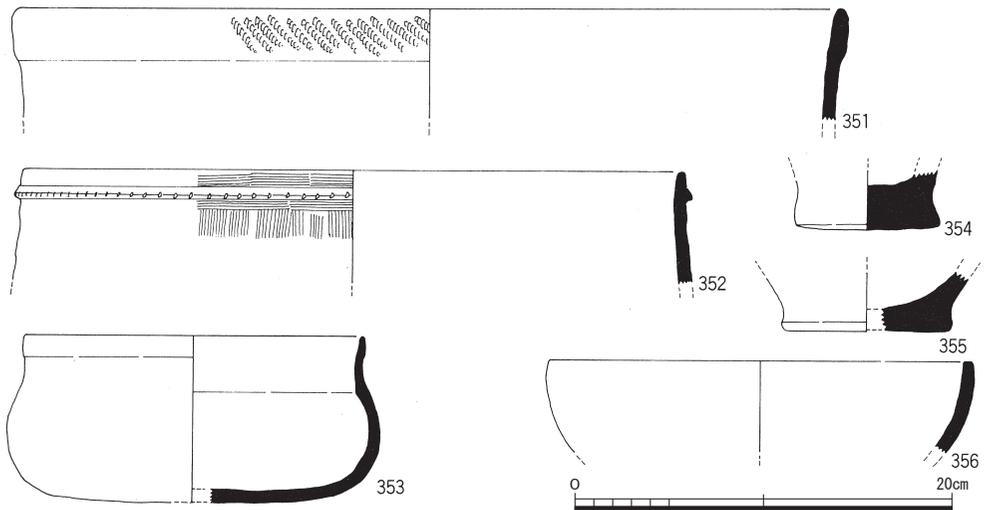


図55 縄文時代の土器(1)(1:4)



図 56 縄文時代の土器 (2) (1:2)

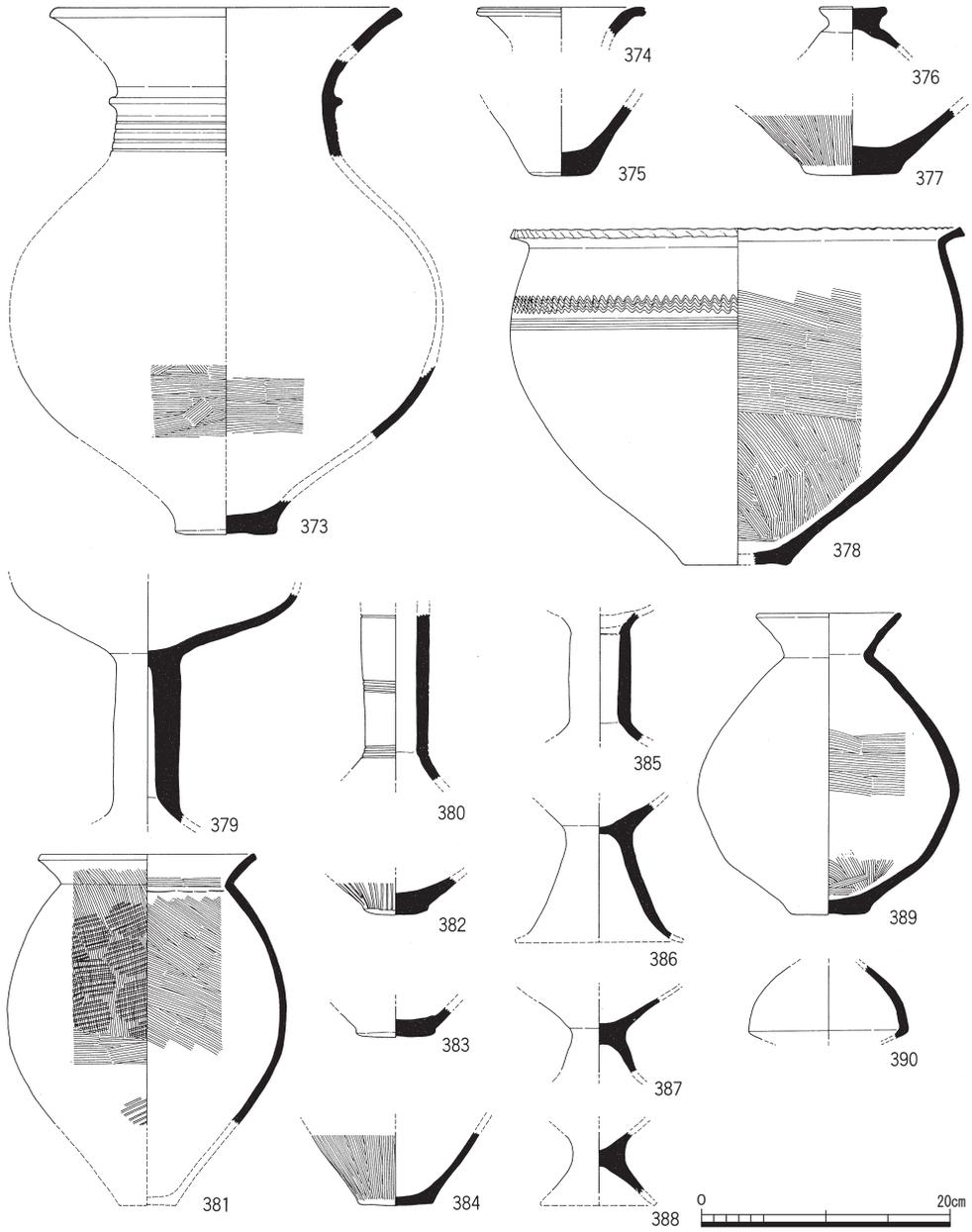


図 57 弥生時代の土器 (1:6)

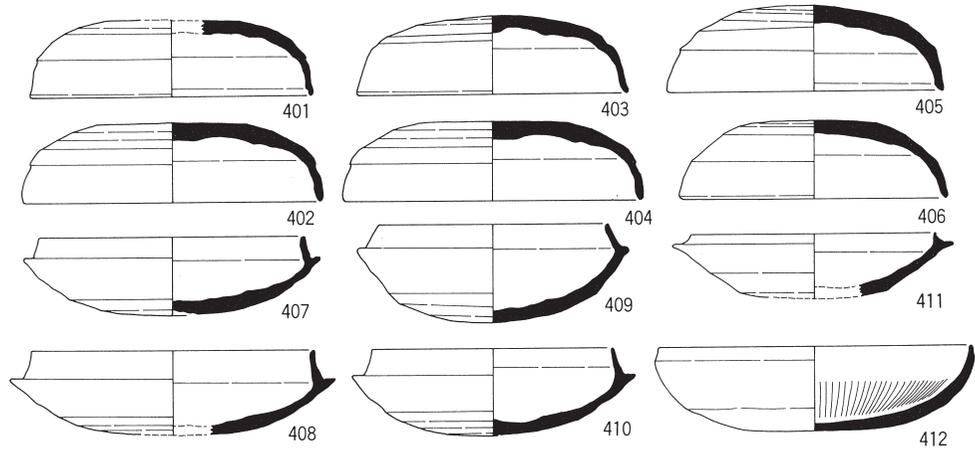
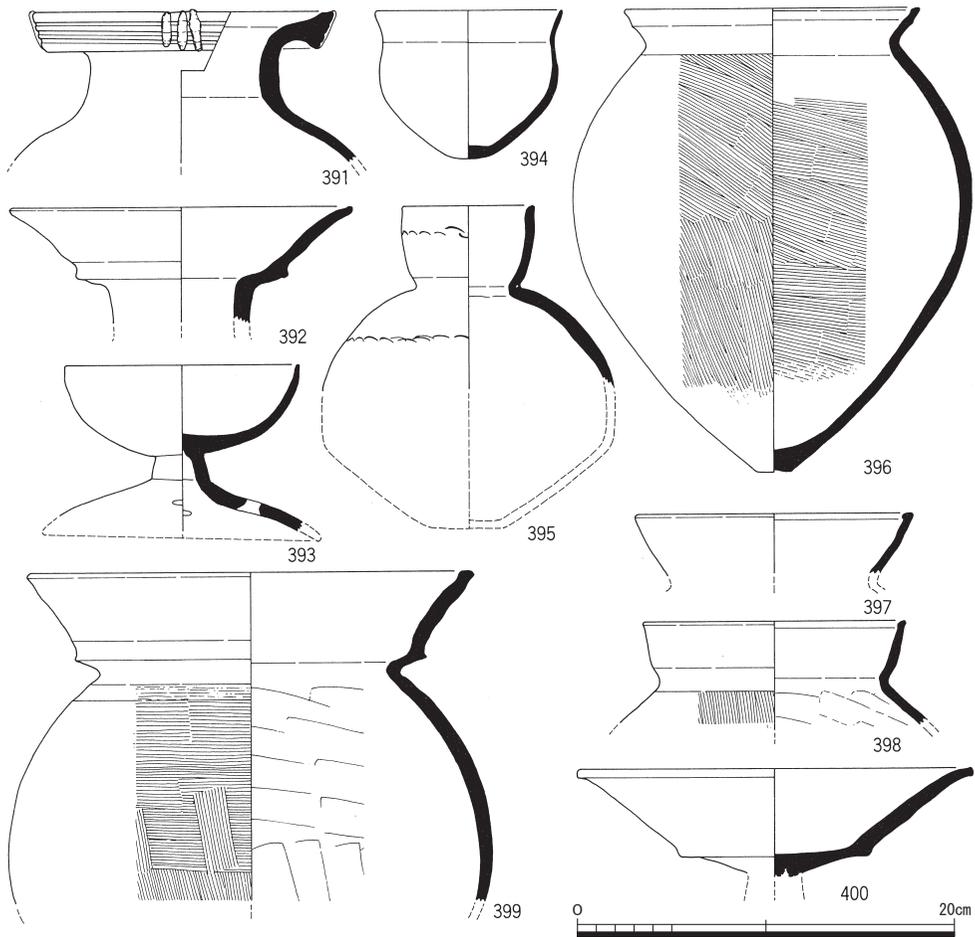


図 58 古墳時代の土器 (1:4)

杯身(411)と内面に中心から外に走る線を暗文で密に描く土師器の杯身(412)がある。

ロ 木器(図59)

すべて、北湿地からの出土である。弥生時代後期もしくは古墳時代初期のものと考えてよい。

農具(413) 鋏は舟形突起を持つ広鋏である。柄の装着孔はほぼ円形で、装着角度は約70度である。舟形突起のある面と反対の面には、蟻仕口のくりこみがある。

工具(415) 篋は、偏平な身を持ち、同じ幅で断面が円形の柄が付く。

容器(414) 木槽は、上からみると隅の丸い方形である。内側を削り抜いて作る。外面底部に円形の台を削り出す。

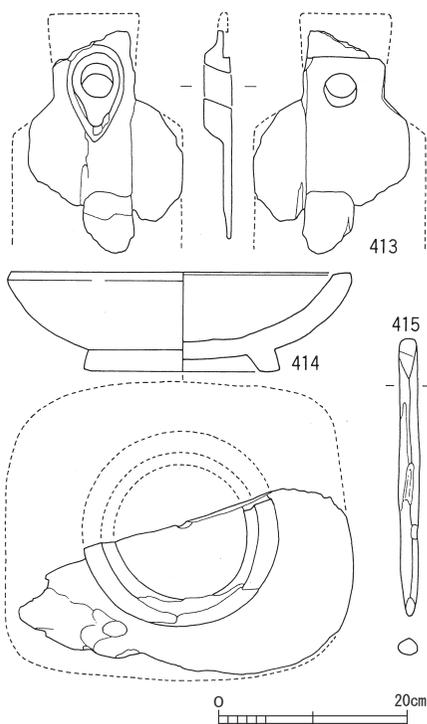


図59 木器(1:8)

ハ 石器(図60・61)

石器も大半が湿地からの出土である。

石斧(図60の418) 縄文時代の磨製石斧(緑泥片岩製)がある。南湿地の下層から出土した。

石鎌(図60の416・417) 2点ある。凹基式(416)は縄文時代、凸基式(417)は弥生時代のものと思われる。いずれも安山岩製である。

石包丁(図60の419) 弥生時代の稲穂を刈る鎌である。やや反り返る直線刃で、背は弧状である。指掛けの紐を通す孔が一つ残る。粘板岩の磨製である。北湿地の最下層から出土した。

石錘(図61の428・429) 縄文時代、漁撈の網などに付けた錘である。2点ある。いずれも長辺13cmほどの長楕円形の石を選んでいる。長辺の両先端に紐掛けの目を入れる。429は擦り目(頁岩製、南湿地下層出土)、428は打ち欠き目(粘板岩製、北湿地最下層出土)である。

石棒(図61の427) 縄文時代、集団あるいは個人の土俗信仰具と考えられている。長さ

15cmほどの断片である。縄文時代晩期の石棒は太さが数cmと細長いのが普通である。この石棒は縄文時代中期の石棒に似て、径14cmと太い。石英安山岩製で北湿地最下層から出土した。

叩石・叩台（図61の431・433） 食物の加工に用いる縄文時代の道具である。いずれも打ち当たった部分に、特有な衝撃痕のくぼみを生じる。叩石（433）は北湿地の下層から出土、叩台は北湿地の上層から1点と土取穴から1点（431）出土した。

擦石・石皿（図61の432・434） これも、縄文時代の食物の調理・加工に用いる道具類である。擦り石（432、細粒花崗岩製）は北湿地の最下層から、石皿とみられる扁平で大きな石（434、石英斑岩製）は南湿地の下層から出土した。

石屑（図60の420～426） 原石を打ち割り石器を作る時に生じた、残り屑である。いずれも安山岩である。南湿地から2点（421・426）、北湿地から2点（423・425）、新しい遺構から3点（420・422・424）が出土した。

砥石（図61の430） 面の磨かれた石が南湿地（430）と北湿地から出土している。

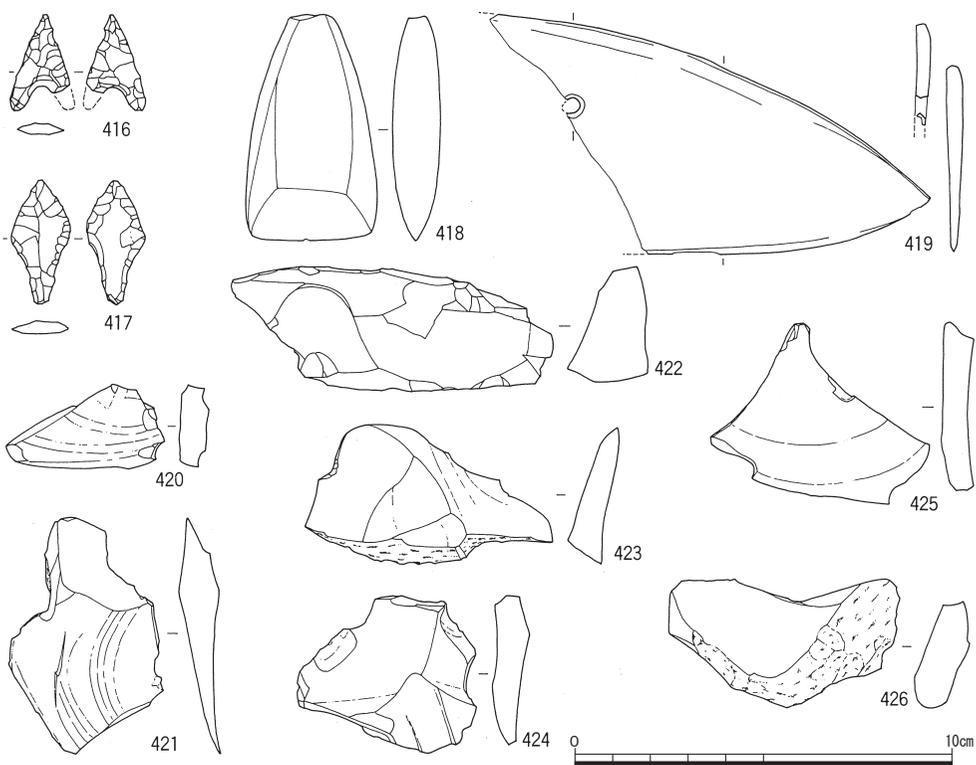


図60 石器(1)(1:2)

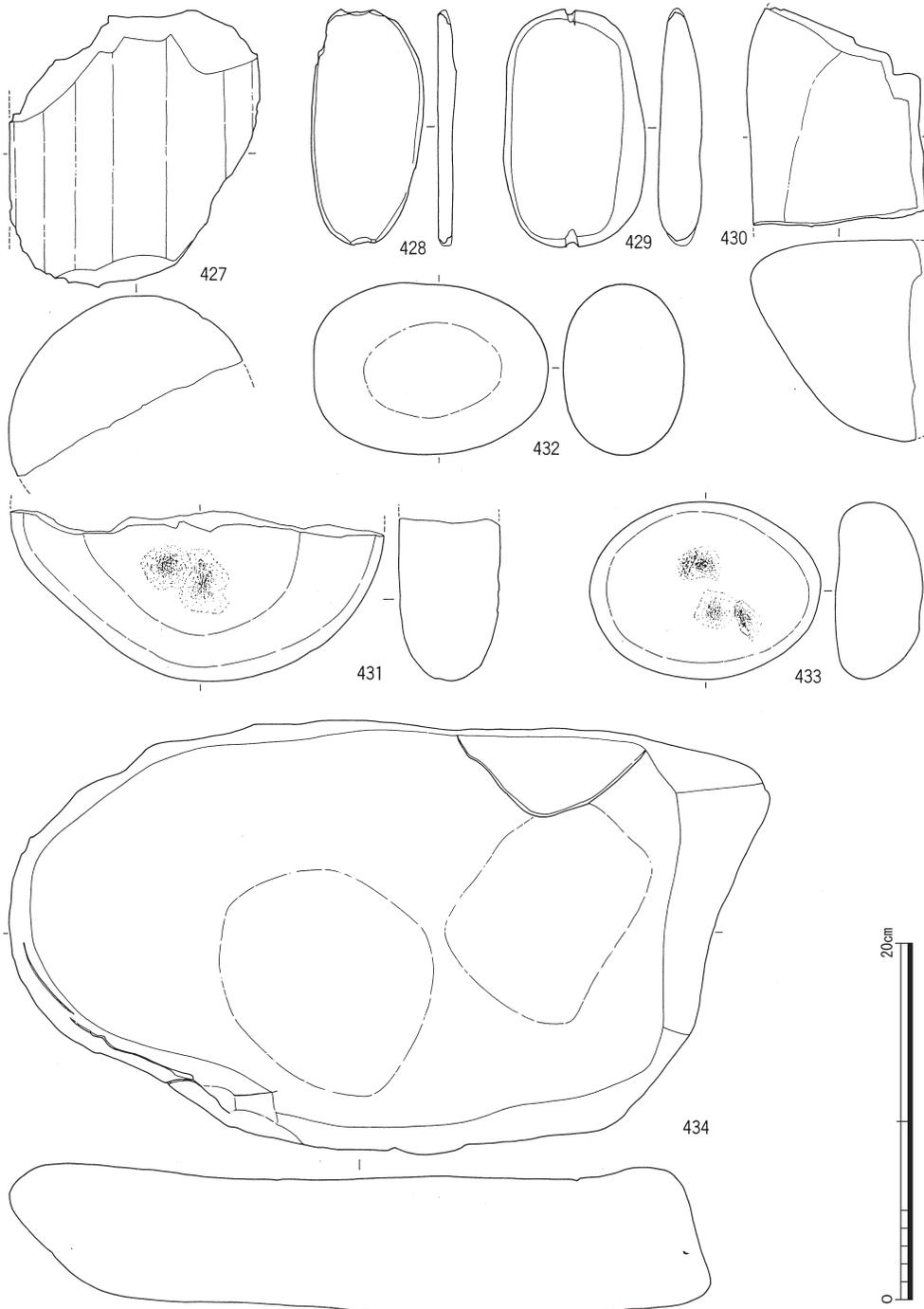


图 61 石器 (2) (1:4)

- 注1 白色無釉陶器は、平安京の調査によって近年明らかとなった土器の種類である。まだ定着した用語ではないが、適当な表現がないのでこれを用いる。『平安京右京三条三坊』(文献31)を参照。
- 注2 本来、杯と椀は異なった器であるが、破片では明確に区別できない。この時期、杯・椀・皿では、口径により、Ⅰ(平均18.5cm)、Ⅱ(同16.2cm)、Ⅲ(同13.7cm)、Ⅳ(同10.6cm)の004法量を認める。区別の目安として、ここでは、口径法量Ⅰ・Ⅱのものを杯、同Ⅲ・Ⅳのものを椀とした。
- 注3 この井戸から出土した総破片数は1,874点で、その内訳は、土師器1,588(84.7%)、須恵器174(9.3%)、黒色土器13(0.7%)、緑釉陶器86(4.6%)、灰釉陶器11(0.6%)、分類不能2である。
- 注4 杯・椀・皿での、外面ケズリ調整の有無の比率は、有45%、無55%で、ケズらないものが幾分多い。
- 注5 平安時代末期・鎌倉時代の文字資料が1点ある。
「大」白磁皿Eの外底に1字を墨書する。土壙J042から出土した。
- 注6 『平安京右京三条三坊』(文献31)。なお、Ⅵ期は同報告では触れていないが、小森俊寛が「消費地の様相<平安京>」中近世窯業調査過程講義資料、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター、1990で同じ内容を提示している。
- 注7 ここに該当する土器群は、Ⅴ期新とⅥ期古のいずれとも決めることができない。
- 注8 緑釉白地鉄彩壺は、京都では、西鴻臚館跡で2点(『平安京跡発掘資料選』(二)(文献23)、写真46のb)、植物園北遺跡で1点(『植物園北遺跡発掘調査概報 平成元年度』(文献29)の土器番号32)出土している。
- 注9 平安時代前期には本格的な瓦葺きの建物は想定しえないが、棟のみを瓦で葺いた可能性がなかったかを考える必要がある。
- 注10 平安時代前期には、軒瓦のほか、凹面に判読不明の刻印を押す平瓦片が1点(図62の436)、凹面に「×」の刻みの道具の跡を残す平瓦片が1点(図62の435)、熨斗(のし)瓦が1点、面戸瓦が1点ある。
- 注11・12 『平城宮出土軒瓦型式一覧』(文献48)。
- 注13 『長岡京古瓦聚成』(文献55)。
- 注14 『西賀茂瓦窯跡』(文献41)。
- 注15 『平安京古瓦図録』(文献53)瓦番号38と同範。
- 注16 『平安京古瓦図録』(文献53)瓦番号37と同範。
- 注17 この軒丸瓦の群は、角社瓦窯ではまだ出土していないが、そのものに間違い

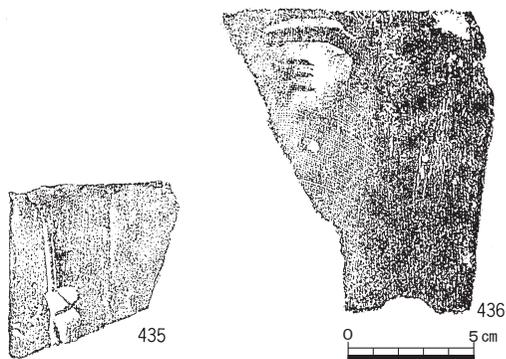


図62 刻印を残す瓦(1:3)

いないことを木村捷三郎が「深草中学校出土の瓦」(文献8)で述べている。
本遺跡の平安時代前期の軒丸瓦で主体を占めるこの群の瓦は、次の遺跡で確認している。もし、五町の宅の棟を飾った瓦とすれば、宅の住人の考察に手がかりとなるかもしれない。
<大の同範瓦の出土遺跡>

冷然院跡：『史料 京都の歴史 2 考古』(文献9)の遺物番号897。同じ瓦は『昭和57年度

京都市埋蔵文化財調査概要』(文献18)の図版34にも掲載。
東洞院大路跡：『平安京古瓦図録』(文献53)瓦番号62の解説。
三条西殿跡：『平安京古瓦図録』(文献53)瓦番号62の解説。
廃深草寺：「深草中学校出土の瓦」(文献8)の瓦番号3。
魔法禅寺：「深草中学校出土の瓦」(文献8)の瓦番号3の解説。
北野廃寺：「深草中学校出土の瓦」(文献8)の瓦番号3の解説。『北野廃寺発掘調査概報』昭和57年度(文献16)の図版7の4。
広隆寺跡：「広隆寺跡」(文献38)の第5図の17。
室町殿跡隣接地：「室町殿跡隣接地(RH18)」(文献32)の図10の51。
京都大学構内遺跡：『京都大学構内遺跡調査研究年報』(文献33)の瓦番号AT02。

<小の同範瓦の出土遺跡>

東寺：「東寺境内発掘調査概報」(文献39)の瓦NM16。
高陽院跡：「左京二条二坊(2)」(文献14)の図版5の3。
左京三条三坊十一町：『平安京左京三条三坊十一町』(文献42)の図44の2・3
左京四条一坊六町：『平安京跡発掘調査報告 左京四条一坊』(文献52)の瓦番号T2。
左京六条二坊六町：『平安京左京六条二坊六町』(文献43)の第8図の1
北野廃寺：『北野廃寺発掘調査報告書』(文献17)の図版21のT10。

- 注18 『史料 京都の歴史 2 考古』(文献9)の遺物番号897。なお、冷然院の同文瓦はその創建時(816年)の瓦とみられる。土器溜0019の帰属する時期、前期I期新(およそ810～840年)の古い様相の段階と年代的に矛盾しない。
- 注19 『平安京古瓦図録』(文献53)瓦番号46と同範。
- 注20 『平安京古瓦図録』(文献53)瓦番号309と同範。
- 注21 『坂東善平収蔵品目録』(文献11)の瓦番号328・330と同範。
- 注22 「東寺境内発掘調査概報」(文献39)のNH02と同範。
- 注23 『平安京古瓦図録』(文献53)瓦番号370と同範。
- 注24 『大谷中・高等学校内遺跡発掘調査報告書』(文献54)。
- 注25 『平安京古瓦図録』(文献53)瓦番号462と同範。
- 注26 『平安京古瓦図録』(文献53)瓦番号482と同範。なお、同書では、平安時代後期の瓦と解説するが、その時代よりも古い製作の特徴を持っている。平安時代前期に遡る可能性もある。
- 注27 瓦に刻んだ文字には、正しい字と、鏡に写してみた字のように裏返しの字がある。前者を正字、後者を裏字とする。また、突出した線で字が読めるものと、くぼんだ線で字が読めるものがある。前者を陽字、後者を陰字とする。
- 注28 『大谷中・高等学校内遺跡発掘調査報告書』(文献54)の文字瓦10と同印か。
- 注29 『大谷中・高等学校内遺跡発掘調査報告書』(文献54)の文字瓦6と同印。
- 注30 『大谷中・高等学校内遺跡発掘調査報告書』(文献54)の文字瓦5と同印。
- 注31 『大谷中・高等学校内遺跡発掘調査報告書』(文献54)の文字瓦19と同印。
- 注32 幡枝瓦窯の報告は『栗栖野瓦窯跡発掘調査概報 昭和60年度』(文献22)がある。
- 注33 上原真人は「古代末期における瓦生産体制の変革」(文献4)で、一群の手法を、瓦当折り

曲げ手法の採用にあたり、その手法の完成（つまり2群）にいたる過渡的な手法とみている。その時期は、京都市醍醐栢杜遺跡八角堂の創建（1155年）よりも後に発生し、平安時代終末より前に消滅する、限られた時期と考察する。本遺跡の状況とも矛盾しない。なお、一群の軒平瓦のうち、顎にタタキの跡を残すものと、瓦当面にタタキの跡を残すものは製作手法の点で区別して考える必要があるかもしれない。

- 注 34 濠 B016 出土の巴文軒丸瓦の製作過程を復元すると、
- 1 作業台の上に瓦当文様を彫り込んだ円形の範（範の大きさ・厚みは文様部分の大きさ・深さと同じ）を置く。
 - 2 円形の範に従って粘土を詰める。範からはみ出る部分は瓦当周縁となる。
 - 3 別に用意した体筒を上立てて接合する。
 - 4 作業台から範ごと外し、範を抜き取る。
 - 5 瓦当の外周や周縁をタたく。
 - 6 接合部をなでて再調整する。
- というような工程が考えられる。
- 注 35 同範が鳥羽離宮東殿跡にある。『鳥羽離宮跡発掘調査概報 平成元年度』（文献 30）の第 134 次調査瓦番号 3。
- 注 36 この文様を裏返した文様のもが尊勝寺跡にある。その瓦は本遺跡の瓦よりも瓦当が一回り大きく、その瓦当文様を手本にこの範型を作ったとみられる。『六勝寺跡発掘調査概要』昭和 55 年度（文献 13）の図版 28 の瓦番号 16。
- 注 37 同範が京都大学構内遺跡にある。『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和 55 年度（文献 35）の図版 7 の I 59。
- 注 38 恐らく、官窯を複数の工人（集団）で共同操業する際に、製品の特定工人（集団）への帰属を示すための目印と思われるが、官窯の調査資料では、同一の記号を刻む瓦は発見していない。平瓦や丸瓦玉縁の端面に類似する記号を刻む瓦と瓦当側縁を叩く有珠巴文軒丸瓦が京都大学構内遺跡で一つの瓦溜から出土している。『京都大学埋蔵文化財報告 第 1 冊 京大農学部遺跡 BG36 区』（文献 34）。
- 注 39 「7」を刻む例は尊勝寺跡にある。ただし、彼例は平瓦部の凹面に刻む。『六勝寺発掘調査概報 1987』（文献 27）の瓦番号 004。
- 注 40 『木器集成図録』近畿古代編（文献 49）の分類を参考にした。
- 注 41 神奈川県千葉地遺跡に似たものがある。『千葉地遺跡』（文献 45）の図版 82 の遺物番号 53。
- 注 42 鼓胴は正倉院御物に奈良時代の三彩陶器のものがある。しかし、正倉院例は、皮締めの部分に突帯を 2 帯廻らす。本例のようにその部分が溝となるのは、中国製の黒釉陶器で金～元代のものが知られている。正倉院の鼓胴は各書に載せるが、『世界陶磁全集 2 日本古代』（文献 44）の図版 71 を挙げておく。中国製の黒釉陶器の例は、『出光美術館蔵品図録 中国陶磁』（文献 3）の図版 130 がある。また、唐代の黒釉白斑文鼓胴が北京故宫博物院にある。
- 注 43 栽培植物の出土地点数を各層ごとにまとめると、ナスが下層 2 地点、上層 2 地点、覆土 3 地点、ウリが下層 3 地点、上層 3 地点、覆土 1 地点、イネが下層 1 地点、キビが下層 5 地点、上層 5 地点である。

- 注 44 重量は上皿計りで 10 g 単位、体積は破片をそのままビーカーに入れ 100cm³ 単位で計測。
- 注 45 奈良国立文化財研究所の肥塚隆保氏の協力を得て行った。なお、測定条件は次の通りである。
蛍光 X 線分析：電圧、50Kvp。電流、50mA。対陰極、Cr。分光結晶、Lif/EDDT/TAP。検出器、SC/F-PC。X 線通路、真空中。装置、リガク社 3371C(S)。
X 線回折分析：電圧、30Kvp。電流、10mA。対陰極、Cr。フィルター、V。走査速度、1deg/min。ステップサンプリング、0.02deg。走査回数、5 回。
カルサイトの定量推定：内部標準物質に弗化カルシウム (CaF₂) を使用して 3.15(オングストローム) [111] のスペクトルと試料中のカルサイト (CaCO₃) 3.04(オングストローム) [104] を比較する。検量線作成のための標準試料にはカルサイトの単結晶を用いた。
- 注 46 試料中のカルサイト量を求めるため、100%、80%、60%、40%、のカルサイト含有量を持った標準試料を測定して、各々のカルサイトと弗化カルシウムのピーク比と含有量の関係を最小自乗法により求めて検量線を作成し、この検量線から含有量未知の出土試料の値を求めた。
- 注 47 北白川上層式の I～Ⅲ式の細分は、「後期の土器 - 近畿の土器 -」(文献 2) による。
- 注 48 角閃石を含むものは大阪生駒西麓に多いが、土器をそこから搬入したとみるよりも、原料土の搬入とみるべきであろう。
- 注 49 滋賀里式の分類は『湖西線関係遺跡調査報告書』(文献 40) を基本とし、「晩期の土器 - 近畿地方の土器 -」(文献 57) の資料整理を参考とした。また、家根祥多氏から分類の助言を得た。
- 注 50 「岡山縣御津町原遺跡」(文献 7)。
- 注 51 長原式は「縄文土器」(文献 57) による。
- 注 52 土師器は、甕の体部片では平安時代のものとは明確な区別をなしえないためか、ほとんど認めない。

IV章 考 察

1 節 平安時代前期の宅

平安京右京六条一坊五町・六町を調査し、とりわけ、五町についてはその約6割を調査した。その結果、平安時代前期の邸宅跡を復元するに十分な遺構を発見した。これまでなかなか描きにくかった平安時代前期の町の実像を明らかにすることができると考える。

イ 宅の広さ

宅の広さ（大きさ）を判断する時、問題となるのは、いかなる遺構を持って宅の限りとみるかである。大枠として、平安京は大路・小路が縦横に走り、それによって区画される40丈（約120m）四方の町が一つの単位となる。しかし、宅の広さは住人の位階によって規制され、1町の宅地を領有できるのは三位以上の位階の人と考えられている^{注1}。従って、住人が四位以下の場合、町を細分した宅地のはずである。町の細分は四行八門制に基づいて分割されたとみるのが定説である。それは、四位以下の階層のものは大路に面して、門を開くことが許されていなかった^{注2}こととも関連する。その時、町内には道路に面しない区画が生じ、町内に小径（こみち）が引かれる。径は「経」に通じ、縦糸の語義があり、小径は南北方向の小道の意味である。五町のように南北方向の大路に面する町では、幅1丈5尺の小径を2本引くのが規定である。皇嘉門大路が西を通る五町の場合、小径の位置は町の東西中央と西寄り4分の1の所にあると考える。

今まで、平安京で小径に関連する遺構を発見した例が少数ある。その一つに、右京二条三坊十一町の溝がある^{注3}。この町の東西両道路はいずれも小路であるので、町内に小径を引くとすれば、幅1丈5尺のものが東西中央に1本のはずである。調査では、条坊復元モデルによる町の東西の中央とその東約2mに溝を発見している。溝の間隔はやや狭いが、一方を小径の計画線に乗せている状況を窺うことができる。もう1つの例は、右京八条二坊八町の西市跡の溝である^{注4}。市町では幅1丈の小径3本を引く規定である。溝は条坊復元モデルによる町の東西の中央より約1.2m東にあり、その誤差を考えるとほぼ中央といつてよい。この溝に東から流れ込む溝がいくつかあり、小径の東の限りに付属する溝と考えるが、西の対になるものは調査地の事情により確認していない。これらの少ない事例から、小径に関連する溝は、一方を小径の計画線の上に、一方をいずれかの宅地に寄せて掘る傾

向をわずかながら窺うことができる。

五町に四行による分割を仮想し、計画線を引くと（図 63）、溝 F024 が町の西寄り 4 分の 1 に位置するとわかる。この付近には、溝がほかにもあり、溝 F023 は溝 F024 の西約 4m、溝 F025 は同じく西約 7m にある。特に、溝 F023 と溝 F024 は同じ南北の位置で南端が消滅していて、両遺構の関連の深さを認める。また、溝 A009 は溝 F024 の東約 9m にある。この結果は既発見の小径に関連する溝の状況と一致し、町の西寄り 4 分の 1 の位置での分割と小径の存在を認めることができる。溝 F023 と溝 F024 を一連の遺構とみると、両溝の間隔約 4m は小径幅 1 丈 5 尺（約 4.5m）にきわめて近い。一方、町の東西中央には溝などの区画遺構は認められず、仮想の計画線は建物 01・23 の内部を通る。東 4 分の 1 での仮想の計画線も建物 06 の母屋西妻を通るほか、建物 11・14 などの内部を通る。従って両位置での分割は否定的である。

さらに、五町での八門による分割を仮想し、計画線を引くと、仮想の計画線は北から、建物 07 の北妻の位置、建物 05 の南桁の位置、建物 09 の北桁の位置、建物 01 の南妻の位置、建物 11 の母屋の内部、建物 23 の母屋北妻の位置、建物 23 の南庇の位置にあり、仮想の計画線の間建物にほどよく納まる状況はない。これから、五町の南北方向は八門による分割はまったくされていないとみる。ただし、八門の仮想の計画線が建物母屋の端を通る傾向が顕著であり、八門の制度そのものの存在を裏付ける。

以上の検討によって、五町の東 4 分の 3 はそれ以上は分割されていない一つの宅地とみる。同時に、四行八門制によって 1 町の分割が行われ、規定通りに町内小径が引かれていた事実もまた判明した。溝 A009 はその宅地内の主要部分の西を限る溝と考えるのが妥当である。

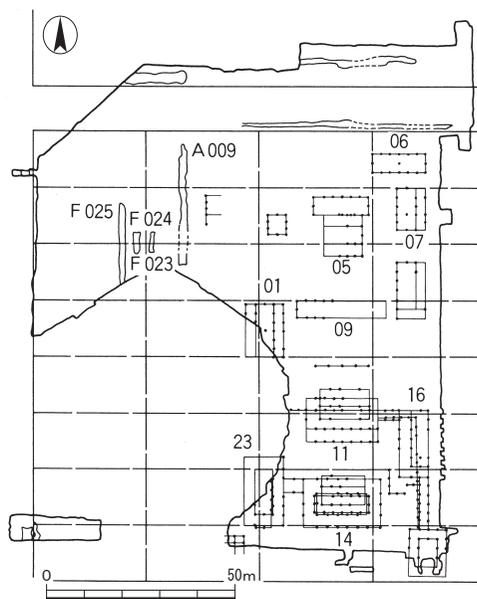


図 63 遺構と四行八門の関係 (1:2,000)

ロ 建物の配置計画の要素

宅の広さの考察で、建物母屋の端が八門の計画線の位置にある傾向が顕著であることを明らかにした。これは、建物の配置に計画性があったことを示している。この視点から建物の位置関係をみると（図 64）、まず東西棟の建物 04・11・13・14 がその中心を南北一線に揃えて建ち並ぶ状況を指摘できる。次に南北棟の建物 01・23、建物 07・08 は、各々棟を南北に揃えて建ち並ぶ。このように、東西棟は東西棟どうしで中心を、南北棟は南北棟どうしで棟を揃える傾向が顕著である。

東西棟と南北棟の関係では、建物 14 の母屋南桁と建物 23 の母屋南妻、建物 11 の母屋北桁と建物 16 の北妻、建物 04 の母屋南桁と建物 02 の北妻および建物 03 の南妻が揃う。従って、東西棟と南北棟の関係では、東西棟の桁と南北棟の妻を揃える傾向を指摘できる。ただし、建物 06 と建物 7 は東西棟の妻と南北棟の庇を揃える事例で、やや異なる。

さらに、東西棟の建物 04・11・13・14 の中心を結ぶ線に対して、建物 01・23 の東庇を結ぶ線と建物 07・08 の西桁を結ぶ線がほぼ等しい距離にある。

このように、建物の配置の計画の要素として、八門制の計画線、東西棟の中心、南北棟の棟筋、東西棟の母屋桁と南北棟の妻、東西棟の妻（桁）と南北棟の庇、東西棟の中心からの南北棟の距離を挙げることができる。この内、八門制の計画線は条坊によって定まる固定的なものであるが、それ以外はお互いの建物の存在を前提とする流動的な要素である。従って、それらの要素の連鎖によってまとまる建物群（表 16）は、若干の建築時期差があったにしても、ほぼ同時に存在したとみてよい。この要素の連鎖、それに同時の存在が直接わかる廊による結合によって、結局、宅内の各所に分布する建物のほとんどがほぼ同時に存在したと考えることができる。

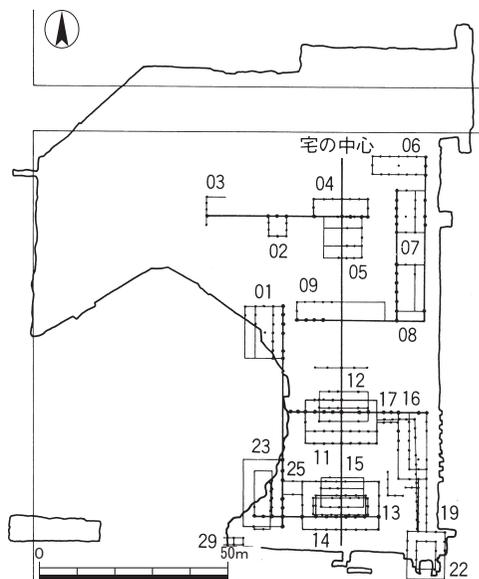


図 64 建物の配置計画の要素 (1:2,000)

要素	連鎖建物			
廊による結合	22=16=11	14=23		
東西棟の中心	04=11=13=14			
東西棟の桁と南北棟の妻	03=02=04	14=23		
南北棟の棟筋			23=01	07=08
東西棟中心からの距離			23=01=07=08	
東西の妻と南北の庇			06=07	
八門計画線	22	(05)	23 01 07	09
要素なし	12・15・(29)			

(= は同時存在ないしは廊による結合)

表 16 建物の配置計画の要素の連鎖

ただし、建物どうしが重なる事例があることも事実であり、部分的な建て替えなどは考慮しなければならない。建物のうちで重複するものは、

- ①建物 04(古)→建物 05(新) ②建物 11(古)→建物 12(新)
- ③建物 13(古)→建物 14(新) ④建物 22(古)→柵 18(新)
- ⑤建物 23 と柵 24

である。従って、最多で 3 遺構が重複している。

先の配置計画の要素の連鎖からはずれる建物 05・12・15 のうち、2 棟が同時存在とみる建物群よりも新しい。しかも、この 3 棟は中心を南北一線に揃えて並ぶ東西棟と重複する東西棟である。従って、この 3 棟は同時存在とみる建物群の建て替えとするのが妥当である。ただ、④の柵 18 や⑤の柵 24 が建て替えたものと同時期とみる根拠はない。

以上の重複関係から、若干の建築時期差があったにしても、当初から宅全体に建物を計画的に配置し、のちに若干の建て替えを行ったという認識が妥当と思える。すなわち、建物 05・12・15・柵 18・24 はのちの建て替えとして除き、建物 13 は建物 14 の前身として除くことで、宅を復元することが可能である。その整備された時期は、井戸 S013 の廃絶の時期、平安時代前期 I 期新でも新しい段階が目安となる。

この結果、五町の邸宅内には、約 15 棟の建物があったことになる。この 15 棟という数字は、当時の邸宅内の棟数としては、決して少ない数字ではない。貞観 17 年(875)、冷然院に火災があり、院をことごとく焼き尽くした。この時、54 棟が延焼したという。冷然院は 2 町四方を占めたので、1 町平均 13～14 棟の建物があったことになる。五町の数値は、当時の邸宅の平均的な棟数を超える数値といえる。

ハ 宅の構成

古代の住宅において、南面を主とする思想から、東西棟の建物は格別の意味を持っていた。発見した宅において、東西棟の建物は5棟あり、このうち建物04・11・14の3棟が、各々の規模がまったく異なり、距離も相当隔てているのに、その中心を南北一線にして計画的に配置している。これは、明らかに、宅の建築にあたって、それを宅の主線と意識して建物を配置したからに相違ない。主線は宅の東西幅の2分の1よりも若干東にずれる。この理由は明らかではない。

この主線に対し、その脇線といえるのが、主線の東西両側にある。それは、南北棟である建物07・08・16の形成する線、同じく建物02・01・23の形成する線である。この脇線は主線からほぼ等距離に計画している。この主線・脇線上に、建物03・29を除く建物が配置する。脇線上の各建物は主線に対して、東西非対称の配置である。ともすれば、平安宮内裏などの例から、当時の宅内の建物配置を主線を軸に対称的なものとみがちであるが、五町の宅はそのような安易な見方に警鐘を与える。

これを南北でみた場合、建物11から両翼に出る柵26と廊17・建物16が一線をなす以外は主たる線を認めない。が、宅を南北にほぼ2分する柵27を境として、北と南では、建物の規模や建物どうしの有機的結合に大きな差異がある(表17)。

南群では、主線上に四面庇の建物14と二面庇の建物11があり、東脇線上に二面庇の建物16と恐らく四面庇の建物22があり、西脇線上に四面庇の建物23がある。さらに、建物14と建物23の間を短い廊25で、建物11と建物16の間を3間の廊17で、建物16と建物22の間を6間の廊19で結んでいる。東西棟が格別の意味を持つことは先に述べたが、東西棟のうちでも、当時の建築における最高級の様式、四面に庇を持ち入母屋造りに復元できる建物は、その宅の正殿にふさわしい。建物14を中心にして、その北・東・西に建

柱痕跡径	北 群	南 群
30cm 礎板有	建物 04	建物 <u>11</u> ・14・22
礎板無	建物 09	
27cm 礎板無		建物 <u>16</u>
24cm 礎板有		建物 23
礎板無	建物 <u>06</u> ・07・08	
21cm 礎板無	建物 <u>01</u>	廊 17・ <u>19</u> ・柵 <u>21</u> ・26
18cm 礎板無	建物 <u>02</u> ・03	

(00 はスギの柱根、00 はヒノキの柱根)

表 17 北群と南群の建物の比較

物が並ぶ様は、平安貴族の完成された居住様式としての「寝殿造り」の正殿・対の屋の配置と基本的には同一であり、ここが宅のハレ（表）の場であることを語る。

北群は、主線上にある建物は母屋のみの建物 04 と規模不明な同じく母屋のみの建物 09 で、正殿とみる建物 14 と比べ、構造上はるかに見劣る。東脇線上にある片面庇の建物 07・08 と母屋のみの建物 06、西脇線上にある規模の小さな建物 02 や二面庇の建物 01 も、南群と比べ、概して規模や構造が劣り、各建物どうしの有機的な結合もない。ここを宅のケ（裏）の場とみる理由である。

ニ ハレの場

正殿（建物 14）に対する脇殿は、南を除く三方に 4 殿ある。各々、その位置から、北の対屋（建物 11）、西の対屋（建物 23）、東の対屋（建物 22）、東北の対屋（建物 16）とする（図 65）。

正殿は上述のように、5 間四面の入母屋造りの建物である。母屋の東 1 間目に間仕切りの柱があり、母屋を西 4 間と東 1 間に分けている。庇の西北隅には西の対屋にわたる短い廊下が設けられている。この部分は正殿と西の対屋の各々の屋根がほとんど近接するので、廊に特別に屋根を設ける必要はない。

北の対屋は正殿の真北にある。正殿よりもわずかに間口が狭いだけで、遜色ない規模を持つ。正殿の入母屋造りに対し、これは切妻造りである。正殿と同じく母屋の東 1 間目に間仕切りの柱がある。東 1 間目は廊 17 と接続する部分であり、北の対屋の南庇から母屋東 1 間目、さらに廊 17 という行き交いの中で、廊の機能を果たしていた可能性がある。母屋の内部には付属施設を持つ。類似する遺構は奈良・薬師寺僧坊にあり、その報告では作り付けの床の跡とみている。付属施設を床の跡とみると、それを設置しうる条件として、北の対屋が土間であったといえる。北の対屋が土間であるとすれば、それと廊で結ばれる東北の対屋・東の対屋も土間とみるのが自然である。逆に、正殿・西の対屋の両入母屋造りの建物がそれらとは独立して建てられているのは、床束の痕跡を確認していないものの、両殿が床張りの建物であったからに相違ない。なお、北の対屋には、東の廊 17 に対応して、西にも、母屋北桁に柵 26 が取り付いている。

西の対屋は、その母屋南妻と正殿の母屋南桁の柱筋を揃える。正殿と同様、5 間四面の入母屋造りであるが、1 間の寸法が短く、その分、規模が小さい。正殿にわたる廊が付く。

東北の対屋は、北 1 間目で北の対屋と廊で結んでいる。母屋は 6 間で、北の対屋同様偶

数間数である。西と南に庇が付くほか、母屋の南1間目に間仕切りの柱がある。なお、北5間目の西庇の所に井戸がある。井戸と対屋との並存関係は不明である。また、この対屋は東に庇を持たないが、南庇の東に柱の痕跡があり、東北の対屋の東に別の建物が存在し、それが南庇に取り付けていた可能性がある。

東の対屋は三間四面の規模の小さなもので、南の軒先は1間ほどの余地を残し六条大路面の築地と接する。建物を六条大路にきわめて近接して建てた理由はわからない。

東の対屋の西方、正殿と南面築地との間はごく狭い空間しかない。大邸宅にあっては、管弦の宴の場となる園池の造作を行う前庭の場所である。前庭では、池の跡を追求したが、平安時代末期・鎌倉時代の小規模な池を確認したのみで、平安時代前期の池はなかった。東北の対屋と重なる井戸S013の植物遺体の分析では、雑草がまったくみえず、付近はかなり手入れの良い状態であったことを復元できる。木本はモモ・センダンが出土した。モモは果物の可能性もあり、植栽の有無は不確定であるが、センダンは高さ8mになる落葉高木の庭木である。こうした樹木が付近に植栽されていた。この程度の規模の宅にあっては、前庭に池は必須のものではなかったのであろう。

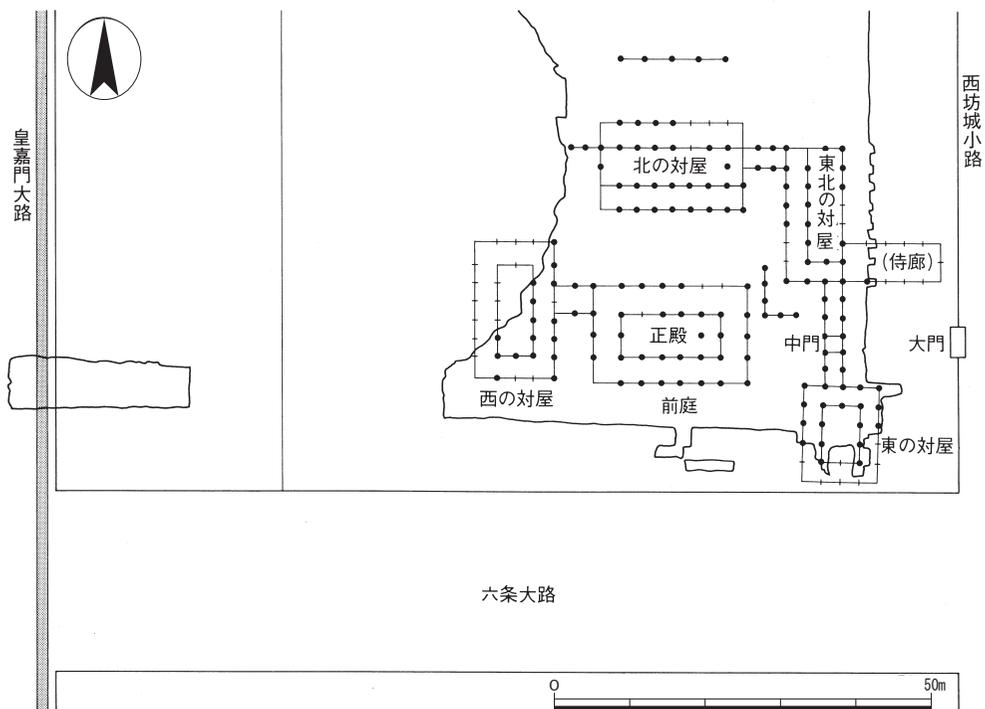


図 65 ハレの場の復元 (1:1,000)

ハレの場への入り口は、道路に開く大門（正門）の内に中門を設けるのが通例である。しかし、正殿の南は、六条大路との間に、わずかな前庭があるのみで、正殿の真南の六条大路に大門を仮定しても、中門がとれない。南に中門を想定できないとすれば、正殿の東にあり、東北の対屋と東の対屋の間を結ぶ6間の廊に中門を取り付けるのが自然である。しかも、この廊の西、正殿との間には、正殿方向から東北の対屋を遮断する目隠し塀21があり、正殿の母屋北柱筋の位置で、東に折れている。これを、廊19と正殿の間の往来に対する配慮とみれば、廊の北から3間目ないし4間目に中門を想定するのが自然である。大門は、この東の西坊城小路に面して開くであろう。

ホ ケの場

ハレの場は、その住宅の中でも対外的な場であり、絵巻物をはじめ各種の史料でおよその概要がわかっている。それに比べ、ケの場は、ハレの場を支える裏の場であり、それが表に出ることはなく、必然的にそれを語る史料もごく少ない（表18）。その中で、平安時代前期の同時代史料として、貞観15年（873）の「広隆寺資財帳」の政所町に所在する建物の記述は構造・規模・屋根材を記し貴重^{注8}である。

その記載は各種の倉・政所（まんどころ）・厨屋（くりや）・大炊屋（おおいや）・湯屋・廐屋（うまや）・門・客房の順序で、政所以下は、そのまま、ケの場での建物の格の序列を示すであろう。各種の倉が政所よりも先になっているのは、「資財帳」という史料の性格からくるものと思われ、また、客房は通常の宅のケの場では除外して良いであろう。この記述から、倉を1棟としても、6棟ほどがケの場にあったことになる。本遺跡では、実際8棟を数えるので、以上の各建物が存在したとみてよい。記述を参考とし、発見したケの場の建物名称の比定をあえて試み、ケの場を復元してみる（図66）。

もっとも重要な政所は、ケの場でもっとも格を整え、北の対屋のすぐ西北に位置する二面庇の建物01を当てる。これに次ぐ序列の厨屋・大炊屋は、広隆寺では庇を有するが、宅の主線に乗る建物09・04を当てる。建物09はその規模を確定していないが、宅の主線を建物の中心とみると、東西10間となり、広隆寺の厨屋11間に近い。次の序列の湯屋は、

	政所	納屋	食堂	厨屋	大炊屋	湯屋	白屋	稲屋	廐屋	牛屋	客房
広隆寺	7間			11間	5間	5間			5間		5間
観心寺			5間	6間	7間	3間	4間	6間	3間	3間	
神護寺	5間	6間	11間		6間						5間

表18 史料に見る政所町の建物の比較

東脇線にある建物 07 か建物 08 が考えられる。ケの場の東北隅にある建物 06 は廐屋か長倉に該当しそうである。これを長倉とみると、建物 08 を湯屋、建物 07 を廐屋とすることで、一応の整理は付くが、広隆寺の廐屋は底を持たない。廐屋の脇に井戸があるのもやや不自然である。建物 08・07 は湯屋を含む雑舎とする方が無難かもしれない。西北部にある規模の小さな建物 02・03 は倉である。内部に柱が立たないので、校倉造りではない。

このほか、建物 07 の東に井屋があり、主線の北延長上の楊梅小路面築地には、北門が開いていた形跡がある。

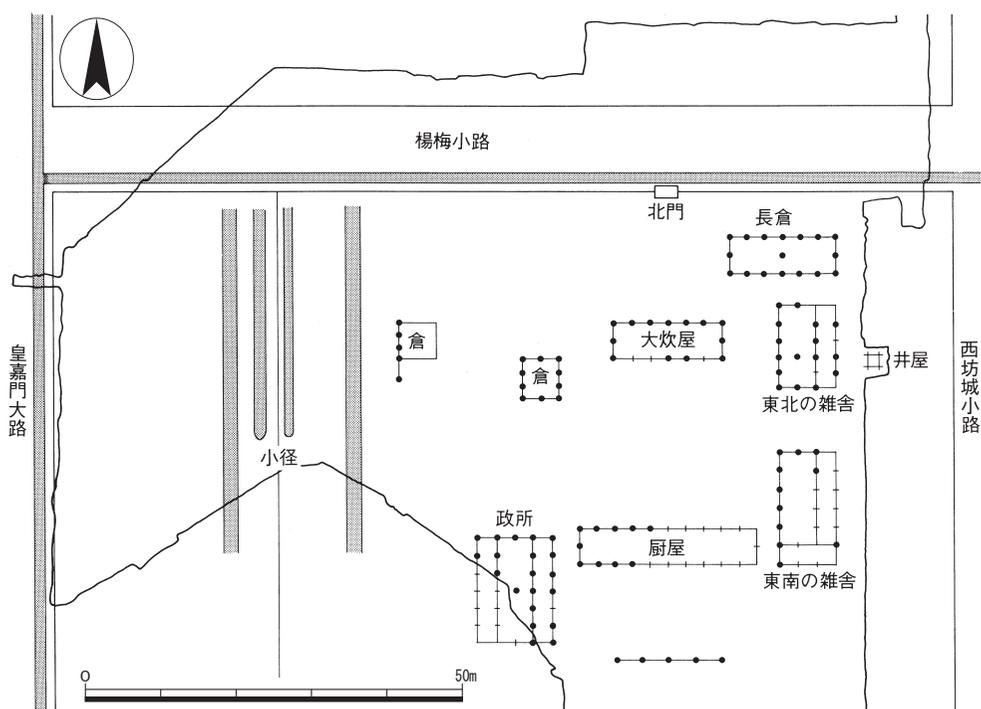


図 66 ケの場の復元 (1:1,000)

2 節 五町の景観・土地利用の復元

井戸や溝・湿地などのように、窪地であるところは水分が多く、植物の種や実・枝などのいわゆる植物遺体を良好に包含する。この土壌を採取・水洗し、その中から植物遺体を採取し、植物遺体の種類をⅢ章で同定した。この結果に基づき、植物の種類を生態学的な観点から分類し、当時の植生の復元を試みる。これは、土地の利用状態や景観の復元に有効である。

イ 景観の復元

植物が作り出す景観要素は木本によって決定される。従って、以下では木本を取り上げる。

木本はその種実が可食性のものと、不可食性のものがある。従って、可食性のものは、植栽、搬入のいずれとも決しえない。その場合は個々の状況によって植栽の可否を判断し、復元を試みる。

平安時代前期 絵巻物などにみる建物周辺の樹木で明らかに樹種を読み取れるのは、せいぜいマツ・サクラ・モミジなどである。

建物と重複する井戸 S013 から出土した木本種実にはモモ・センダンのみである。センダンは食品とはならないので、周辺に植栽されていたものと考えて良い。センダンは高木になり、樹形はよくないが、初夏に紫色の花を付ける。平安京からもっとも多く出土する木本の一つである。モモも花木として観賞の対象となる。出土木本の種類が少ないのは、井戸が建物内部に設置されたか、あるいは建物にきわめて近接した場所にあり、周辺に樹木が植栽される余地が少なかったことによると考える。

建物がなく、また、その部分を楊梅小路が走る北湿地付近では、木本は比較的变化にとみ、9種類を数える。草本の分析の結果ではこの付近は一部に滞水があるような状態であり、出土した木本の種実には、遠距離からの移動ではなく、付近に生育した木本によって供給されたものと考えられる。木本の内容は、マツ・カジノキ・サクラ・センダンなど庭園に普通に植栽するものをはじめ、イヌザンショウ・ブドウ属がある。この付近、特に皇嘉門大路寄りには木本の緑の豊富な場所であったろう。

平安時代末期・鎌倉時代 分析資料は井戸が中心である。草本の種実には比較的まとまっているのに対し、木本の出土はまったくないか、ごくわずかである。これは、井戸の周辺

には木本がもともと少なかった結果によると考える。希に低木を植栽したようで、井戸 C068 からはクワが出土している。

五町の中で井戸の配置がやや異なる井戸 R059 では、ほかの井戸とは樹木の構成が異なり、ヤマモモ・センダン・アカメガシワがみられる。この井戸の周囲は比較的植栽された樹木が多く、木陰などのできる景観であつたらしい。井戸 R059 の南西の濠 B016 の木本もセンダン・アカメガシワであり、同じ景観が考えられる。

ロ 土地利用の復元

土地の状態はそこに生育可能な草本を規定する。従って、そこから出土した草本種実は土地の狭い範囲の状況を反映しているとみることができる。出土した草本を植物の生態学的な特徴に基づいて主な生育場所ごとに分類すると、その種構成から環境や土地利用を復元することが可能である。草本を主として庭・畑に生育する耕地の雑草、主として道端・野原に生育する路傍の雑草、主として湿地・水辺に生育する水辺の雑草に 3 分類する。

平安京造営前 北湿地の上・下層の草花には栽培植物であるナス・ウリ・イネ・キビが含まれている。この内、ウリ・キビ・イネは上層よりも下層が出土地点数・量ともに多い。イネの上層と下層の出土状態からみると、上層の草本は下層の土層の攪拌による可能性が高い。下層の堆積時期である弥生時代後期・古墳時代初期に周辺で耕作が行われていたことは確実である。この層からは木製の鍬・鋤も出土しており、耕作の事実を裏付ける。

平安時代前期 建物と重複する井戸 S013 の分析結果では、草本の種実は栽培植物のナス・ウリが出土したのみであり、普通必ずみられる雑草の種実は皆無であった。従って、周辺がどのような状態であったかは草本からは不明である。しいていえば、雑草が生えにくいほど周辺の手入れが良かったと思われる。

楊梅小路を挟む北湿地付近の草本は湿地に生育する雑草が中心で、場所によっては水中で生育するヒルムシロがみられる。ウリ・ナスなどの野菜が五町内の北部で出土している。建物遺構の分布しないこの付近は、耕地として利用された空間もわずかながらあつたようである。

平安時代末期・鎌倉時代 井戸の草本の構成は井戸の場所によって若干の相違がある(表 19)。まず、西側の皇嘉門大路に面した建物に属するとみられる井戸(特に J040)には湿地に生育する草本の要素(ヒルムシロ・イボクサ・ミズアオイ・コナギ)がある。これは、北の楊梅小路に面した建物に付属するとみられる井戸(B082 や C068)にはないもの

である。西側の井戸はもともと南湿地の上に位置し、住まいの条件が悪かったことの現れといえる。湿地の要素は井戸の廃棄（住居の放棄）の直接の原因となったかもしれない。

北の楊梅小路に面した建物に属する井戸では1年草の出土割合が高く、しかも庭や畑などよく手入れされた場所に生育する草本が目立つ。楊梅小路に面した建物に属する井戸ではもっとも西寄りの井戸 A036 では多年草の出土率が高く、井戸の周囲の荒れ方がやや進行していたらしい。これは、井戸が北湿地に近いこととも関係するかもしれない。北側の井戸にも湿地の要素を示す草本はみられるが、井戸 J 040 にあるような抽水性の植物はみられず、常時水を扱う井戸という性格に付随した結果と考えたい。なお、井戸にはこれまでの分析でも例外なく栽培植物の種実が含まれている。それらが食品として可食部位が井戸の周辺で洗浄などのために取り扱われた結果であるのか、井戸の周囲が畑として利用されていた結果であるのか、この分析では不明である。ただ、雑草には庭や畑に生育する種類が多いこと、建物の裏側には野菜類を耕作しうる空き地が十分にあるのを指摘しておく。

五町の中で配置がほかとは異なる井戸 R059 も草本の基本的な構成は変化ない。草本の出土量が少なく、湿地の要素も少ないことから、この周辺は良く管理された場所であったと考える。

植生による分類	池 C004	← 井戸 →						濠・溝		
		湿地的 J040	J018	A036	B082	C068	乾地的 R059	B016	V008	
耕地の雑草	種類の数	4	5	5	7	7	7	5	5	5
	%	40.0	26.3	45.5	36.8	43.8	53.8	55.6	45.5	41.7
路傍の雑草	種類の数	—	3	—	4	1	1	1	1	1
	%	—	15.8	—	21.1	6.2	7.7	11.1	9.0	8.3
水辺の雑草	種類の数	6	11	6	8	8	5	3	5	6
	%	60.0	57.9	54.5	42.1	50.0	38.5	33.3	45.5	50.0
計 上段—下段	種類の数	10	19	11	19	16	13	9	11	12
	%	-20.0	-31.6	-10.0	-5.3	-7.2	+15.5	+22.3	+0.0	-8.3

表 19 雑草による環境要素の比率

3 節 平安時代末期の壁土

発掘調査で壁土が出土することは、建物の検出割合からすると非常に少ない。この原因は、壁土が火災などにより焼成を受けて土が少しでも焼け締まらないと土中で溶け、普通の状態では遺存しにくいかもしれない。鎌倉時代の濠 B016 から出土した壁土は、同時に出土した瓦から平安時代末期のものとわかる資料である。これについて、文献史料や京都市内のほかの遺跡から出土した壁土を参考にして、五町出土の壁土の意義を考察する。

イ 文献にみる壁土

平安時代の壁土については『延喜式』木工寮の土工条^{注9}により、土壁は下塗りと中塗りを行っていたことが知られる。また、土壁には割れを防ぐ目的ですさ(藁)を入れていた。壁土の上塗りである白壁は、材料として白土を用い、白土の混和・強化材として洗馬矢・粥汁を用いた。洗馬矢は馬糞を洗った残りの繊維質のことで、粥汁は米の糊のことである。

一方、『和名類聚抄』には壁の材料の中に石灰と白土の記載があり、当時、壁の上塗りである白壁に両者を用いたことがわかる。この史料には、石灰岩を焼成して得る石灰の精錬法も記載されている^{注10}。

平安時代後期、当代随一の蔵書家として有名な藤原頼長は、自邸内に文倉を建築するにあたり、四方の板壁の上に直接漆喰を塗り、しかも扉にまでカキの貝殻の灰を塗り込み、耐火構造にしたという^{注11}。下塗りをしなかったのは漆喰の剥落防止のためという。

このように、古代・中世には白壁に白土・漆喰壁があり、漆喰壁の原料として石灰岩と貝殻が利用されていたことがわかる。

ロ ほかの遺跡出土の壁土

壁土に漆喰を塗った例としては高松塚古墳の石室の壁画の壁が著名であり、この壁土は混入物の少ない純粋な漆喰壁である^{注12}。平安京やその周辺での平安時代もしくはそれ以前に遡る白壁を塗る壁土の出土はごく少なく、わずかに3遺跡を確認する。

北野廃寺出土の壁土(図 67 の 4) 壁土は北野廃寺の講堂とみられる建物の礎石抜き取り跡から出土したもので、7世紀に遡るとみられる資料である。壁土の大きさは7cm角までである。土壁の上に白壁が1層塗られている。白壁の厚さは3.7～7.5mmほどである。白壁は希塩酸に反応せず、白土である。白土には細かい砂、植物材料(すさ)が多量に入っ

ており、断面には空隙がみられる。すさの内容を顕微鏡で観察するとイネ科である。土壁の粒子は細かく、1mmほどの砂を含む。すさが多いという印象を受ける。

平安宮内裏出土の壁土（図67の5）内裏登華殿の東側のごみ処理の穴から出土した。^{注14}これは天徳4(960)年の内裏火災時のごみを投棄したものである。壁土の構造は、土壁の上に2層の白壁を塗ったものである。白壁は希塩酸に反応せず、漆喰ではなく白土（粘土）である。土壁と白壁の接着は大変良く、白壁は1層目（下塗り）が3.6mm、2層目（上塗り）が2.2mmである。白土は1層目が大変緻密で混和材はほとんど観察できない。2層目はかなりの量の混和材を認める。混和材はイネ科の茎と思われる。もっとも厚いところで、土壁の厚さは31mmある。土壁には、白壁にみられるものとは違う5cm近い長さのすさがみえる。混和する砂礫は10mm以上ある。

広隆寺弁天島経塚出土の壁土（図67の5）広隆寺の旧境内にある弁天島経塚の調査で出土した、平安時代後期の資料である。^{注15}経塚に埋納されていたもので、本来の使用状況は不明である。壁土は土壁と1層の白壁からなり、土壁は厚さが32.5mm、白壁は厚さが1.5～4.5mmである。土壁にはイネ科のすさがみられ、5mmぐらいの礫も入る。

ハ 五町の壁土の特徴

出土した壁土は白壁部分のみが遺存したもので、材料は漆喰である。漆喰の下の土壁は剥落しているが、漆喰の剥離面にはすさの痕跡が残っており、藤原頼長が行ったように板壁に漆喰を直接塗ったのではなく、土壁に塗ったことは間違いない。平安京やその周辺で出土したほかの壁土資料の上塗りがすべて白土を用いているのに対し、漆喰を用いている点に特色がある。

白壁には混和材として植物繊維を入れているが、前時代の白土にみられるほどの量ではない（図版62の5～8）。白壁に含まれる木炭片はc類に特に顕著であり（図版62の1～3）、a類・b類でもわずかに観察できる。c類では意図的に木炭を入れたものか、石灰の製造過程で多く入ったものかは不明である。

a類・b類では、混和・強化材に差はないものの、b類では表面に鉄錆が一部内部にまで浸透して付着している。鉄錆が付着した表面は非常に荒れており、一定の方向に走る繊維様の隆線がみえる（図67の2）。この原因について、壁土の内部観察では混和材として入れられた繊維に一定の方向性を持つことが明らかになっており、表面に繊維様にみえるのは、漆喰が風雨にさらされ、表面が空気中の二酸化炭素を含んだ弱酸性の雨水で溶け出

し、繊維が観察しやすくなった結果ではないかと推定する。その場合、酸化物が付着する b 類は建物外壁に用いたものであり、その痕跡がなく表面が滑らかな a 類は建物内壁に用いたものと考えられる。木炭粉の目立つ c 類は相対的に出土量が少なく、しかも酸化物の影響を受けていない。もし木炭粉が意図的に入れたものであれば、使用場所を考える上で有効な手がかりとなると思われる。

天元 5 年 (982) に著された池亭記によれば、慶滋保胤は邸内に持仏堂や書籍を納める小閣を建てたことが知れる。^{注16} さらに平安時代後期以降、石灰の生産量が増大し、仏寺の壁土に利用されたことが明らかになっている。^{注17} 出土した壁土から当地にも、漆喰壁を用いた持仏堂ないしは書庫様の建物が建てられたと推定する。

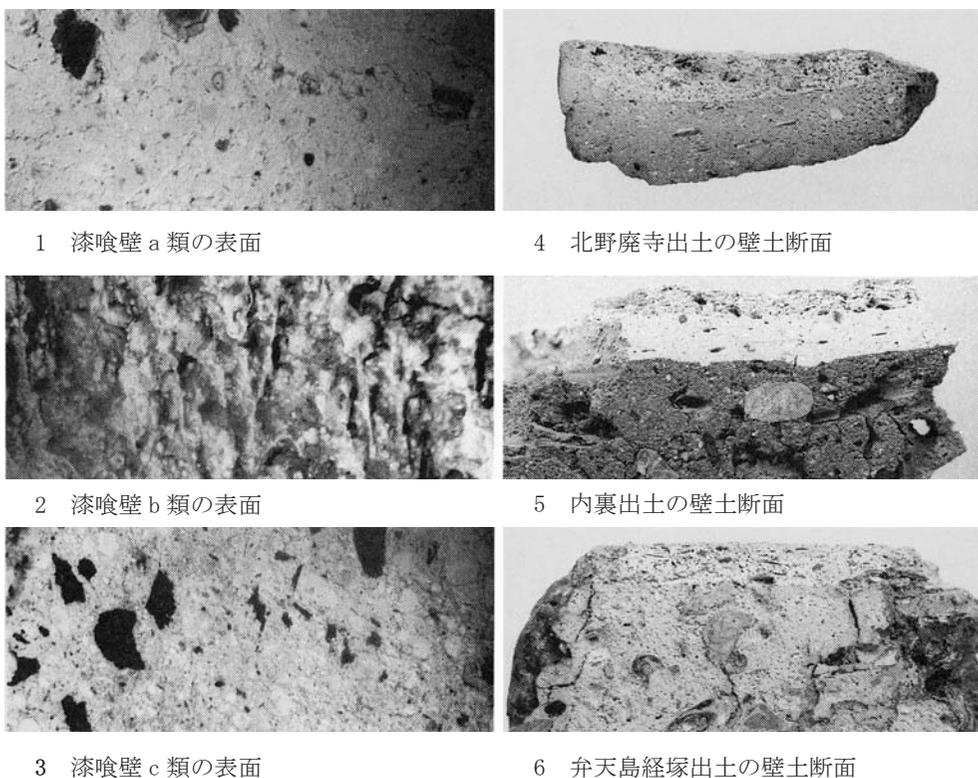


図 67 壁土の観察

- 注1 平安京の宅地班給基準に関する明確な史料はないが、難波京の三位以上1町以下、五位以上2分の1町以下、六位以下4分の1町以下、また藤原京の上戸1町、中戸2分の1町、下戸4分の1町の例から、平安京でも難波京に近い宅地班給基準であったとみるのが定説である。
- 注2 『延喜式』左右京職、「凡大路建門屋者。三位已上。及参議聽之。雖身薨卒。子孫居住之間亦聽。自余除非門屋不在制限。其城坊垣不聽開。」
- 注3 「右京二条三坊」（文献20）。
- 注4 「平安京右京八条二坊」（文献28）。
- 注5 『三代実録』貞観17年（875）正月28日条、「夜、冷然院火。延焼舎五十四宇。秘閣收藏図籍文書為灰燼。自余財宝無有子遺。」
- 注6 『薬師寺発掘調査報告』（文献50）。
- 注7 廊の南に取り付く東南の対屋は、左京五条三坊にあった菅原道真の書斎、山陰亭（またの名、龍門）が参考となる。『菅家文章』卷七「書斎記」。
- 注8 『平安遺文』168。
- 注9 『延喜式』木工寮、土工条、「方丈壁一間一重棧料楯三擔。藁三囲。縄七十五丈。編棧夫一人。塗工一人。夫二人。二重棧料楯四擔。藁四囲半（匳塗一囲半、中塗三囲）。縄一百丈。編棧夫一人。匳塗夫一人半。中塗工大半。夫一人小半。間度棧工一人。穿著廿枚。表塗料白土二石。洗馬矢一石。粥汁料白米二升。塗工大半。夫二人。」
- 注10 『和名類聚抄』居処部、「石灰、一名垂灰、燒青白石成熟、冷竟澆之、碎成灰也。」
- 注11 『台記』久安元年（1145）4月2日条、「四方皆拵之以板。其上塗石灰、其戸塗蠣灰、為不令剥落也。」
- 注12 「高松塚古墳壁画の顔料」（文献58）。
- 注13 『北野廃寺跡 ハイツねむの木建設に伴う発掘調査の概要』（文献10）。
- 注14 「平安宮内裏（Ⅰ）」（文献26）。
- 注15 「弁天島経塚」（文献5）。
- 注16 『池亭記』「池西置小堂安彌陀。池東開小閣納書籍。」
- 注17 『ものと人間の文化史 45 壁』（文献59）。

V章 結 語

1 廊のあるハレの部分

この遺跡から多数の建物跡が出土した。Ⅱ章3節でその総括をしている。完結したものもあれば、未完結のものもある。建物を復元し、それらの遺構で年代が似た時のものを、住宅の機能を想定し、それに合う建築遺構を判別した。

判別したことで重要なことは、この建物群の中に廊があることである。図17、表3にて示す廊17、廊25である。建物をつなぐ施設である。雨の日には両建物の間をわたる時は便利である。この種の建物を渡廊(わたどの)と呼ぶ。

この廊は、建物14(規模の点から、この住宅内では正殿とみる)とこれの北の建物11(正殿に対し、次の建物北の対になる)との間には作られていない。正殿と北の対が直接つながっていないことを知る。そのことは何を意味するのか。それは二つの建物の高さの差と考えた。どちらかが高床の建物で、ほかの方が平床の土間の建物であると考えた。

平床は、2種ある。土間と土間に転がし根太を使い板間にした場合とである。前者の方を、北の対であるとみた。それとみる理由は、母屋が、8間×2間で、その母屋の中に、作り付けの床机が置かれる。作り付けとは、床机の脚を地に埋めて固定するものである。昭和20年(1945)に奈良の薬師寺で、食堂とみる建物について、東へ接して僧坊のあることを発見した。その僧坊はおおむね、前室と中室・後室の3室を持つ房で構成され、その二間四方の中室に2間×1間の床机の柱痕跡がみられた。この中室は前室と同じ床高であることは境の扉装置から考察された。その前室の西壁にそって棚があったらしく、緑釉の段皿が散乱し、その棚は土間に直接置かれていて、床は土間であった。中室はその土間に床机の柱を掘立てに立てたのである。

それによって、寝起きする部屋とわかるところで掘立ての柱痕跡があれば、床は土間であるとみて誤りなく、ほかのものに考える余地はない。この北の対はその母屋の全面と背面に庇を設けている。それは切妻造りの建物であった。

その北の対から東に廊17が出ている。もとより、床は土間でつながるのであろう。つないだ、建物16も土間であるだろう。またこの建物から南に出る廊も土間である。南へ延びる途中で、中門を形成する部分があるとすると、この廊19は中門廊である。その先にも母屋2間×3間で四面に廂を持つ建物22がある。四面庇であるから土間とするよりも、

むしろ木材で組んだ根太の床であったと考えられよう。

一方、正殿とみる建物 14 は母屋 2 間×5 間で庇が四面に付く。この庇の 1 間の寸法は母屋 1 間の寸法より大である。それを側面からみた時、中央の間の 1 間より、脇の間の方が大である。この現象は平安時代より鎌倉時代まで、往々にみられるもので、平安建築の特徴でもある。高床の建築であるから四面に縁を廻らしていた。その縁を通し、ほかの建物にわたるのに廊がある。この廊はいわゆる渡廊と呼ぶもので、ここでは西の対にわたる。

結局、この邸宅は平床の廊でつらなる建物と高床の廊でつらなる建物の 2 群に分けたということであった。平床の場合は古式であって、北の対を中心としている。加えて、まったく廊というものを必要としないのか、発見例は少ない。対して高床の場合は相互に行きかう頻度の多い場合に使われるのであろうし、後代には普通に使われるのであるから、この場合は新式であったことになる。また平床からつなぐことがないのは当然なことになる。み方にもよるが、古式の方は北の対が中心であるから女性に、新式の方は男性のもので、主人を中心とする使い方でもあったのであろう。

次に建物 16 の使い方として、母屋の 2 間×6 間に西と南の二面に庇を持つことから東はどうなっているかと、調査区の東の隅を調査したが、それと見合うものはなかった。ただ、南の庇の東に柱穴があり、その柱間を梁として東西桁行の侍廊を考え、西坊城小路にそのあたりで大門を開き、さきの廊 19 に中門を設けたものとした。廊 19 の先に、先述の母屋 2 間×3 間に四面庇の建物（東の対屋）のあることを認めた。

2 ケの部分

この邸宅は、以上に述べたのが中心部分である。東西幅では、1 町の約 4 分の 3 あたりに南北中心線を通してることになる。それを南と北とに分けるかのように柵 27 がある。その柵はこの住居をハレとケとに分けるものとなる。

そのケの部分をさらに細分するような東西棟 2 間×10 間の建物 09 は西方部分がある程度に確認できるようであるが、はじめは柵として設けられたものかとも思う。ケの中でもハレに近い中間を含んでのことであった。その空間に、西に位置している建物 01 がある。南北棟母屋は 2 間×6 間で、東・西の二面に庇を持つ。附属屋としても格の高い建物で、この邸宅なり領地の事務を扱う政所とした。ハレとケの中間にある建物である。

さらに北の部分には、東方に寄せて、南北棟母屋 2 間×5 間で東面に庇のある建物があり、南北に並ぶ 2 棟の建物 07・08 はまったく同じではない点もあるが、性格的には同じである、

郎党達の屯する雑舎であったであろう。建物04の2間×6間の建物は、できて間もなく、南柱通りの位置を北通り柱筋とする建物05に建てかえられる。建物04・05も用途としては御厨子所（大炊屋）であったと考えた。なお、建物06は東西棟2間×6間である。庫の用に宛てられたかと思う。建物02は2間×3間の小さい建物で庫に使われたかと思うが、庫にしては広さがまったく足りないの、この程度の邸宅であるなら、炊事の火とは別に燈火の管理がなされていたとして、昼でも燈の種火が、絶えることなく管理されていた建物（火舎）と考えた。火はおろそかにできない。ましてや神にささげるものとして常に神聖に扱われなければならない。今の世では考えつかない扱いとして、この小さな建物が使われていたと考えて間違いはない。その跡をみつけたというべきであろう。

3 邸宅の周辺の部分

この邸宅が道路と直に接しているのは、南は六条大路、東は西坊城小路であるが、その築地塀を求めることは不可能であった。西はもとのガスタンクで壊されていたけれど、さらに皇嘉門大路があるとみて2箇所ばかりを選んで調査、大路の東側溝があった。北の楊梅小路は、調査地内にあるので、小路の南側溝と邸宅の門の位置を示すとみられる痕跡が認められた。

このような邸宅で空閑地がある時、その空閑地で稲を作ることは許されなかったが、湿地であれば、水葱、芹、蓮の類の栽培は許された（『続日本後紀』承和5年（838）7月1日条、『延喜式』巻4・12）。まぎらわしい水田でなければ、野菜類の栽培離されていたと考えた。

4 結 び

この遺跡は全体として、平安時代の初め頃のものとして遺物から推定できた。このようにまとまった住居跡の出土例は時代を越えてもきわめて少ない。この時代としては今の所まったくほかにみられない例であり、遺構の価値は高い。

床を張った建物と土間のままとが混在している。おそらくは、土間の屋が日本家屋として従来の形式を継ぐもので、高床の屋は後世において行われるものである。この高床の建物は、住居としてその中央部を占めることを意識した時と、さらに塗籠が従来の寝所としての使い方から、その家として重要な宝器を納め、またそれを継承する場所へと、生活の変化がもたらした時に、建物の床が土間から高床に転化して生まれたものであろう。

また屋敷において儀式の済んだ後に、アトラクションとしての舞楽が行われるようになって、南庭を広く取り、楽を特に舟にて行うようになって、前庭に池を必要とするようになる。発掘したこの邸宅は、それにいたらないまでの先（ブレ）寝殿造りというべきか。

文献リスト

- 1 伊藤 潔・鈴木久男・田辺昭三「下水道工事に伴う平安京跡の立会調査」(『論集 平安京研究』第2号所収 平安京調査会 1975)
- 2 泉 拓良「後期の土器 - 近畿の土器 -」(『縄文文化の研究 4 縄文土器Ⅱ』所収 雄山閣 1981)
- 3 出光美術館『出光美術館蔵品図録 中国陶磁』平凡社 1987
- 4 上原真人「古代末期における瓦生産体制の変革」(『古代研究』13・14 合併号所収 1978)
- 5 江谷 寛「弁天島経塚」(『日本考古学年報』30 所収 1977)
- 6 太田静六『寝殿造りの研究』1987
- 7 鎌木義昌・江坂 進「岡山縣御津町原遺跡」(『瀬戸内考古学2』所収 1958)
- 8 木村捷三郎「深草中学校出土の瓦」(『古瓦図考』所収 1989)
- 9 京都市『史料 京都の歴史 2 考古』平凡社 1983
- 10 財団法人京都市埋蔵文化財研究所『北野麩寺跡 ハイツねむの木建設に伴う発掘調査の概要』1977
- 11 財団法人京都市埋蔵文化財研究所『坂東善平収蔵品目録』1980
- 12 財団法人京都市埋蔵文化財研究所『平安京跡発掘資料選』1980
- 13 財団法人京都市埋蔵文化財研究所『六勝寺跡発掘調査概要』昭和55年度 1981
- 14 財団法人京都市埋蔵文化財研究所「左京二条二坊(2)」(『平安京跡発掘調査概報』昭和56年度所収 1982)
- 15 財団法人京都市埋蔵文化財研究所『平安京左京八条三坊』1982
- 16 財団法人京都市埋蔵文化財研究所『北野麩寺発掘調査概報』昭和57年度 1983
- 17 財団法人京都市埋蔵文化財研究所『北野麩寺発掘調査報告書』1983
- 18 財団法人京都市埋蔵文化財研究所『昭和57年度京都市埋蔵文化財調査概要』1984
- 19 財団法人京都市埋蔵文化財研究所『平安京跡発掘調査概要』昭和58年度 1984
- 20 財団法人京都市埋蔵文化財研究所「右京二条三坊」(『平安京跡発掘調査概報』昭和59年度所収 1985)
- 21 財団法人京都市埋蔵文化財研究所『昭和58年度京都市埋蔵文化財調査概要』1985
- 22 財団法人京都市埋蔵文化財研究所『栗栖野瓦窯跡発掘調査概報 昭和60年度』1986

- 23 財団法人京都市埋蔵文化財研究所『平安京跡発掘資料選』（二） 1986
- 24 財団法人京都市埋蔵文化財研究所『昭和 59 年度京都市埋蔵文化財調査概要』 1987
- 25 財団法人京都市埋蔵文化財研究所『昭和 60 年度京都市埋蔵文化財調査概要』 1988
- 26 財団法人京都市埋蔵文化財研究所「平安宮内裏（Ⅰ）」（『平安京跡発掘調査概報』昭和 62 年度所収 1988）
- 27 財団法人京都市埋蔵文化財研究所『六勝寺発掘調査概報 1987』 1988
- 28 財団法人京都市埋蔵文化財研究所「平安京右京八条二坊」（『平安京跡発掘調査概報』昭和 63 年度所収 1989）
- 29 財団法人京都市埋蔵文化財研究所『植物園北遺跡発掘調査概報 平成元年度』 1990
- 30 財団法人京都市埋蔵文化財研究所『鳥羽離宮跡発掘調査概報 平成元年度』 1990
- 31 財団法人京都市埋蔵文化財研究所『平安京右京三条三坊』 1990
- 32 財団法人京都市埋蔵文化財研究所「室町殿跡隣接地（RH18）」（『京都市内遺跡試掘立会調査概報』平成元年度所収 1990）
- 33 京都大学農学部構内遺跡調査会『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和 51 年度 1977
- 34 京都大学埋蔵文化財研究センター『京都大学埋蔵文化財調査報告 第 1 冊 京大農学部遺跡 BG36 区』 1978
- 35 京都大学埋蔵文化財研究センター『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和 55 年度 1981
- 36 京都府教育委員会「平安京跡（右京一条三坊九町）昭和 54 年度発掘調査概報」（『埋蔵文化財発掘調査概報』第 3 分冊所収 1980）
- 37 京都府教育委員会「平安京跡（右京一条三坊九・十町）昭和 55 年度発掘調査概報」（『埋蔵文化財発掘調査概報』第 1 分冊所収 1981）
- 38 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター「広隆寺跡」（『京都府遺跡調査概報』第 3 冊（1982）所収 1982）
- 39 近畿大学理工学部建築学科杉山研究室「東寺境内発掘調査概報」（『教王護国寺防災施設工事・発掘調査報告書』所収 1983）
- 40 湖西線関係遺跡調査団『湖西線関係遺跡調査報告書』滋賀県教育委員会 1973
- 41 財団法人古代学協会『西賀茂瓦窯跡』平安京跡研究調査報告第 4 輯 1978
- 42 財団法人古代学協会『平安京左京三条三坊十一町』 1984

- 43 財団法人古代学協会『平安京左京六条二坊六町』 1986
- 44 後藤茂徳編『世界陶磁全集 2 日本古代』小学館 1979
- 45 千葉地遺跡調査団『千葉地遺跡』 1982
- 46 鳥羽離宮跡調査研究所「住宅公団花園鷹司団地建設敷地内埋蔵文化財発掘調査概報」
(『埋蔵文化財発掘調査概報集 1976』所収 1976)
- 47 鳥羽離宮跡調査研究所『史跡西寺跡』、1979
- 48 奈良国立文化財研究所『平城宮出土軒瓦型式一覽』 1978
- 49 奈良国立文化財研究所『木器集成図録』近畿古代編 1985
- 50 奈良国立文化財研究所『薬師寺発掘調査報告』 1987
- 51 日本建築学会編『日本建築史図集』彰国社 1949
- 52 平安京調査会『平安京跡発掘調査報告 - 左京四条一坊 -』 1975
- 53 平安博物館編『平安京古瓦図録』雄山閣 1977
- 54 法住寺殿遺跡調査会『大谷中・高等学校内遺跡発掘調査報告書』 1984
- 55 向日市教育委員会『長岡京古瓦聚成』 1987
- 56 家根祥多「晩期の土器 - 近畿地方の土器 -」(『縄文文化の研究 4 縄文土器Ⅱ』
所収 雄山閣 1981)
- 57 家根祥多「縄文土器」『長原遺跡発掘調査報告Ⅱ』 1982
- 58 山崎一雄「高松塚古墳壁画の顔料」(『古文化財の科学』所収 思文閣出版 1987)
- 59 山田幸一『ものと人間の文化史 45 壁』法政大学出版局 1981

遺物リスト

(遺構名がないものは、近現代の攪乱に混入して出土したものである。)

遺物番号	掲載図	種類	形態	遺構名	遺構番号	地区名	層位
001	図 29	土師器	椀	土器溜	F31U061	F31U UD	
002	図 29	土師器	杯	土器溜	F31U061	F31U UD	
003	図 29	土師器	皿	北湿地		E35Y XW	1層
004	図 29	土師器	杯蓋	溝	F31U062	F31U UD	
005	図 29	土師器	杯	土器溜	F31U059	F31U UE	東半分
006	図 29	土師器	高杯	井戸	F41S013	F41S TS	枠内
007	図 29	土師器	短頸壺	土器溜	F31U060	F31U UE	
008	図 29	土師器	甕	溝	F41A009	F41A AE	
009	図 30	須恵器	皿	溝	F41A009	F41A BE	
010	図 30	須恵器	皿	溝	F31R018	F31R TM	
011	図 30	須恵器	杯	土器溜	F410019	F41N NT	2層
012	図 30	須恵器	杯蓋			E45Y XY	1層
013	図 30	須恵器	杯	溝	F31Y035	F31Y XU・WU	
014	図 30	須恵器	鉢	溝	F31V019	F31W XM	
015	図 30	須恵器	平瓶	建物	F41M055	F41M KL	
016	図 30	須恵器	瓶子	井戸	F41E005	F41E DV・EV	枠内
017	図 30	須恵器	壺			F31U	掘削時
018	図 30	須恵器	瓶	土器溜	F31U058	F31U UD	湿地上面
019	図 30	須恵器	甕	北湿地		F31U VE	1層最上部
020	図 31	黒色土器	皿	北湿地		F31U UD	1層最上部
021	図 31	黒色土器	杯	土器溜	F31U060	F31U UE	
022	図 31	黒色土器	甕	土器溜	F31U058	F31U UD	
023	図 32	緑釉陶器	皿	溝	F31V008	F31U VA	2層
024	図 32	緑釉陶器	椀	井戸	F41S013	F41S TS	枠内
025	図 33	灰釉陶器	皿	井戸	F41S013	F41S TS	枠内
026	図 33	灰釉陶器	椀	井戸	F41S013	F41S TS	枠内
027	図 33	灰釉陶器	瓶子	井戸	F41E005	F41E DV・EV	枠内
028	図 33	白色無釉陶器	椀	井戸	F41E005	F41E DV・EV	
029	図 34	白磁	椀	土器溜	F410019	F410 NU	2層
030	図 34	白磁	椀	井戸	F41E005	F41E DV・EV	井戸枠内
031	図 34	白磁	皿		F51D015	F51D AR・BR・AQ・BQ	
032	図 34	青磁	合子蓋			F41W VM	清掃時
033	図 34	青磁	合子身	溝	F31R026	F31R SM	
034	図 34	青磁	椀	井戸	F41E005	F41E DV・EV	枠内
035	図 34	青磁	椀		F31W063	F31W WN	
036	図 34	青磁	椀	溝	F31U062	F31U UC	
037	図 34	青磁	椀		F31S014	F31S TS・TT	
038	図 34	青磁	鉢	建物	F41R002	F41R SM	
039	図 34	青磁	壺蓋	北湿地		F31U UB	1層最上部
040	図 34	青磁	皿	溝	F31Y018	F31Y VX・VW	下層
041	図 34	青磁	皿		F41M030	F41M OK	
042	図 34	青磁	椀		F31W061	F31W WO・O	

遺物番号	掲載図	種類	形態	遺構名	遺構番号	地区名	層位
043	図 34	青磁	椀			F41H	掘削後清掃時
044	図 34	青磁	椀		F31W008	F31W WL・XL	
045	図 36	土師器	椀	井戸	F31U057	F31U UD・UE	
046	図 36	土師器	椀	井戸	F31U057	F31U UD・UE	
047	図 36	土師器	椀	井戸	F31U057	F31U UD・UE	
048	図 36	土師器	杯	井戸	F31U057	F31U UD・UE	
049	図 36	土師器	杯	井戸	F31U057	F31U UD	湿地上面
050	図 36	土師器	椀	建物	F41E012	F41E DU	
051	図 36	土師器	杯	建物	F41I042	F41I GP	
052	図 36	土師器	杯	建物	F41X064	F41X XP	
053	図 36	土師器	杯	建物	F41W044	F41W XM	
054	図 36	須恵器	杯蓋	建物	F41M027	F41M NK	
055	図 36	須恵器	杯	建物	F41W044	F41W XM	
056	図 36	須恵器	杯	攪乱		E35Y	
057	図 36	須恵器	杯蓋	北湿地		F31V UI	最上部？
058	図 36	緑釉陶器	椀	建物	F41W044	F41W XM	
059	図 37	土師器	椀	溝	F31U062	F31U UD	
060	図 37	土師器	椀	溝	F31U062	F31U UD	
061	図 37	土師器	椀	溝	F31U062	F31U UC	
062	図 37	土師器	杯	溝	F31U062	F31U UD	
063	図 37	土師器	杯	溝	F31U062	F31U UD	
064	図 37	土師器	皿	溝	F31U062	F31U UD	
065	図 37	土師器	皿	溝	F31U062	F31U UD	
066	図 37	土師器	皿	溝	F31U062	F31U UC	
067	図 37	土師器	杯	溝	F31U062	F31U UD	
068	図 37	緑釉陶器	椀	溝	F31U062	F31U UC	
069	図 37	土師器	椀	溝	F31U062	F31U UA	
070	図 37	須恵器	杯	溝	F31U062	F31U UC	
071	図 37	須恵器	皿	溝	F31U062	F31U UE	
072	図 37	須恵器	瓶子	溝	F31U062	F31U UB	
073	図 37	土師器	椀	井戸	F41E005	F41E DV・EV	枠内
074	図 37	土師器	椀	井戸	F41E005	F41E DV・EV	枠内
075	図 37	土師器	椀	井戸	F41E005	F41E DV・EV	枠内
076	図 37	土師器	杯	井戸	F41E005	F41E DV・EV	枠内
077	図 37	土師器	杯	井戸	F41E005	F41E DV・EV	枠内
078	図 37	土師器	皿	井戸	F41E005	F41E DV・EV	枠内
079	図 37	土師器	椀	井戸	F41E005	F41E DV・EV	枠内
080	図 37	土師器	杯	井戸	F41E005	F41E DV・EV	枠内
081	図 37	土師器	杯	井戸	F41E005	F41E DV・EV	枠内 3層
082	図 37	黒色土器	甕	井戸	F41E005	F41E DV・EV	枠内
083	図 37	黒色土器	椀	井戸	F41E005	F41E DV・EV	枠内
084	図 37	黒色土器	椀	井戸	F41E005	F41E DV・EV	

遺物番号	掲載図	種類	形態	遺構名	遺構番号	地区名	層位
085	図 37	緑釉陶器	椀	井戸	F41E005	F41E DV・EV	1層
086	図 37	緑釉陶器	皿	井戸	F41E005	F41E DV・EV	
087	図 37	緑釉陶器	椀	井戸	F41E005	F41E DV・EV	
088	図 37	緑釉陶器	椀	井戸	F41E005	F41E DV・EV	
089	図 37	緑釉陶器	椀	井戸	F41E005	F41E DV・EV	枳内
090	図 37	灰釉陶器	椀	井戸	F41E005	F41E DV・EV	枳内
091	図 37	灰釉陶器	椀	井戸	F41E005	F41E DV・EV	
092	図 37	灰釉陶器	椀	井戸	F41E005	F41E DV・EV	枳内
093	図 37	須恵器	杯	井戸	F41E005	F41E DV・EV	
094	図 37	須恵器	鉢	井戸	F41E005	F41E DV・EV	枳内
095	図 37	須恵器	壺	井戸	F41E005	F41E DV・EV	1層
096	図 37	須恵器	壺	井戸	F41E005	F41E DV・EV	枳内
097	図 37	須恵器	瓶子	井戸	F41E005	F41E DV・EV	
098	図 37	須恵器	瓶子	井戸	F41E005	F41E DV・EV	
099	図 37	須恵器	瓶子	井戸	F41E005	F41E DV・EV	枳内
100	図 38	土師器	皿	溝	F31V008	F31X VR	2層
101	図 38	土師器	皿	溝	F31V008	F31W VL	2層
102	図 38	土師器	杯	溝	F31V008	F31V VF	2層
103	図 38	陶器	皿		F41B104	F41B DI	
104	図 38	陶器	椀	溝	F41F040	F41F HD	1層
105	図 38	陶器	鉢		F31V055	F31V WJ	
106	図 39	瓦器	皿	溝	F31V008	F31V VJ	1層
107	図 39	瓦器	椀	南湿地		E45J JW	2層
108	図 39	瓦器	杯	北湿地		E35Y XX	1層
109	図 40	瓦器	鍋	溝	F31V008	F31U VC	1層
110	図 40	瓦器	火鉢	井戸	F41C068	F41C CN	2層
111	図 40	瓦器	釜	井戸	E45J018	E45J JX	
112	図 41	白磁	皿		F41H054	F41H FM~FO・GM~GO	
113	図 41	白磁	皿		F41B027	F41B CI	
114	図 41	白磁	皿	井戸	F41R059	F41R PN	枳内青灰色泥土
115	図 41	白磁	皿		F31S017	F31S TR・TS	
116	図 41	白磁	椀	溝	F31V008	F3X VS	2層
117	図 41	白磁	椀	溝	F31V008	F31W VL	3層
118	図 41	白磁	椀		F51D015	F41X WR	
119	図 42	青磁	皿	溝	E45D001	E45D BS	3層
120	図 42	青磁	皿	池	F51C004	F41X YP	
121	図 42	青磁	椀		F31T080	F31T SU	
122	図 42	青磁	椀		F31W066	F31W WM・VM	北半部
123	図 42	青磁	椀		F31W065	F31W WM・VM	
124	図 43	青白磁	合子蓋	溝	F41F040	F41G HH	1層
125	図 43	青白磁	合子蓋		F41A008	F41A BD	
126	図 43	青白磁	合子身	井戸	F41A036	F41A AC	枳内

遺物番号	掲載図	種類	形態	遺構名	遺構番号	地区名	層位
127	図 43	青白磁	小壺		F41M085	F41R PN	
128	図 43	青白磁	小壺		F41H046	F41H HM・HN・HO	
129	図 43	白磁	小椀		F41D003	F41D ET	
130	図 43	白磁	椀		F51D015	F41X WR	
131	図 43	白釉陶器	水注	池	F51C004	F51D AP	
132	図 43	緑釉陶器	壺		F31R043	F31R SN・SO	北半部 B
133	図 43	褐釉陶器	壺	池	F51C004	F41X YP	
134	図 43	褐釉陶器	壺		F31X054	F31X VP・UP	
135	図 43	緑釉陶器	壺	溝	F31V008	F31V VI	1層
136	図 43	黄釉陶器	鉢	溝	F31V008	F31V VJ	2層
137	図 43	緑釉陶器	鉢	溝	F31V008	F31V VJ	1層
138	図 44	土師器	皿	井戸	E45J018	E45J JX	
139	図 44	土師器	皿	井戸	E45J018	E45J JX	
140	図 44	土師器	皿	井戸	E45J018	E45J JX	
141	図 44	土師器	皿	井戸	E45J018	E45J JX	
142	図 44	土師器	皿	井戸	E45J018	E45J JX	
143	図 44	土師器	皿	井戸	E45J018	E45J JX	
144	図 44	土師器	皿	井戸	E45J018	E45J JX	上層
145	図 44	土師器	皿	井戸	E45J018	E45J JX	
146	図 44	土師器	皿	井戸	E45J018	E45J JX	2層
147	図 44	土師器	皿	井戸	E45J018	E45J JX	
148	図 44	土師器	皿	井戸	E45J018	E45J JX	
149	図 44	土師器	皿	井戸	E45J018	E45J JX	
150	図 44	土師器	杯	井戸	E45J018	E45J JX	
151	図 44	土師器	杯	井戸	E45J018	E45J JX	
152	図 44	土師器	杯	井戸	E45J018	E45J JX	
153	図 44	土師器	杯	井戸	E45J018	E45J JX	
154	図 44	土師器	皿	井戸	F41R059	F41R PM・PN	粹内褐色砂泥
155	図 44	土師器	皿	井戸	F41R059	F41R PN	粹内青灰色泥土
156	図 44	土師器	皿	井戸	F41R059	F41R PN	粹内青灰色泥土
157	図 44	土師器	杯	井戸	F41R059	F41R PM・PN	粹内青灰色泥土
158	図 44	土師器	杯	井戸	F41R059	F41R PN	粹内青灰色泥土
159	図 44	瓦器	椀	井戸	F41R059	F41R PN	粹内青灰色泥土
160	図 44	土師器	杯	土壇	F31T066	F31T SU・TU	
161	図 44	土師器	皿	土壇	F31T066	F31T SU・TU	
162	図 44	土師器	皿	土壇	F31T066	F31T SU・TU	
163	図 44	土師器	皿	土壇	F31T066	F31T SU・TU	
164	図 44	土師器	皿	方形土壇	F41N011	F41H JO・JP	
165	図 44	土師器	杯	方形土壇	F41N011	F41H JN	2層
166	図 44	土師器	杯	方形土壇	F41N011	F41H JO	2層
167	図 44	土師器	杯	方形土壇	F41N011	F41H JN	2層
168	図 44	陶器	鉢	井戸	F41C068	F41C CN	2層

遺物番号	掲載図	種類	形態	遺構名	遺構番号	地区名		層位
169	図44	瓦器	火鉢	井戸	F41C068	F41C	CN	2層
170	図44	陶器	椀	井戸	F41C068	F41C	CN	2層
171	図44	陶器	椀	井戸	F41C068	F41C	CN	1層
172	図44	瓦器	火鉢	井戸	F41C068	F41C	CN	2層
173	図44	陶器	甕	井戸	F41C068	F41C	CN	2層
174	図45	土師器	皿	建物	F31S039	F31S	TP	
175	図45	土師器	皿	建物	F31S039	F31S	TP	
176	図45	土師器	皿	建物	F41B062	F41B	AF	
177	図45	土師器	皿	建物	F41B062	F41B	AF	
178	図45	土師器	皿	建物	F31T104	F31T	TV	
179	図45	土師器	皿	建物	F31T104	F31T	TV	
180	図45	土師器	皿	建物	F41D145	F41D	BQ	
181	図45	土師器	皿	建物	F41C046	F41C	A0	
182	図45	瓦器	椀	建物	F41C045	F41C	A0	
183	図45	瓦器	椀	建物	F41C045	F41C	A0	
184	図45	土師器	皿	土壌	F41B103	F41B	DI	
185	図45	土師器	皿	土壌	F41B103	F41B	DI	
186	図45	土師器	皿	土壌	F41B103	F41B	DI	
187	図45	土師器	皿	土壌	F41B103	F41B	DI	
188	図45	土師器	皿	土壌	F41B103	F41B	DI	
189	図45	土師器	皿	土壌	F41B103	F41B	DI	
190	図45	土師器	皿	土壌	F41B103	F41B	DI	
191	図45	土師器	杯	土壌	F41B103	F41B	DI	
192	図45	土師器	杯	土壌	F41B103	F41B	DI	
193	図45	土師器	杯	土壌	F41B103	F41B	DI	
194	図45	土師器	杯	土壌	F41B103	F41B	DI	
195	図45	土師器	杯	土壌	F41B103	F41B	DI	
196	図45	土師器	皿	溝	F41F040	F41F	HE	1層
197	図45	土師器	皿	溝	F41F040	F41F	HE	1層
198	図45	土師器	皿	溝	F41F040	F41F	HE	1層
199	図45	土師器	皿	溝	F41F040	F41F	HE	1層
200	図45	土師器	杯	溝	F41F040	F41F	HD	2層
201	図45	土師器	杯	溝	F41F040	F41H	HK	1層
202	図45	土師器	杯	溝	F41F040	F41G	HF	2層
203	図45	土師器	皿	土壌	F31X061	F31X	XO	
204	図45	土師器	皿	土壌	F31X061	F31X	XP	
205	図45	土師器	皿	土壌	F31X061	F31X	XO	
206	図45	土師器	杯	土壌	F31X061	F31X	XO	
207	図45	土師器	杯	土壌	F31X061	F31X	XO	
208	図45	土師器	皿	井戸	F41B082	F41B	DF・EF	枠内下層
209	図45	土師器	皿	井戸	F41B082	F41B	DF・EF	下層
210	図45	土師器	皿	井戸	F41B082	F41B	DF・EF	枠内下層

遺物番号	掲載図	種類	形態	遺構名	遺構番号	地区名	層位
211	図 45	土師器	皿	井戸	F41B082	F41B DF・EF	下層
212	図 45	土師器	杯	井戸	F41B082	F41B DF・EF	枠内下層
213	図 45	土師器	皿	池	F51C004	F51D AP	
214	図 45	土師器	皿	池	F51C004	F51C AL	
215	図 45	土師器	皿	池	F51C004	F41X YP	
216	図 45	土師器	皿	池	F51C004	F51D AP	
217	図 45	土師器	皿	池	F51C004	F51D AQ	
218	図 45	土師器	皿	池	F51C004	F51C AO	2層
219	図 45	土師器	皿	池	F51C004	F41X YP	
220	図 45	土師器	皿	池	F51C004	F51D AP	
221	図 45	土師器	杯	池	F51C004	F51D AP	
222	図 45	土師器	杯	池	F51C004	F51D AP	
223	図 45	土師器	杯	池	F51C004	F51C AL	
224	図 45	土師器	杯	池	F51C004	F51D AP	
225	図 45	土師器	杯	池	F51C004	F51D AP	
226	図 45	土師器	杯	池	F51C004	F51D AP	
227	図 45	土師器	杯	池	F51C004	F41X YP	
228	図 45	土師器	皿	池	F51C004	F51D AP	
229	図 45	陶器	鉢	池	F51C004	F51D AP・AQ	
230	図 46	土師器	皿	井戸	E45J040	E45J FX	3層
231	図 46	土師器	皿	井戸	E45J040	E45J FX	1層
232	図 46	土師器	皿	井戸	E45J040	E45J FX	1層
233	図 46	土師器	皿	井戸	E45J040	E45J FX	2層
234	図 46	土師器	皿	井戸	E45J040	E45J FX	
235	図 46	土師器	皿	井戸	E45J040	E45J FX	
236	図 46	土師器	皿	井戸	E45J040	E45J FX	2層
237	図 46	土師器	皿	井戸	E45J040	E45J FX	2層
238	図 46	土師器	皿	井戸	E45J040	E45J FX	3層
239	図 46	土師器	皿	井戸	E45J040	E45J FX	2層
240	図 46	土師器	皿	井戸	E45J040	E45J FX	
241	図 46	土師器	皿	井戸	E45J040	E45J FX	2層
242	図 46	土師器	皿	井戸	E45J040	E45J FX	
243	図 46	土師器	皿	井戸	E45J040	E45J FX	
244	図 46	土師器	皿	井戸	E45J040	E45J FX	
245	図 46	土師器	杯	井戸	E45J040	E45J FX	
246	図 46	土師器	杯	井戸	E45J040	E45J FX	3層
247	図 46	土師器	杯	井戸	E45J040	E45J FX	2層
248	図 46	土師器	杯	井戸	E45J040	E45J FX	3層
249	図 46	土師器	杯	井戸	E45J040	E45J FX	
250	図 46	土師器	杯	井戸	E45J040	E45J FX	2層
251	図 46	土師器	杯	井戸	E45J040	E45J FX	
252	図 46	土師器	皿	方形土壇	E45J042	E45J FX・GX・FY・GY	

遺物番号	掲載図	種類	形態	遺構名	遺構番号	地区名	層位
253	図46	土師器	皿	方形土壇	E45J042	E45J FX・GX・FY・GY	
254	図46	瓦器	椀	方形土壇	E45J042	E45J FX・GX・FY・GY	
255	図46	土師器	杯	井戸	E45J040	E45J FX	1層
256	図46	土師器	杯	方形土壇	E45J042	E45J FX・GX・FY・GY	
257	図46	土師器	杯	方形土壇	E45J042	E45J FX・GX・FY・GY	
258	図46	土師器	杯	方形土壇	E45J042	E45J FX・GX・FY・GY	
259	図46	土師器	杯	方形土壇	E45J042	E45J FX・GX・FY・GY	
260	図46	土師器	杯	方形土壇	E45J042	E45J FX・GX・FY・GY	
261	図46	土師器	皿	溝	F31V008	F31W VL	3層
262	図46	土師器	皿	溝	F31V008	F31U VD	2層
263	図46	土師器	皿	溝	F31V008	F31U VE	2層
264	図46	土師器	皿	溝	F31V008	F31U VC	2層
265	図46	土師器	皿	溝	F31V008	F31V VI	2層
266	図46	土師器	皿	溝	F31V008	F31U VC	1層
267	図46	土師器	皿	溝	F31V008	F31V VI	
268	図46	土師器	皿	溝	F31V008	F31W VO	2層
269	図46	土師器	杯	溝	F31V008	F31W VL	2層
270	図46	土師器	杯	溝	F31V008	F31W VL	2層
271	図46	土師器	杯	溝	F31V008	F31W VO	
272	図46	土師器	杯	溝	F31V008	F31W VO	
273	図46	土師器	杯	溝	F31V008	F31V VJ	2層
274	図46	土師器	杯	溝	F31V008	F31V VJ	1層
275	図46	土師器	杯	溝	F31V008	F31V VJ	3層
276	図46	土師器	杯	溝	F31V008	F31W VO	2層
277	図46	土師器	杯	溝	F31V008	F31X VP	1層
278	図46	土師器	杯	溝	F31V008	F31W VK	1層
279	図46	瓦器	椀	溝	F31V008	F31X VT	1層
280	図46	瓦器	椀	溝	F31V008	F31W VL	3層
281	図46	陶器	椀	溝	F31V008	F31W VM	2層
282	図46	陶器	椀	溝	F31V008	F31W VL	2層
283	図46	白磁	皿	溝	F31V008	F31U VA	1層
284	図46	陶器	甕	溝	F31V008	F31V VJ	3層
285	図47	瓦	平	井戸	F41C068	F41C CN	2層
286	図47	瓦	平	池	F51C004	F51C AL	
287	図47	瓦	平	井戸	F41C068	F41C CN	2層
288	図47	瓦	平	溝	F31V008	F31V VI	
289	図47	瓦	平	井戸	F41C068	F41C CN	2層
290	図47	瓦	平	井戸	F41R059	F41R PN	掘形2層
291	図47	瓦	平	溝	E55D009	E55D AS	上層
292	図47	瓦	平	北湿地		E45E AX	1層
293	図48	瓦	軒丸	池	F51C004	F41X YP	
294	図48	瓦	軒丸		F31V024	F31V YF	

遺物番号	掲載図	種類	形態	遺構名	遺構番号	地区名	層位
295	図48・51	瓦	軒平	濠	F51B016	F41V YH・YI	2層
296	図49 図版23	瓦	軒平	瓦溜	F31R002	F31R TL	
297	図49・51 図版23	瓦	軒平	溝	F31Y018	F31Y VW・VX	上・下層
298	図49 図版23	瓦	軒平	瓦溜	F31R002	F31R TL	
299	図49 図版23	瓦	軒平	瓦溜	F31R002	F31R TL	
300	図49 図版23	瓦	軒平	瓦溜	F31R002	F31R TL	
301	図49 図版23	瓦	軒平	瓦溜	F31R002	F31R TL	
302	図51	瓦	丸	濠	F51B016	F41V YH・YI	1層
303	図51	瓦	丸	濠	F51B016	F41V YH・YI	2層
304	図51	瓦	丸	濠	F51B016	F41V YH・YI	2層
305	図51	瓦	平	濠	F51B016	F41V YH	2層
306	図51	瓦	平	濠	F51B016	F41V YH	2層
307	図51	瓦	平	濠	F51B016	F41V YI	2層
308	図51	瓦	平	濠	F51B016	F41V YH	2層
309	図51	瓦	軒平	濠	F51B016	F41V YH	2層
310	図51	瓦	丸	土器溜	F31U059	F31U UD・UE	湿地上面
311	図51	瓦	丸	瓦溜	F31R002	F31R TL	
312	図51	瓦	丸		F31V012	F31V VI・VJ・WI	
313	図51	瓦	丸	瓦溜	F31R002	F31R TL	
314	図51	瓦	丸	溝	F31V008	F31V VJ	1層
315	図51	瓦	平	池	F51C004	F51D AP	
316	図51	瓦	軒平	池	F51C004	F51D AP	
317	図51	瓦	平		F31V055	F31V WJ	
318	図51	瓦	丸		F31V012	F31V VI・VJ・WI	
319	図51	瓦	丸		F31V055	F31V WJ	
320	図51	瓦	丸		F31R043	F31R TN	南半部
321	図51	瓦	平	溝	F31V008	F31U VA	1層
322	図51	瓦	平	南湿地		E45E EU	5層 焼土混
323	図52		石帯		F31R038	F31R TM	
324	図52		石帯	井戸	F41R059	F41R PM・PN	掘形 -20cm
325	図52		石帯		F31S034	F31S TP	
326	図52		石帯			F31U	掘削時
327	図52	頁岩	硯		F31R043	F31R SO・TO	北半部 D
328	図52	粘板岩	硯	池	F51C004	F51D AP・AQ	
329	図52	滑石	石釜	溝	F31V008	F31W VL	3層
330	図53		土錘		F41A015	F41A BE・CE	
331	図53		土錘	溝	F31V019	F31W XO	
332	図53		土馬	溝	F31V019	F31W XL	
333	図53		土馬	方形土壇	F41N011	F41M KN	
334	図53		土馬		F41G017	F41G HF	
335	図53		土馬		F41B097	F41B DH	
336	図53		土馬		F31W061	F31W WO・VO	

遺物番号	掲載図	種類	形態	遺構名	遺構番号	地区名	層位
337	図 53		土馬	方形土墳	F41N011	F41N KR	2層
338	図 53	須恵器	硯		F31X016	F31X US	
339	図 53	灰釉陶器	硯	溝	F41F040	F41G HH	1層
340	図 53	瓦	紡錘車	井戸	F41S013	F41S TS	枠内
341	図 53	須恵器	鼓胴?		F41M035	F41C AN・CN	
342	図 54	銅	神功開寶	北湿地		F41A AA	1層最上部
343	図 54	銅	神功開寶	溝	F31V019	F31W XM	
344	図 54	銅	隆平永寶	土器溜	F31U058	F31U UE	U059 東半分
345	図 54	銅	隆平永寶	井戸	F41E005	F41E DV・EV	枠内
346	図 54	銅	富寿神寶	井戸	F41E005	F41E DV・EV	枠内
347	図 54	銅	祥符通寶		F45E006	E45E BW	
348	図 54	銅	元祐通寶	井戸	F41R059	F41R PN	枠内青灰色泥土
349	図 54	銅	洪武通寶		F41B118	F41B BJ	
350	図 54	銅	光緒通寶			F31W VK	付近清掃時
351	図55・56	縄文	甕	北湿地		F31U WB	3層(砂礫)
352	図55・56	縄文	甕	北湿地		E35Y YW	3層・砂礫
353	図 55	縄文	鉢	南湿地		E45J	X820 沿い 3層
354	図 55	縄文	甕		E45J027	E45E BV～EV	
355	図 55	縄文	甕	南湿地		E45J	X820 沿い 3層
356	図 55	縄文	鉢	北湿地		F31U VB	3層・砂層
357	図 56	縄文	甕	北湿地		F31U WB	3層(砂礫)
358	図 56	縄文	甕	北湿地		E35Y	清掃中
359	図 56	縄文	甕	北湿地		F31Q TG	3層
360	図 56	縄文	甕	北湿地		E35Y XW	3層
361	図 56	縄文	鉢	北湿地		E35Y YW	3層・砂礫
362	図 56	縄文	甕	北湿地		E35Y VY	3層・砂礫
363	図 56	縄文	鉢	北湿地		E35Y XX	3層・砂礫
364	図 56	縄文	甕	南湿地		E45J JU	3層
365	図 56	縄文	甕	南湿地		E45J IV	4層
366	図 56	縄文	甕	南湿地		E45J FU	4層
367	図 56	縄文	甕	南湿地		E45J FU	3層
368	図 56	縄文	甕			E45J	あげ土
369	図 56	縄文	甕	南湿地		E45E EU	2層
370	図 56	縄文	甕	北湿地		E35Y YW	3層・砂礫
371	図 56	縄文	甕	北湿地		F41A AA	3層 砂層
372	図 56	縄文	甕	北湿地		F31Q TG	3層 細砂層
373	図 57	弥生	壺	北湿地		F31Q TG	3層 細砂層
374	図 57	弥生	壺	北湿地		E45E AW	2層
375	図 57	弥生	壺	北湿地		F31U VC	3層・砂層
376	図 57	弥生	蓋	北湿地		F31U VE	1層
377	図 57	弥生	壺	北湿地		F31V UF	3層(肩口砂礫)
378	図 57	弥生	鉢	北湿地		F31U WA	2層

遺物番号	掲載図	種類	形態	遺構名	遺構番号	地区名	層位
379	図 57	弥生	高杯	北湿地		F31P TB	3層 砂・泥土五層
380	図 57	弥生	高杯		E45E020	F41A CA	
381	図 57	弥生	甕	北湿地		F31U WD	1層
382	図 57	弥生	甕		E45E020	F41A CA	
383	図 57	弥生	甕	北湿地		E35Y XY	3層
384	図 57	弥生	甕	北湿地		E45E AX	3層 砂礫
385	図 57	弥生	高杯	北湿地		F31U WC	2層
386	図 57	弥生	高杯	北湿地		F31Q TG	3層
387	図 57	弥生	鉢	北湿地		E35Y XY	3層
388	図 57	弥生	鉢	北湿地		F31V UG	3層
389	図 57	弥生	壺	北湿地		F31U UC	2層
390	図 57	弥生	壺	北湿地		E35Y YY	3層
391	図 58	土師器	壺	北湿地		E35Y XY	3層
392	図 58	土師器	壺	北湿地		E35Y YY	断ち割り
393	図 58	土師器	高杯	北湿地		F31U XD	3層 最下層
394	図 58	土師器	小壺	北湿地		E45E AY	3層
395	図 58	土師器	壺	北湿地		E45E AX	2層
396	図 58	土師器	甕	北湿地		F31U WA	2層
397	図 58	土師器	甕	北湿地		E45E AX	2層
398	図 58	土師器	壺	北湿地		E45E AW	3層
399	図 58	土師器	甕	北湿地		E35Y YV	断ち割り
400	図 58	土師器	高杯	北湿地		E45E AW	3層
401	図 58	須恵器	杯蓋	北湿地		E45E BY	2層
402	図 58	須恵器	杯蓋	北湿地		F31U VE	1層
403	図 58	須恵器	杯蓋	北湿地		E45E BX	1層最上部
404	図 58	須恵器	杯蓋	北湿地		E45E AV	2層
405	図 58	須恵器	杯蓋	北湿地		E45E AX	3層
406	図 58	須恵器	杯蓋	北湿地		E45E AX	2層
407	図 58	須恵器	杯身	北湿地		F31U WD	1層最上部
408	図 58	須恵器	杯身	北湿地		E45E BX	2層
409	図 58	須恵器	杯身	北湿地		F41A BA	3層 砂層
410	図 58	須恵器	杯身	北湿地		E45E AX	2層
411	図 58	須恵器	杯身		E45E020	E45E CX	
412	図 58	土師器	杯	土器溜	F31U057	F31U UD・UE	敷石下部の砂層
413	図 59	アカガシ	鍬	北湿地		E45E AX	2層
414	図 59	スギ	木槽	北湿地		E35Y XY	3層
415	図 59	コウヤマキ	篋	北湿地		E35Y YW	3層
416	図 60	安山岩	石鏃		F31V071	F31Q TJ	
417	図 60	安山岩	石鏃	土器溜	F31U057	F31U UD	湿地上面
418	図 60	緑泥片岩	石斧			E450 KU	3層
419	図 60	粘板岩	石包丁	北湿地		E45E AW	3層 砂礫
420	図 60	安山岩	石屑		F41M034	F41H FO	

遺物番号	掲載図	種類	形態	遺構名	遺構番号	地区名	層位
421	図 60	安山岩	石屑	南湿地		E45J IW	2層
422	図 60	安山岩	石屑	溝	F41A009	F41F HE	
423	図 60	安山岩	石屑	北湿地		E45E AV	2層
424	図 60	安山岩	石屑		E45J027	E45E BV ~ EV	
425	図 60	安山岩	石屑	北湿地		E35Y YV	3層 砂礫
426	図 60	安山岩	石屑	南湿地		E45E DU	2層
427	図 61	石英安山岩	石棒	北湿地		E35Y XW	3層
428	図 61	粘板岩	石錘	北湿地		F41A AB	2層
429	図 61	頁岩	石錘	北湿地		F41F FA	3層
430	図 61		砥石	南湿地		E450 KV	3層
431	図 61		叩台	方形土壇	E45J042	E45J FX・GX	
432	図 61	細粒花崗岩	擦石	北湿地		F31U XC	3層
433	図 61		叩石	北湿地		E45E DU	2層
434	図 61	石英斑岩	石皿	南湿地		E45J GU	最下層
435	図 62	瓦	平	北湿地		E45E AX	1層
436	図 62	瓦	平	土器溜	F31U060	F31U UE	湿地上面
437	図版 16	土師器	椀	土器溜	F31U061	F31U UD	
438	図版 16	土師器	椀	土器溜	F31U058	F31U UD	湿地上面
439	図版 16	土師器	椀	土器溜	F31U061	F31U UD	
440	図版 16	土師器	椀	土器溜	F31U061	F31U UD	
441	図版 16	土師器	椀	土器溜	F31U059	F31U UE	東半分
442	図版 16	土師器	椀	土器溜	F31U058	F31U UD	湿地上面
443	図版 16	土師器	椀	土器溜	F31U059	F31U UD・UE	湿地上面
444	図版 16	土師器	椀	土器溜	F31U058	F31U UD	湿地上面
445	図版 16	土師器	椀	土器溜	F31U059	F31U UD・UE	湿地上面
446	図版 16	土師器	杯	土器溜	F31U058	F31U UD	湿地上面
447	図版 16	土師器	杯	土器溜	F31U058	F31U UD	湿地上面
448	図版 16	土師器	杯	土器溜	F31U059	F31U UE	東半分
449	図版 16	土師器	杯	土器溜	F31U059	F31U UE	東半分
450	図版 16	土師器	杯	土器溜	F31U061	F31U UD	
451	図版 16	土師器	杯	土器溜	F31U058	F31U UD	
452	図版 16	土師器	杯	土器溜	F31U058	F31U UD	
453	図版 16	土師器	杯	土器溜	F31U058	F31U UD	
454	図版 16	土師器	皿	土器溜	F31U059	F31U UE	東半分
455	図版 16	土師器	皿	土器溜	F31U059	F31U UD・UE	湿地上面
456	図版 16	土師器	皿	土器溜	F31U061	F31U UD	
457	図版 16	土師器	皿	土器溜	F31U058	F31U UD	
458	図版 16	土師器	皿	土器溜	F31U059	F31U UE	東半分
459	図版 16	土師器	皿	土器溜	F31U059	F31U UD・UE	湿地上面
460	図版 16	土師器	皿	土器溜	F31U059	F31U UD	湿地上面
461	図版 16	土師器	皿	土器溜	F31U059	F31U UE	東半分
462	図版 16	土師器	皿	土器溜	F31U059	F31U UE	東半分

遺物番号	掲載図	種類	形態	遺構名	遺構番号	地区名	層位
463	図版 16	土師器	皿	土器溜	F31U059	F31U UD・UE	湿地上面
464	図版 16	土師器	皿	土器溜	F31U061	F31U UD	
465	図版 16	土師器	椀	土器溜	F31U058	F31U UD	湿地上面
466	図版 16	土師器	杯蓋	土器溜	F31U058	F31U UD	湿地上面
467	図版 16	土師器	杯	土器溜	F31U061	F31U UD	
468	図版 16	土師器	杯	土器溜	F31U058	F31U UD	湿地上面
469	図版 16	土師器	杯	土器溜	F31U059	F31U UD・UE	湿地上面
470	図版 16	土師器	杯	土器溜	F31U061	F31U UD	
471	図版 16	土師器	杯蓋	土器溜	F31U061	F31U UD	
472	図版 16	土師器	杯	土器溜	F31U058	F31U UD	湿地上面
473	図版 16	土師器	杯	土器溜	F31U060	F31U UE	湿地上面
474	図版 16	土師器	杯	土器溜	F31U061	F31U UD	
475	図版 16	黒色土器	杯	土器溜	F31U060	F31U UE	湿地上面
476	図版 16	黒色土器	杯	土器溜	F31U060	F31U UE	湿地上面
477	図版 16	黒色土器	杯	土器溜	F31U060	F31U UE	湿地上面
478	図版 16	黒色土器	杯	土器溜	F31U058	F31U UD	湿地上面
479	図版 16	須恵器	鉢	土器溜	F31U060	F31U UE	湿地上面
480	図版 16	須恵器	杯	土器溜	F31U058	F31U UD	湿地上面
481	図版 17	土師器	椀	溝	F31V019	F31W XO	
482	欠番						
483	図版 17	土師器	椀	溝	F31V019	F31W XK	
484	図版 17	土師器	椀	溝	F31V019	F31W XM	
485	図版 17	土師器	杯	溝	F31V019	F31W XN	
486	図版 17	土師器	杯	溝	F31V019	F31W XO	
487	図版 17	土師器	杯	溝	F31V019	F31W XM	
488	図版 17	土師器	皿	溝	F31V019	F31V XJ	
489	図版 17	土師器	皿	溝	F31V019	F31W XK	
490	図版 17	土師器	皿	溝	F31V019	F31W XM	
491	図版 17	土師器	皿	溝	F31V019	F31W XO	
492	図版 17	須恵器	杯	溝	F31V019	F31W XM	
493	図版 17	須恵器	杯	溝	F31V019	F31W XM	
494	図版 17	須恵器	杯	溝	F31V019	F31W XM	
495	図版 17	須恵器	杯	溝	F31V019	F31W XM	
496	図版 17	須恵器	蓋	溝	F31V019	F31W XM	
497	図版 17	須恵器	蓋	溝	F31V019	F31W XM	
498	図版 17	須恵器	杯蓋	溝	F31V019	F31W XM	
499	図版 17	須恵器	短頸壺	溝	F31V019	F31W XM	
500	図版 17	須恵器	瓶子	溝	F31V019	F31W XM	
501	図版 17	須恵器	瓶子	溝	F31V019	F31W XM	
502	図版 17	土師器	杯蓋	溝	F31V019	F31W XM	
503	図版 17	灰釉陶器	壺	溝	F31V019	F31W XM	
504	図版 17	土師器	甕	溝	F31V019	F31W XL	

遺物番号	掲載図	種類	形態	遺構名	遺構番号	地区名	層位
505	図版 17	土師器	甕	溝	F31V019	F31W XM	
506	図版 17	土師器	甕	溝	F31V019	F31W XM	
507	図版 17	土師器	椀	土器溜	F410019	F410 NU	2層
508	図版 17	土師器	椀	土器溜	F410019	F410 NU	2層
509	図版 17	土師器	椀	土器溜	F410019	F410 NU	2層
510	図版 17	土師器	椀	土器溜	F410019	F410 NU	2層
511	図版 17	土師器	椀	土器溜	F410019	F410 NU	2層
512	図版 17	土師器	椀	土器溜	F410019	F41N NS	
513	図版 17	土師器	杯	土器溜	F410019	F41N NT	
514	図版 17	土師器	杯	土器溜	F410019	F410 NU	2層
515	図版 17	土師器	短頸壺	土器溜	F410019	F41N NS	
516	図版 17	土師器	短頸壺	土器溜	F410019	F410 NU	2層
517	図版 17	土師器	皿	土器溜	F410019	F41N NT	
518	図版 17	土師器	皿	土器溜	F410019	F410 NU	2層
519	図版 17	土師器	皿	土器溜	F410019	F41N OT	
520	図版 17	土師器	皿	土器溜	F410019	F410 NU	2層
521	図版 17	須恵器	杯蓋	土器溜	F410019	F41N OT	
522	図版 17	須恵器	蓋	土器溜	F410019	F41N OT	
523	図版 17	須恵器	蓋	土器溜	F410019	F41N OT	
524	図版 17	須恵器	壺蓋	土器溜	F410019	F41N NT	
525	図版 17	須恵器	杯	土器溜	F410019	F410 NU	2層
526	図版 17	須恵器	杯	土器溜	F410019	F41N OS	
527	図版 17	灰釉陶器	平瓶	土器溜	F410019	F41N OS	
528	図版 17	土師器	甕	土器溜	F410019	F41N OT	
529	図版 17	黒色土器	皿	土器溜	F410019	F41N OS	
530	図版 17	黒色土器	皿	土器溜	F410019	F41N OS	
531	図版 17	須恵器	鉢	土器溜	F410019	F41N OT	
532	図版 18	土師器	椀	井戸	F41S013	F41S TS	粹内
533	図版 18	土師器	椀	井戸	F41S013	F41S TS	粹内
534	図版 18	土師器	椀	井戸	F41S013	F41S TS	粹内
535	図版 18	土師器	椀	井戸	F41S013	F41S TS	粹内
536	図版 18	土師器	椀	井戸	F41S013	F41S TS	粹内
537	図版 18	土師器	椀	井戸	F41S013	F41S TS	粹内
538	図版 18	土師器	椀	井戸	F41S013	F41S TS	粹内
539	図版 18	土師器	椀	井戸	F41S013	F41S TS	粹内
540	図版 18	土師器	椀	井戸	F41S013	F41S TS	粹内
541	図版 18	土師器	椀	井戸	F41S013	F41S TS	粹内
542	図版 18	土師器	椀	井戸	F41S013	F41S TS	粹内
543	図版 18	土師器	椀	井戸	F41S013	F41S TS	粹内
544	図版 18	土師器	椀	井戸	F41S013	F41S TS	底部
545	図版 18	土師器	椀	井戸	F41S013	F41S TS	粹内
546	図版 18	土師器	椀	井戸	F41S013	F41S TS	粹内

遺物番号	掲載図	種類	形態	遺構名	遺構番号	地区名	層位
547	図版 18	土師器	杯	井戸	F41S013	F41S TS	粹内
548	図版 18	土師器	杯	井戸	F41S013	F41S TS	粹内
549	図版 18	土師器	杯	井戸	F41S013	F41S TS	粹内
550	図版 18	土師器	杯	井戸	F41S013	F41S TS	粹内
551	図版 18	土師器	杯	井戸	F41S013	F41S TS	粹内
552	図版 18	土師器	皿	井戸	F41S013	F41S TS	粹内
553	図版 18	土師器	皿	井戸	F41S013	F41S TS	粹内
554	図版 18	土師器	皿	井戸	F41S013	F41S TS	粹内
555	図版 18	土師器	皿	井戸	F41S013	F41S TS	粹内
556	図版 18	土師器	皿	井戸	F41S013	F41S TS	粹内
557	図版 18	土師器	皿	井戸	F41S013	F41S TS	粹内
558	図版 18	土師器	皿	井戸	F41S013	F41S TS	粹内
559	図版 18	土師器	皿	井戸	F41S013	F41S TS	粹内
560	図版 18	土師器	皿	井戸	F41S013	F41S TS	粹内
561	図版 18	土師器	皿	井戸	F41S013	F41S TS	粹内
562	図版 18	土師器	皿	井戸	F41S013	F41S TS	粹内
563	図版 18	土師器	皿	井戸	F41S013	F41S TS	粹内
564	図版 18	土師器	杯	井戸	F41S013	F41S TS	粹内
565	図版 18	土師器	杯	井戸	F41S013	F41S TS	粹内
566	図版 18	土師器	小甕	井戸	F41S013	F41S TS	粹内
567	図版 18	緑釉陶器	椀	井戸	F41S013	F41S TS	粹内
568	図版 18	緑釉陶器	皿	井戸	F41S013	F41S TS	粹内
569	図版 18	緑釉陶器	椀	井戸	F41S013	F41S TS	粹内
570	図版 18	緑釉陶器	椀	井戸	F41S013	F41S TS	粹内
571	図版 18	緑釉陶器	椀	井戸	F41S013	F41S TS	粹内
572	図版 18	緑釉陶器	椀	井戸	F41S013	F41S TS	粹内
573	図版 18	緑釉陶器	椀	井戸	F41S013	F41S TS	粹内
574	図版 18	緑釉陶器	椀	井戸	F41S013	F41S TS	粹内
575	図版 18	須恵器	杯蓋	井戸	F41S013	F41S TS	粹内
576	図版 18	須恵器	杯	井戸	F41S013	F41S TS	粹内
577	図版 18	須恵器	椀	井戸	F41S013	F41S TS	粹内
578	図版 18	灰釉陶器	椀	井戸	F41S013	F41S TS	粹内
579	図版 18	須恵器	壺	井戸	F41S013	F41S TS	粹内
580	図版 18	須恵器	瓶子	井戸	F41S013	F41S TS	粹内
581	図版 18	土師器	高杯	井戸	F41S013	F41S TS	粹内
582	図版 18	土師器	高杯	井戸	F41S013	F41S TS	粹内
583	図版 18	土師器	高杯	井戸	F41S013	F41S TS	粹内
584	図版 18	土師器	甕	井戸	F41S013	F41S TS	粹内
585	図版 18	土師器	甕	井戸	F41S013	F41S TS	粹内
586	欠番						
587	図版 18	土師器	甕	井戸	F41S013	F41S TS	粹内
588	図版 19	瓦	軒丸	建物	F41S009	F41S TT	

遺物番号	掲載図	種類	形態	遺構名	遺構番号	地区名	層位
589	図版 19	瓦	軒丸	土器溜	F410019	F41N OT	
590	図版 19	瓦	軒丸	土器溜	F410019	F41N OS	
591	図版 19	瓦	軒丸	北湿地		F31U UE	上面清掃中
592	図版 19	瓦	軒丸		F31W065	F31W WM・VM	
593	図版 19	瓦	軒丸			F41A XM	
594	図版 19	瓦	軒丸	北湿地		F31U VC	第1層
595	図版 19	瓦	軒丸		F31V064	F31V UJ	
596	図版 19	瓦	軒丸	建物	F51E007	F51E AU	
597	図版 19	瓦	軒丸	溝	F41A009	F41A BE	
598	図版 19	瓦	軒丸	溝	F31V019	F31V XJ	
599	図版 20	瓦	軒平	建物	F41S018	F41S RS	
600	図版 20	瓦	軒平	井戸	F41S013	F41S TS	枠内
601	図版 20	瓦	軒平	北湿地		F31U UD	1層最上部
602	図版 20	瓦	軒平	溝	F31V019	F31W XO	
603	図版 20	瓦	軒平	北湿地		F31U UD	1層最上部
604	図版 20	瓦	軒平	方形土壌	F41N011	F41N KP	2層
605	図版 20	瓦	軒平	北湿地		E45E BU	2層
606	図版 20	瓦	軒平			F31U XM	表採
607	図版 20	瓦	軒平	井戸	F41E005	F41E DV・EV	枠内
608	図版 20	瓦	軒平	井戸	F41E005	F41E DV・EV	枠内
609	図版 20	瓦	軒平		F41H043	F41H HL・HM	
610	図版 21	瓦	軒丸	濠	F51B016	F41V YH・YI	2層
611	図版 21	瓦	軒丸			F31Q TF	清掃中
612	図版 21	瓦	軒丸	溝	F31V008	F31U VD	1層
613	図版 21	瓦	軒丸	溝	F31V008	F31W VM	1層
614	図版 21	瓦	軒丸	溝	F31V008	F31U VA	1層
615	図版 21	瓦	軒丸	溝	F31V008	F31V VD	2層
616	図版 21	瓦	軒丸		F31R016	F31R SM	
617	図版 21	瓦	軒丸				表採
618	図版 21	瓦	軒丸	北湿地		F31U XM	茶灰色泥砂
619	図版 21	瓦	軒丸	瓦溜	F31R002	F31R TL	
620	図版 21	瓦	軒丸	瓦溜	F31R002	F31R TL	
621	図版 21	瓦	軒丸	溝	F31V008	F31V VJ	1層
622	図版 21	瓦	軒丸	瓦溜	F31R002	F31R TN	南半部
623	図版 21	瓦	軒丸		F31S023	F31S SP	
624	図版 21	瓦	軒丸	溝	F31V008	F31V VJ	2層
625	図版 21	瓦	軒丸	溝	F31V008	F31X VP	下層 泥土
626	図版 22	瓦	軒平			E35Y	掘削後清掃時
627	図版 22	瓦	軒平			F31W VN	付近清掃中
628	図版 22	瓦	軒平	溝	F31V008	F31Y VV	1層
629	図版 22	瓦	軒平	北湿地		F31U UE	上面
630	図版 22	瓦	軒平			E55E AU	1層

遺物番号	掲載図	種類	形態	遺構名	遺構番号	地区名	層位
631	図版 22	瓦	軒平	井戸	F41C068	F41C CN	2層
632	図版 22	瓦	軒平	井戸	F41C068	F41C CN	2層
633	図版 22	瓦	軒平	溝	F31V008	F31W VO	1層
634	図版 22	瓦	軒平		F31W063	F31W WN	
635	図版 22	瓦	軒平	井戸	F41C068	F41C CN	2層
636	図版 22	瓦	軒平	井戸	F41C068	F41C CN	1層
637	図版 22	瓦	軒平	溝	F31V008	F31V VI	1層
638	図版 22	瓦	軒平	北湿地		F31U UE	茶灰色砂泥上面
639	図版 22	瓦	軒平	井戸	F41C068	F41C CN	2層
640	図版 22	瓦	軒平	井戸	E45J040	E45J FX	1層
641	図版 22	瓦	軒平		F31X017	F31X UR	
642	図版 22	瓦	軒平		F41N009	F41I FR ~ JR	
643	図版 22	瓦	軒平	井戸	F41C068	F41C CN	1層
644	図版 23	瓦	軒平	井戸	F41C068	F41C CN	2層
645	図版 23	瓦	軒平		F31S023	F31S SP	
646	図版 23	瓦	軒平	瓦溜	F31R002	F31R TL	
647	図版 23	瓦	軒平	瓦溜	F31R002	F31R TL	
648	図版 23	瓦	軒平	溝	F31V008	F31W VM	1層
649	図版 23	瓦	軒平	瓦溜	F31R002	F31R TL	
650	図版 23	瓦	軒平	瓦溜	F31R002	F31R TL	
651	図版 23	瓦	軒平	瓦溜	F31R002	F31R TL	
652	図版 23	瓦	軒平	瓦溜	F31R002	F31R TL	
653	図版 23	瓦	軒平		F41C017	F41C CK・CL	
654	図版 23	瓦	軒平		F31S038	F31S SP	
655	図版 23	瓦	軒平	瓦溜	F31R002	F31R TL	
656	図版 23	瓦	軒平	瓦溜	F31R002	F31R TL	
657	図版 23	瓦	軒平	瓦溜	F31R002	F31R TL	
658	図版 24	イスノキ	櫛		F31T083	F31T SV	
659	図版 24	イスノキ	櫛	井戸	F41S013	F41S TS	枠内
660	図版 24	イスノキ	櫛	井戸	F41S013	F41S TS	枠内
661	図版 24	ツゲ	櫛	井戸	E45J018	E45J JX	
662	図版 24	カキノキ	木球	井戸	E45J040	E45J FX	
663	図版 24	二葉マツ	木球	北湿地		F31U XB	1層
664	図版 24	カキノキ	木球	井戸	E45J040	E45J FX	
665	図版 24	カキノキ	木球	井戸	E45J040	E45J FX	
666	図版 24	カキノキ科	小刀柄	井戸	E45J040	E45J FX	3層
667	図版 24		用途不明	濠	F51B016	F41V YH・YI	2層
668	図版 24	スギ	形代	北湿地		E35Y XW	1層
669	図版 24	ケヤキ	蓋	北湿地		F41A AA	1層最上層
670	図版 24	トチノキ	鉢	井戸	F41C068	F41C CN	2層
671	図版 24	ケヤキ	壺	北湿地		E35Y WY	1層最上層
672	図版 24	クリ	椀	井戸	E450008	F410 KU・LU	

遺物番号	掲載図	種類	形態	遺構名	遺構番号	地区名	層位
673	図版 24	ヒノキ	曲物	北湿地		E35Y XY	1層最上層
674	図版 24	ヒノキ	曲物	井戸	F41A036	F41A AC	枠内
675	図版 24	スギ	用途不明	濠	F51B016	F41V YI	2層
676	図版 24	スギ	形代	北湿地		E45E AU・AW	1層最上層
677	図版 24	ヒノキ	斎串	濠	F51B016	F41V YH・YI	2層
678	図版 24	ヒノキ	箸	井戸	E45J018	E45J JX	
679	図版 24		箸	井戸	E45J018	E45J JX	
680	図版 24	ヒノキ	箸	井戸	E45J018	E45J JX	
681	図版 24	ツガ	箸	井戸	E45J018	E45J JX	
682	図版 24	ヒノキ	箸	井戸	E45J018	E45J JX	
683	図版 24	ヒノキ	箸	井戸	E45J018	E45J JX	
684	図版 24	スギ	箸	井戸	E45J018	E45J JX	
685	図版 24	ヒノキ	箸	井戸	E45J018	E45J JX	
686	図版 24	ヒノキ	箸	井戸	E45J018	E45J JX	
687	図版 24	ヒノキ	曲物	井戸	F41E005	F41E DV・EV	枠内
688	図版 24	ヒノキ	曲物	北湿地		E45E AU・AW	1層最上層
689	図版 24	ヒノキ	曲物	井戸	F41C068	F41C CN	3層
690	図版 24	スギ	用途不明	北湿地		E45E AU・AW	1層最上層
691	図版 24	スギ	用途不明	北湿地		E45E AU・AW	1層最上層
692	図版 24	ヒノキ	用途不明	北湿地		E35Y XW	3層
693	図版 24	ヒノキ	用途不明	北湿地		E35Y XW	3層
694	図版 25	ヒノキ科	田下駄	北湿地		F31U UD	1層
695	図版 25	ヒノキ科	田下駄	北湿地		F31U UD	1層
696	図版 25	ヒノキ	田下駄	北湿地		E45E AW	
697	図版 25	ヒノキ	下駄			E45E	清掃時
698	図版 25	ニレ属	下駄	北湿地		E35Y XX	1層
699	図版 25	クリ	下駄	井戸	F41B082	F41B DE・DF	
700	図版 25	ヒノキ	下駄	北湿地		E45E AU・AW	1層最上層
701	図版 25	スギ	用途不明	井戸	F41A036	F41A AC	掘形
702	図版 25	スギ	用途不明	井戸	F41A036	F41A AC	掘形
703	図版 25	ヒノキ	用途不明	北湿地		E35Y XW	1層
704	図版 25	ヒノキ	用途不明	北湿地		E45E AW	2層
705	図版 25	スギ	建築部材	濠	F51B016	F41V YI	
706	図版 25	スギ	用途不明	濠	F51B016	F41V YI	2層
707	図版 25	アカガシ亜属	用途不明	北湿地		F31U YC	2層
708	図版 25	ヒノキ科	柄杓	井戸	F41B082	F41B DE・DF	
709	図版 25	スギ	用途不明	北湿地		F41A AA	1層最上層
710	図版 25		鋤柄	北湿地		F31U VA	2層
711	図版 25	ヒノキ	用途不明			F31U	清掃時
712	図版 25	アカガシ亜属	鋤	井戸	F41R059	F41R NP	掘形